

湯液の脈診目次

総論（１）脈

当流の医学修行は乱世のいくさ稽古に同じ。

総論（２）人迎気口湯液脈診法

左手の人迎、かたかたひとえに大なるは、外邪の病なり。

（１）陰経傷寒

悪寒発熱、大渴引飲、脱汗、脈沈微。

（２）裏寒虚証

風邪なら、やっぱり葛根湯でしょ？

（３）内傷発熱

右の気口の脈は、左の人迎に一倍。

（４）疝積

背痛に緩急あり。尿不利。面青黄。心下痞不食。

（５）寒疝

胆嚢炎の炎の字は見当たらず。

（６）附子粳米湯

心復切痛。痛み去って積はその形を顕わす。

（７）偏弦は飲也

挾飲の傷寒、悪寒発熱、左手は浮、右手は沈。

（８）骨鯁

嘘か真か、骨が咽に刺さり命を落とす人、年に数十人有りとか。

（９）婦人血枯経閉

ダイエットは恐るべし。血は枯れて経水断つ。

（１０）食鬱成塊

腹痛激甚、気口の沈実は食鬱なり。

（１１）腹満便秘

膨満甚だしく、脚はヨタヨタ、寝たり起きたり。

- (12) 瘀血腹満
左関甚だしく大。血実の腹満。
- (13) 血分腫
面目はれて脈洪有力。?血の浮腫。
- (14) 癲癩様の発作
寒湿入脾、身体拘急失神、脈沈緊。
- (15) 奔豚
脈浮滑。坐して跳躍し止まず。
- (16) 怒気胸悶気塞
気持ちは分かるが、怒っちゃいけない心臓に悪い。
- (17) 産後下痢
出産しても妊娠しても、何故か下痢。
- (18) 陰証発疹
風と湿と寒とが相搏、皮疹を発す。脈は浮虚洪遅。
- (19) 白朮附子湯
眩暈、大きな出来物、脈は浮虚遅。
- (20) 風湿眩暈
メマイが始まると、何んにもする気がしなくなる。
- (21) 六味回陽飲
歩行は難しく、遺尿失禁。脾腎両虚。
- (22) 痰核
目の中に土手。脈は弦滑。
- (23) 電話で脈診
最初、大きいのが幾つか。止まって、今度は小さいのが、これに続く。
- (24) 肝虚失眠
韓、中、日の友好のために、劉さんの不眠を治す。

- (25) 喘息 (1)
胸肋が塞がって、呼気する能わず、ふくら雀の如し。
- (26) 喘息 (2)
標本は兼顧せず。肝の鬱を解し、?血を逐う。
- (27) 喘息 (3)
たくさん食べ始めたら、発作の前触れ。
- (28) パニック
口中カラカラ、冷や汗タラタラ、心臓ドキドキ。
- (29) 甘草瀉心湯
狐惑の病たるは、恐慌、嗄声、咳嗽して終夜眠らず。
- (30) できもの
七度の転居、表気は虚して、癬を病む。脈は短。
- (31) 十六味流気飲
肝膿瘍、気を行らして、病巢を打ち壊す。
- (32) アレルギー性鼻炎
鼻水、くしゃみ、目やに、目の痒み、両の寸脈は浮。
- (33) 胃弱体質
生来の胃弱、安中散を愛用して七年。
- (34) 前立腺肥大 (1)
何ぞ、左尺の脈は独り浮いて、甚だ大なるか?
- (35) 前立腺肥大 (2)
肝鬱脾虚、尿頻尿少、少腹重墜、脈弦緩。
- (36) 前立腺肥大 (3)
尿頻にして間に合わず。
- (37) 気虚脱肛
肛脱、不痛不痒。脈は細澁、わずかに弦。
- (38) 青瓢箪

飲食すること人に数倍。少しも肥らず。

(39) 保元湯

汗をかきやすく、冷えやすく、昏々と眠る。

(40) 神経衰弱

思慮太過、心脾を傷り、脈細失眠。

(41) 皮膚炎

イライラして心火、怒って肝火、火は上って、顔にも火がつく。

(42) 嗜睡

脈沈、自汗盗汗、突に入睡。

(43) 頭痛

風は頭目を攻め、上の瞼も腫れ、頭痛鼻塞。

(44) 虫さされ

虫に害され、風がなくても、疹は膨らむ。

(45) 口内炎

口舌痛んで、夜も寝られず、痛風の如し。

(46) 白芷升麻湯

癰の身の半ば以上に出る者は八風の変なり。

(47) 掌蹠膿胞症

手掌足跖に黄水を湛え、脈は気口大、血虚に兼ねて湿熱あり。

(48) 五十そら手

筋脈攣急すれば脈も引きつれ、索繩の如し。

(49) 和方

首から上の鼻、咽、舌、齒、耳は皆おかしくて、寒熱往来。

(50) 栝 湯萋根

咽つまり、肘も指も強ばって、頭痛胸悶、口中不快は帯下に属す。

(51) 自律神経失調症

耳塞がり、身は水中に在る如し。

- (52) 鎮肝熄風湯
レントゲン室から出たら、歩けるようになっていた。
- (53) 不整脈
胸満短気、一息三動。病は内傷か？ 外感か？
- (54) 痰飲脈結代
心下つまって、不食十五日。
- (55) 肝鬱脈結代
妬みと怒りで肝気は鬱塞。胃痛して脈結代。
- (56) 胸中不定
婦人小便不利、心中不穩、脈結代。
- (57) 心痛
弦緊大有力の脈が話中に急変して、参伍不調濡弱の脈になる。
- (58) 瘀血脈結代
脈細澁結代、胃痙攣、大便秘結。
- (59) 膀胱炎
脈は結代。下腹の不快は心臓の病に連なる。
- (60) 心肺気虚、脈結代
お隣さんにも、かまってあげないと、心臓だけじゃ治らない。
- (61) 膝臓癌
虚と実と併び見われ、補いつつ攻める。
- (62) 百合
右手の脈を小さくして、右手の病を治す。
- (63) アトピー
半夏は気逆を治す。
- (64) 気虚血瘀
沙耶ちゃんのお母さん、若いのに神経痛？

- (65) 張錫純先生治喘一方
言われたら言い返す短期者、夜は喘息に苦しむ。
- (66) 夏枯草
耗陰耗気、目を損じて、なお肝火は消えず。
- (67) 血風瘡
搔破するも滲水は多からず、返って出血。
- (68) 正気天香湯
気のせいだから、あわてず騒がず、医者へも行かず。
- (69) 宮仕え
もう良い。疲れた。どうでも良い。みんな面倒だ。
- (70) 癩症眼
正面より周りが見え過ぎて。
- (71) 婦人臀痛
痛いのは腰じゃない。お尻。
- (72) 瘀血泄瀉
脈沈澁有力。下痢止まず。
- (73) 瘀血嘔吐
脈澁有力。薬を吐し食を吐し、常に嘔気して止まず。
- (74) 花癩
わたし、A君と結婚したんだ。もうすぐ、赤ちゃんも産まれるよ。
- (75) 面熱
面熱眩暈、自汗足冷、人迎浮大は陽明の風熱。
- (76) 蕁麻疹
風は左寸に表れて、なぜか人迎に表れず。
- (77) 沢蘭
さすが本物。肝鬱にもちゃんと効く。
- (78) 山茱萸 (1)

頭に発疹、小豆の如く。なぜか頭は凸凹。

(79) 山茱萸 (2)

証を弁じ治を論じ、勘定合っても、銭は足らず。

(80) 一味芍薬湯

桂枝湯から桂枝、甘草、生姜、大棗を去って芍薬を残す。

[索引] 処方及び薬物名の索引

[漢方臨床小説]

湯液の脈診

はじめに

(一) 脈

(二) 人迎気口湯液脈診法

(一) 脈

当流の医学修行は乱世のいくさ稽古に同じ。

脈診は、時に外感を以て論じ、時に臟腑を以て論じ、時によって、違ったルールを持ち出す。

例えば右寸の浮。表に邪気有りと言うかと思えば、肺に病ありと言い、更には肝脈の弱に絡めて右寸の浮は四物湯かも知れないと言う。幾つもの規範を時によって使い分けている。一体、右寸という小さな部分に、何通りのルールを適用するのか。デタラメな脈の理論を運用して、デタラメにしない為には知識と経験と洞察力が必要である。

孫子は、軍事を論じ極めて合理的、实际的である。戦場では常に情報は完全ではないが、限られた情報から、本質を見抜く洞察力が要求される。もっともらしく見える情報を捨て、些細な兆候からその本質を捕らえる必要がある。

治病についても同様な精神が要求される。如何にも虚証に見え、脈は細洪弱。しかし、補気補血して脈が変わらなければ、虚ではない。急ぎ方針を転じ、細洪の脈を?血と読み変え、駆?血を試みる。もし?血であれば、気血を補わずして脈は幅も強さも増し、洪は緩に変わる。

投薬すれば脈は変化する。効果が無くても、脈の変化に注意して、病のスジを見抜く必要がある。

昔の医家。下痢に種々投薬するが下痢は止まらず、食欲もなくなり、次第に顔色も悪くなる。或いは虚寒かと温補に転じる。しかし効果がない。ただ仔細に脈を診れば桂皮や乾姜、附子を用いる時、脈かさが出来て脈長になる。そこで、やはり熱とする。遂に錢氏白朮散に思い至る。四君子湯に?香、葛根、木香を加えた処方である。陽虚ではなく、気虚で脾胃の虚熱であった。

病脈は身体の変調であり症候である。様々な原因の様々なタイプの頭痛が有るように、様々な浮や弦がある。何ゆえの弦か何ゆえの浮か論ずる必要がある。

脈診の方法や脈状の詳細については他書に譲るが、本書の読者の為に、簡単に脈と脈診

について私見を述べる。しかし、これは後で触れる人迎気口の脈診も含めて、言わば私の自己流の脈論である。当然、誤りや遺漏があると思う。世の具眼の士の目に留まる事が有れば、失笑を買うかも知れない。にも拘わらず、敢えてここに脈論を公開するのは、私がどれほど熱意を持って脈というものと関わって来たかという事を知って頂きたいからである。先ずは脈の名を挙げる。

浮、沈、遅、数、滑、洪、緩、緊、細、大、虚、実、長、短、
弦、洪、弱、藹、濡、軟、微、伏、結、代、散、牢、革、促、動。

[脈の相反]

浮と沈、遅と数、滑と洪、緩と緊、細と大、虚と実、長と短とは性質が相反する。同時に現れる事はあり得ない。つまり浮いていて沈とか、速くて遅いとか、緩やかで且つ緊などと言う脈は存在しない。

[浮と沈]

浮と沈は相反する。浮は重按すると弱くなるか小さくなる脈である。重按して、かえって脈が大きくなるか強くなるのが沈である。

緩、洪、芤、散の脈はすべて浮の要素を持っている。浮いて緩やかな脈は緩。浮いて勢いがあって大きい脈は洪。浮いて大きく力無く中空の脈は?。浮いて力無く形の定まらない脈は散である。

伏、牢の脈は深く隠れ、重按しなければ分からない沈の脈である。

[滑と洪]

滑と洪は相反する。滑はなめらか、洪はしぶる脈である。

滑は熱証、実証、痰といった有余の脈である。浮滑、沈滑、滑実、滑数、軟滑、弦滑として表れる。洪は気虚、血虚、脾虚、肝虚など不足の脈。そして湿邪の脈、?血の脈である。浮洪、沈洪、緩洪、弦洪、細洪、虚洪、軟洪、微洪、洪数、短洪などとなる。

私の言う濡も洪を含む。私が言う濡は浮軟大洪の脈で、私はこれを湿邪の脈としている。

○「洪」（濇）は澀の俗字。中国では洪の字の使用は稀。正しくは澀或いは?である。

[遅と数]

遅と数も相反する。私の言う遅数は一分間の脈拍数である。六十以下を遅。八十以上を数とする。時計が無ければ難しい。また一息何動というのも併用する。一息五動は平脈、一息四動以下は遅、一息六動以上は数である。これは伝統的な方法で、一分間の脈拍数と

は全く別な意味がある。一分間の脈拍数が同じく八十であっても、一息三動の者も一息六動の者もある。

古人は時計を使わなかった。従って私と古人とでは遅数の意味が違う。古人は尺脈が遅であるとか、左脈が遅であるとか言う。このような事は、一分間の脈拍数で遅数を決める場合には有り得ない。また古人が遅と言う時、沈遅有力の脈を指している事がある。それは脈状ではなく脈の名である。

〔脈状と脈名〕

浮脈について「之を按せば足らず、之を挙げば余りあり。」とすれば、単に浮いた「脈状」を言う者である。当然、有力の浮も無力の浮も有る。

しかし、「挙げれば指に満ち、按せば無きが如く、力無きを浮と言う。」は浮無力という脈状を、浮脈と名付ける「脈名」という事になる。多くの医書で脈名と脈状は混在している。

〔右手と左手〕

外感はず先左から侵入する。だから外感病では左脈に変化が顕れる。傷寒では左手が表、右手が裏である。そこで古人は、左脈が浮であれば外を解し、病が裏に入って左脈が沈実になれば下法を用いる。

雑病では左手は血、右手は気である。左脈が虚であれば血虚。右脈が虚であれば気虚。左脈が実であれば血実。右脈が実であれば気実。処方では、血虚は四物湯、気虚は四君子湯、血実は桃核承気湯、気実は承気湯である。

〔傷寒と雑病の脈〕

脈の六部（左右の寸関尺）は各々五臓の名を与えられている。雑病では右関の脈が弱いのを診て脾虚を疑い、左尺の虚を診て腎虚と見なす。

傷寒では、各部を個別に診ないで、ほとんど六部を一体に診る。傷寒の邪は一身の体表を覆っている。太陽の脈浮緊とは六部の全てが浮緊であって、左関だけ或いは右寸だけという訳ではない。

私の経験からすると、仲景の諸方の証では雑病に於いても六部一体の脈状を呈する事が多い。桂枝湯の浮、柴胡剤の弦、木防己湯の沈など、寸だけ浮、尺だけが沈という事ではない。

〔脈の上下〕

手の左右を表と裏、或いは気と血とする。実は寸と尺の間にも同様な関係がある。寸は尺より数センチ外に在るためか、外感病で寸は表、尺は裏である。

内傷病でも寸は肺心、尺は腎。或いは寸は頭面、尺は腰脚。同じく上下の位置に在る。

傷寒論には、尺の遲は榮氣不足血少で発汗出来ないとする文がある。ここでは寸は氣、尺は血である。

〔私の脈診法〕

私は、男女で左右を逆にして診る事はしない。各部を何菽の重さで診るという難經流の方法も試みたことがない。按じて最もよく分かる所を、その部の脈状とする。

古人は浮位で腑を候い、中位で胃氣を候い、沈位で臟を候うという。しかし腑に病變が有るときは、ことさら浮かべて診なくても、それを示す脈が出現する。その多くが浮滑、浮大、浮実である。

数年にわたり昼夜を問わず下腹に痛みを覚えるという婦人。痛みのため夜も安眠出来ない。痛みが消えるのは、排尿している間の極く短い時間だけである。脈は浮滑大であった。大きく非常にはっきり浮いており、脈に艶があり、如何にも腑病らしい脈であった。多汗と口渴もあり陽明病である。膀胱腑に邪氣ありとし、猪苓湯を与えて即治した。

実は、この例ではすべての脈が浮であるのに、侵入している邪氣の性質が分かるという左手の人迎の脈だけが沈濡であったので、膀胱腑に湿邪が侵入していると解した。人迎氣口の脈診法については、後ほど詳述する。

〔文献摘録〕

【内外傷辯】卷上（金・李東垣）

古人、脈上に内外傷を人迎氣口に辯じて、人迎の脈の氣口より大なるを外傷とし、氣口脈の人迎より大なるを内傷となす。この辯は固より是なり。ただその説に未だ尽くさざる所有のみ。

外感風寒は皆有余の証、是れ前より客邪来たる。その病は必ず左手に見わる。左手は表を主どる。

内傷飲食及び飲食不節、労役不節は皆不足の病なり。必ず右手に見わる。右手は裏を主どる。（後略）

【此事難知】卷下（元・王好古）

- 右手、雜病は之を表と為し、傷寒は之を裏と為す。
- 左手、雜病は之を裏と為し、傷寒は之を表と為す。
- 傷寒、元より表証の有る者、左手に下す証有りと言う可し。下証なる者は血証なり。当に足の厥陰中に之を求むべし。
- 雜病、元より表証の無き者、左手に下す証有りと言う可からず。只当に右手を言うべし。足の陽明中に之を求む。
- 仲景、浮は汗して沈は下す。右手の沈実は調胃、承氣。左手の沈実は桃仁、抵当。

○ 難経、沈は汗して浮は下す。右手の浮実は枳実、牽牛子。左手の浮実は桃仁、四順（内容不詳）。

（二）人迎気口湯液脈診法

左手の人迎、かたかたひとえに大なるは、外邪の病なり。

人迎気口の脈診法は三世紀に王叔和の脈経に登場する。十二世紀の宋代の三因方の頃から、外感と内傷を区別する脈診法として、注目されるようになった。十三世紀の金元時代には、内傷論の発展に伴い、更に大きな発展が見られた。

十六世紀の日本の医学は、明の医学の影響を強く受け、明に留学していた田代三喜に医学を学んだ曲直瀬道三の道三流では、この脈法を「湯液家の脈診法」として採用している。人迎気口の脈診とは、左右の手の寸と関の間にある、人迎と気口の脈を診る脈法である。左の寸と関の間を人迎と名付け、右の寸と関の間を気口と名付けている。具体的には、関脈を診る中指に添えて食指を降し、人迎或いは気口とする。つまり人迎と気口は関のすぐ上、寸のやや下に位置する。この位置を古人は関前一分と呼ぶ。寸と関と尺の間を各々三分割（合計九分）して、関の前一分を人迎と気口とする。左の関前一分が人迎、右の関前一分が気口である。

人迎は「外」である。身体の外の状態が解る。気口と比較して、人迎の方が大きければ、外から風寒の邪気が侵入している外感と考える。人迎の脈状を診れば、外から侵入している邪気の性質も分かる。

人迎の浮緊は傷寒。人迎の浮緩は傷風。人迎の浮虚は傷暑。人迎の浮濡は傷湿。人迎の沈濡は寒湿。

人迎の沈大は陰経傷寒。（陽経を飛び越えて、寒邪が直接陰経に侵入した傷寒。）

気口は「内」である。身体の内部的状態が解る。人迎と比較して、気口の方が大きければ、内部に問題があると解る。内傷の病という。気口の浮大は虚である。虚劳内傷、気虚、血虚である。気口の沈大は実である。内部に何か実体が存在する状態、積聚、食滯、溜飲、気滯である。

人迎と気口に大小の差がない事もある。外感病でも邪気が表から少陽に入ると、人迎と気口は左右差がなくなる。雑病では人迎気口の大小に差のない者は更に多くなる。

人迎と気口に大小の差がなければ、内外いずれが主要な矛盾であるか決め難い。その時は症状にも注目して治療方針を決める。例えば、人迎気口の左右差がなく、人迎浮緩、気口沈大である時。もし症状から気滯が疑われる様なら、人迎は置いて、気口の沈大を取り上げ、気口沈大を解消する治療をする。

外感湿邪の脈は細である。従って外感であっても湿邪では気口より人迎の方が小さい。人迎は沈細、沈濡、浮濡、浮細となり、気口は浮大、浮小、浮濡になる。そして外湿が裏で内飲と化せば、気口は沈大沈小の飲の脈を表す。内飲が多ければ多いほど、気口は沈となり大となる。気口沈大は内実である。

人迎と氣口の大小浮沈の關係は、概略は以下の様に解する。

人迎浮大で氣口浮小の者は、外感の風寒。

人迎浮小で氣口浮大の者は、虚勞内傷。

人迎沈大で氣口浮小の者は、陰經の傷寒。

人迎沈小で氣口浮大の者は、外感の湿邪。

人迎浮大で氣口沈小の者は、外感風寒に微飲を兼ねる者。

人迎浮小で氣口沈大の者は、積聚。食滯。溜飲。氣滯。

人迎沈大で氣口沈小の者は、裏寒と虚冷。

人迎沈小で氣口沈大の者は、積聚。食滯。溜飲。裏の水飲或いは氣滯に外感湿邪を兼ねる者。

人迎と氣口で大小の差がないものは、概ね以下の様に解する。

人迎氣口俱に浮大は実。

人迎氣口俱に浮小は虚。

人迎氣口俱に沈大は氣滯、水滯、食滯、積聚。

人迎氣口俱に沈小は虚冷。

人迎沈大で氣口浮大の者は、寒邪と勞倦。

人迎沈小で氣口浮小の者は、寒湿と氣虚。

人迎浮大で氣口沈大の者は、裏滯傷寒。挟飲傷寒。或いは裏滯が外感を装う者。

人迎浮小で氣口沈小の者は、湿邪に微飲を兼ねる者。

脈の浮沈。脈診では浮沈の見極めは最も難しいと言われる。実際、寸は多く浮であり、尺はほとんど沈である。浮が更に浮になり、沈が更に沈になっても、常の脈との差は僅かである。実は浮沈は人迎氣口の脈法で簡単に見極められる。古人も、浮沈の見極めは人迎氣口で行うと言っている。

浮脈。

人迎或いは氣口で、脈に触れて後、更に按じて脈が消失する、或いは小さくなる者は浮である。

沈脈。

人迎或いは氣口で、脈に触れて後、更に按じて脈が消失せず、強さや大きさが増す者は沈である。

[文献摘録]

【増補脈論口訣】卷一・左右の診察外感内傷（日本・元龜四年・雖知久齋道三）

口訣に曰く、左の手の寸と関との間を人迎と云。かたかたひとえに大なるは外邪の病なり。右の手の、寸と間の関の間を氣口と云。かたかたひとえに大なるは内傷の病なり。（後略）

【脈経】 卷一両手六脈所主五臟六腑陰陽逆順第七（晋・王叔和）

脈法讃に云う。肝心は左に出、脾肺は右に出、腎と命門はともに尺部に出る。魂魄穀神は皆、寸口に見われ、左は司官、右は司府を主どる。左大は男に順、右大は女に順。関前一分は人命の主、左は人迎、右は氣口をなす。神門の訣断は両つながら関後に在り。（後略）

【万病回春】（明・?廷賢） 卷上万金一統述

- 人迎脈緊盛にして大、氣口に一倍するは外感の風と寒となし、皆表に属し陽となし府となす。
- 氣口の脈大にして人迎に一倍し、脈緊盛は傷食となし勞倦となし、皆裏に属し陰となし臟となす。
- 人迎氣口ともに緊盛、これ挟食傷寒となし内傷外感となす。

【三因方】 卷一・五用乖違病脈（宋・陳無擇）

人迎緊盛なるは寒に傷られ、氣口緊盛なるは食に傷らる。

【三因方】 卷一・五臟傳變病脈

右手の関前一分、氣口たる者、以て臟氣の鬱発と胃氣とを兼ねて候う。（後略）

【三因方】 卷一・六経中傷病脈（一部節略）

左手の関前一分、人迎たる者、以て寒、暑、燥、湿、風、熱の人に中傷するを候う。（中略）

足の太陽の傷寒、左尺と人迎みな浮緊にして盛。
足の陽明の傷湿、右関と人迎みな?細にして長。
足の少陽の傷風、左関と人迎みな弦浮にして散。
手の少陽の傷暑、右尺と人迎みな洪虚にして数。
足の太陰の傷湿、右関と人迎みな濡細にして沈。
足の少陰の傷寒、左尺と人迎みな沈緊にして数。
足の厥陰の傷風、左関と人迎みな弦弱にして急。
手の厥陰の傷暑、右尺と人迎みな沈弱にして緩。

【三因方】 卷一脈偶名状

- 浮は、人迎と相応すれば風寒在経、氣口と相応すれば榮血虚損。
- 沈は、人迎と相応すれば寒伏陰経、氣口と相応すれば血凝腹臟。
- 遲は、人迎と相応すれば湿寒凝滯、氣口と相応すれば虚冷沈積。
- 数は、人迎と相応すれば風燥熱煩、氣口と相応すれば陰虚陽盛。
- 虚は、人迎と相応すれば経絡傷暑、氣口と相応すれば榮衛走奔。
- 実は、人迎と相応すれば風寒貫経、氣口と相応すれば血壅氣窒。

- 緩は、人迎と相応すれば風熱入臓、氣口と相応すれば怒極傷筋。
- 緊は、人迎と相応すれば経絡傷寒、氣口と相応すれば臟腑作痛。
- 洪は、人迎と相応すれば寒壅諸陽、氣口と相応すれば氣攻百脈。
- 細は、人迎と相応すれば諸経中湿、氣口と相応すれば五臟凝涎。
- 滑は、人迎と相応すれば風痰潮溢、氣口と相応すれば涎飲凝滯。
- ?は、人迎と相応すれば風湿寒痺、氣口と相応すれば渾汗血枯。
- 弦は、人迎と相応すれば風走注痛、氣口と相応すれば積飲溢疼。
- 弱は、人迎と相応すれば風湿緩縱、氣口と相応すれば筋絶萎弛。
- 結は、人迎と相応すれば陰散陽生、氣口と相応すれば精阻百節。
- 促は、人迎と相応すれば痰壅陽経、氣口と相応すれば精留胃府。
- ?は、人迎と相応すれば邪壅吐衄、氣口と相応すれば榮虚妄行。
- 微は、人迎と相応すれば風暑自汗、氣口と相応すれば微陽脱泄。
- 動は、人迎と相応すれば寒疼冷痛、氣口と相応すれば心驚胆寒。
- 伏は、人迎と相応すれば寒湿痙閉、氣口と相応すれば凝思滯神。
- 長は、人迎と相応すれば微邪自愈、氣口と相応すれば臟氣平治。
- 短は、人迎と相応すれば邪閉経脈、氣口と相応すれば積遏臟氣。
- 濡は、人迎と相応すれば寒熱散漫、氣口と相応すれば?泄緩弱。
- 革は、人迎と相応すれば中風着湿、氣口と相応すれば半産脱精。
- 散は、人迎と相応すれば淫邪脱泄、氣口と相応すれば精血敗耗。
- 代は、臟絶中止、余臟代動、内外の所因を問わず此を得れば必死。

陰経傷寒

悪寒発熱、大渴引飲、脱汗、脈沈微。

部屋に入ると、なんと彼女は蒲団の上に正座している。横になるか?と旦那が言ったが、彼女は小さく頷いただけである。口も利けなくなっている。正座ではない。へたりこんでいる。顔が腫れている。旦那さんが手を貸して、彼女が横になる。

脈を診る。左右とも触れにくいほど小さく、沈んだ脈である。手も冷たい。

舌を診る。舌は潤って、厚い黄苔が舌全体を覆っている。痩せた小さな舌である。

「薬は、あれでいいと思います。」

四逆湯である。今朝、彼女は主人を送り出した後、激しい悪寒と体痛に襲われた。熱は三十九度五分。震えが止まらず、あまりの苦しさに蒲団の中で海老のように丸まっていた。ところが急に激しい口渴が起こり、水をいっぱい入れた薬缶を傍らに据え置き、絶え間なくゴクゴクと多量に飲んだ。しかし、しばらくすると今度は熱くなり、ドッと汗が噴き出し、何もかもグッショリ濡れてしまった。これで悪寒も体痛は消失して、全身冷たくなって汗も止んだ。体温も三十八度に下がった。

彼女から電話があったのは午前八時。「這うようにして、やっと電話の所まで来ました。」

と、絞り出すような声で言う。声が聞き取りにくい。かすれてしまっている。経過を聞き、四逆湯だと直感した。

大渴引飲して脱汗の後は、すっかり虚脱した状態である。急激に津液を奪われ声も出ない。汗と共に一身の陽気もふっ飛んでいる。寒邪が直接に陰経に入った直中陰経傷寒、四逆湯証である。四逆湯を二包作り、旦那の車で彼女の家に向かった。

【処方】炙甘草 6 g 乾姜 3 g 炮附子 2 g 以上一日分。水煎服用。二包。二日分。

誠に医聖張仲景の四逆湯は神方である。一包を煎じて服用すると、夕刻には平熱に復し、ぐっすり眠って、翌朝は顔の腫れも引き、夜には勤めに出て、いつものようにボトル一本空けた。「アルコールが入ってないと、体が動かない。」彼女の口癖である。

舌に潤った黄苔があった。濃色だが鮮やかな黄色ではなく、やや汚く古びて見えた。にわかには生じたものでは無いようだ。後日、幾度か彼女に会う機会があったが、常に厚い黄苔、時には黒苔まで見ている。苔は常に潤い口中和し、口苦や口乾はない。仮にベタベタした黄膩苔なら湿熱を疑い、乾いた黄苔なら実熱を疑うが、彼女のはそのいずれでもなかった。

大渴引飲、発熱脱汗は仮熱である。悪寒体痛だけの四逆湯もあるが、こういう真寒假熱のすさまじいのも四逆湯である。これに白虎加人参湯を与えれば必死である。四逆湯の乾姜と附子は陽気を復し、甘草は失われた津液を復す。

四逆湯の脈は必ずしも沈ではない。彼女が沈微になったのは、大汗虚脱して気血津液が奪われたためである。陽気を失えば脈は遅くなるか沈になり、脈中の津血を失えば脈は細くなる。

発熱した四逆湯証の脈は浮緩が多い。倦怠感ばかりで、日常とあまり変わって見えない者や、倦怠も陰寒の証も明確でなく、陽病の葛根湯かと思うような者もある。しかし、ここで誤った治法を用いれば急変して、傷寒論太陽篇の終わりにある、甘草乾姜湯の条文にあるような事態になる。

裏寒の存在に気づかなければならない。体温計の熱の高さに比べて脈拍が多くないとか、虚脈であるとか、呼吸数で脈拍数を割ると遅脈になるとか、倦怠感が有って動く気がしないとか、その徴候に着目して、裏寒の存在に気づく。

実は人迎気口の脈診をすると、簡単に裏寒の存在に気づく事がある。左手の人迎は外に応じ、人迎が右の気口より大きければ、風或いは寒邪による外感を意味する。更に人迎が浮なら陽経の風寒とする。そして、人迎が沈なら寒邪が外から来て、直接に陰経に客した直中陰経傷寒である。

発熱時も甘草乾姜湯、四逆湯の脈は人迎沈大である。この時の気口は浮虚である。ただし発熱した茯苓四逆湯、真武湯、人参湯、呉茱萸湯では、裏寒であっても人迎気口はともに浮虚である。つまり水や虚の存在で、ストレートには人迎沈の陰経傷寒の脈は現れない。

傷寒論太陽上篇の文は、裏寒の存在に気付かないで、誤って太陽中風の桂枝湯を使うと急変が起こる事を述べている。救法は甘草乾姜湯である。

〔文献摘録〕

【傷寒論】（太陽上篇）

傷寒脈浮、自汗出、小便数、心煩、微惡寒、脚攣急、反って桂枝湯を与え其の表を攻めんと欲す、此誤りなり。之を得れば便ち厥し咽中乾き煩躁し吐逆する者、甘草乾姜湯を作り之を与え、以て其の陽を復す。

裏寒虚証

風邪なら、やっぱり葛根湯でしょ？

四十才代の男性。

「葛根湯を下さい。風邪なら、やっぱり葛根湯でしょう。」

「葛根湯は、良く効きますか？」

「ええっ、薬剤師さんが、そんなこと言ってて良いんですか？ うーん、まあ効くときも有るけど、最近は、まあまあだね。葛根湯が一番なんですよ？ 風邪には。」

「いや、他にも色々有るんですが、どんな風邪、引くんですかね？」

「うーん。これはねえ。結局、疲労なんです。仕事は休めないしね。」

この人は新聞社に勤めている。疲労が重なり、かなり以前から体調不振である。倦怠感が強く、少し動けば息が切れ、あまり熱くもないのに汗をかき、汗が出ると、後はたちまち冷え込んでしまう。また、微熱が抜けず、いつもエキス剤の葛根湯を飲んでいる。ときに盗汗がある。

脈を診る。左手の人迎の脈だけ沈である。他の脈はすべて浮弱。裏寒を疑う。人迎沈大は裏寒である。

「口の中が乾燥しませんか？」

「うん、するね。微熱のせいかな。」

「水分、よく取りますか？」

「いや、あまり飲まない。普通だな。」

「煎じ薬にしませんか。これ以上、葛根湯をやっても、効き目が、本当じゃないですよ。」

処方甘草乾姜湯。

【処方】炙甘草 8 g 乾姜 4 g 以上一日分、水煎。分2回。7日分。

三日目に早くも来局。

「微熱、とれましたか？」

「ええ、微熱も取れたし疲れも取れました。一服で効きましたよ。こんなに効くもんですかね。」

「口の乾くのは、どうですか？」

「今の所、それありませんね。」

「疲れた感じになったとき、口の中が乾いて来ますか？」

「そうですね。乾くと思います。」

「それなら、口の中が乾いてきたら、すぐ漢方を飲んで下さい。それが風邪の兆候ですから。」

ほとんど毎日、彼は甘草乾姜湯を飲んだ。お陰で風邪には全く縁が無くなり、体力倍増した。人迎の沈大も見られない。ところが、ある夕刻、彼の奥さんから電話が掛かってきた。

「主人が、吐いて止まらないんです。頭もすごく痛いそうです。」

「熱は、ありますか？」

「三十八度です。何か糸を引く痰か唾のような、ドロドロしたものをゲーゲーいいながら吐いてます。」

呉茱萸湯証である。奥さんに薬を取りに来てもらう。呉茱萸湯を服用すると、三十分ほどで吐き気は収まり、朝までには平熱になった。

呉茱萸湯と甘草乾姜湯、ともに裏寒一家の一員である。裏寒証にかかる人は「裏寒の梯子」をする。呉茱萸湯、真武湯、四逆湯など、同じ裏寒の処方証を渡り歩く。ともあれ、どの穴も、あいた穴はすべて塞がねばならない。そうしている内に、裏寒証に落ち込まなくなる。

甘草乾姜湯証は子供に多くある。体温計では高熱があるのに手足には熱感が乏しく、グッタリしている。ジっとり汗が出ている場合もある。勿論、食べたり飲んだりも出来なくなっている。大人なら真武湯や四逆湯かと考えるが、甘草乾姜湯で治ることが多い。

内傷発熱

右の氣口の脈は左の人迎に一倍。

少女は一週間も前から高熱が引かない。ずっと何も食わず、ほとんど何も飲まず、寝ばかりいる。

体温が四十度ある。しかし顔色は赤くなく、黄色くて艶がない。室内はわずかに冷房が効いている。手を入れて布団の中の足を握る。足は熱っぽい。

舌を診る。舌は乾燥して舌面に鮮やかな色の赤い点がたくさん見える。ベツトリ白膩苔が付いている。

脈を診る。脈拍は多くない。一分間に七十六。体温計がなければ、発熱には気づかないだろう。

「頭、痛い？」

「少し。」

「寒い？」

「寒くない。」

「お布団の外に出たときも、寒くない？」

「うん。」

寒くない。しかし熱くもない。頭痛も体痛も無い。処方を考えながら階段を下り、あとから降りてきた母親と話す。

「一週間前、だるいって言うんで計ったら三十九度あって。その日から何も食べてないんです。」

「気持ちが悪くて、食べないんじゃないかなさそうですね。」

「そうです。」

「解熱剤は、使っていないんですか？」

「最初、使ったんです。でも、全然、効き目が無かったです。」

「そうですか。」

「座薬した時は、五分ほど下がりましたかね。でも、すぐ元に戻ってしまいました。」

「なるほど。」

「元気になる補中益気湯って言う漢方も、飲ませましたけど、熱のある時は効かないんですね。」

虚には違いない。しかし虚寒ではない。真武湯、四逆湯、人參湯なら高熱でも足に触ると無熱のように感じられ、ちょっと布団から出ると足が冷たくなったりする。陰症の傷寒ではない。そもそも外感ではない。それは脈を診れば分かる。右手の気口の脈が左手の人迎の脈より何倍も大きく、浮虚大である。道三流脈書の言う内傷発熱に違いない。

処方は何だろう？ 普通は気口大の脈で補中益気湯を使う。しかし、補中益気湯の患者が、一週間も飲まず食わずで、ただ寝ているだろうか？ それにエキス剤ではあるが、すでに患家で二日間、補中益気湯を服用させている。大虚だ。とても虚している。決心して当帰補血湯を作って父親に渡す。

【処方】大和当帰6 g 綿黄?30 g 以上一日分、水煎服用。三日分。

服用初日は、体温が上がったり下がったりした。しかし、その後は次第に下がって、少しずつ食べたり飲んだりも出来るようになり、二日目の夕刻には平熱になった。成功である。

当帰補血湯証の舌は、淡紅色で潤っていて、苔は見られない。しかし、なぜかこの女の

子の場合は、鮮やかな紅点と多量の白膩苔が有った。

当帰補血湯の脈は、気口の脈が人迎に倍する内傷の脈である。その他の左右六脈はすべて浮虚である。人迎も気口も脈状は浮虚である。発熱すると脈はいくらか速くなる。しかし虚しているので、熱の割に脈拍が多くない。

当帰補血湯は、李東垣の処方である。しばしば「気口の脈、人迎に倍す。」を頼りに、この処方を用いて内傷発熱を治した。発熱し激しく嘔吐する者に用いて、服後三十分で嘔やみ発汗解熱した例があった。この様な大虚の発熱には、他のどんな方法も無効である。一度は下熱しても、元気は戻らず、翌日は再び発熱する。その時の治療によっては、例えば柴胡剤など用いれば、当帰補血湯証から裏寒に転落して四逆湯類の証になる。

当帰補血湯の証は多彩である。頭痛など激しい症状の有る者、ただ寝込んでしまって元気がないだけの者。無汗も有汗もある。熱の下がる時に大量の汗が出る者、汗なく自然に解熱する者など。但し、激しい悪寒で始まる例は見た事がない。

[文献摘録]

【内外傷辨】李東垣

当帰補血湯は肌熱燥熱、口渇引飲、目赤面紅、昼夜不息、其脉洪大にして虚、重按して全く無きを治す。内経に曰く、脈虚は血虚と。又血虚発熱して証は白虎を象り、ただ脈は長実ならざるに辯あるのみ。誤りて白虎湯を服さば必死なり。この病は之を飢困労役に得るなり。

疝積

背痛緩急あり。尿不利。面青黄。心下痞不食。

柴崎啓介氏。すらりと背が高い。痩せ型。色白。泌尿器科の帰りに来局。体調がすぐれない為か声に元気がない。顔色も良くない。

「レントゲンには写らないんですが。でも多分、腎臓の石です。尿の出も悪いですから。」

「もっと痛そうにされる方が多いんですがね。」

「以前の結石の時も、こんなでしたよ。まあ、これから痛くなるかも知れませんが。」

「食欲は？」

「胃がつまった感じで、食べたくないですね。それと足が冷えます。大便がスッキリしません。」

腰背の広い範囲で痛む。小便不利。漢方の病名は「疝気」「疝積」。疝というものは痛みや重苦しさが放散する。そのため広い範囲で症状を感じて、全身がつらくなる。この人は食欲さえ無くなっている。

舌を診る。舌は鮮やかな赤い色で、左右両辺に二本の白苔がある。赤い舌は炎症である。

脈を診る。人迎と気口の脈が沈大有力である。左右差は無い。両寸は微浮。関尺は沈滑有力。脈拍は一分間に八十。やや速い。

人迎の沈を陰經に寒邪が入ったとする。陽經を経ないで、直接、寒邪が陰經に客した陰經傷寒と近い。ただし四逆湯、甘草乾姜湯では人迎だけ沈になるが、彼は人迎も氣口も沈大である。

人迎は外である。氣口は内である。氣口の浮は虚、反対に氣口の沈は実。内実である。古人は氣口の沈伏は積聚とする。結石は積聚と言って良いだろうか。

関尺の沈滑有力は裏実とする。沈は裏、滑は実である。氣口の沈大有力に対応する。処方方は補腎湯。

【処方】 乾姜 1 g 附子 1 g 紫蘇葉 2 g 人参 2 g 甘草 2 g 川? 2 g 独活 g 蒼朮 3 g 茯苓 3 g 黄耆 3 g 木瓜 3 g (沈香は省略) 以上一日分、水煎服用。三日分。

服後三十分ほどで痛みが薄らぎ、夕刻二度目を服用すると、後は全く痛みを感じなくなった。翌日には、胃の痞えや身体の重さも取れて、元の身体に戻った。更に同方を続けて結石の排出を見るかと期待したが、確認出来なかった。

(文献摘録)

【三因方】 卷七・疝・補腎湯

寒疝入腹、上実下虚して少腹?痛し、時に復た泄瀉し、胸膈は痞え満ち、飲食を進めざるを治す。

【処方】 人参、茯苓、白朮、附子、黄耆、沈香、木瓜、羌活、炙甘草、川?、紫蘇。姜棗を加えて水煎。○ 嘔する者は半夏を加える。

【方函類聚（浅田流）】 疝気・補腎湯（中川捧心）

寒疝肚腹疼痛、泄瀉、胸満痞塞、或いは虚火上攻して舌胎不食するを治す。又腰痛諸治無効の者を治す。

寒疝

胆嚢炎の炎の字は見当たらず。

近所の奥さん。一週間前、右脇下が強く痛んだ。病院の診断は胆嚢炎。痩せて小さく顔色が悪い。

「痛みはひどいんですか？」

「まあ、初めの頃よりは、軽くなってるけど。ずっと痛いよ。」

「吐き気とか、熱は？」

「熱はないけど、ご飯が美味しくない。胃も少し痛い。」

胆嚢炎なら大柴胡湯か柴胡桂枝湯か。病名の炎の字に煩わされ、そんなつもりで脈を診

る。

六脈は弦大浮緩。柴胡桂枝湯位には見える。ところが人迎と氣口が沈大である。これでは柴胡桂枝湯は使えない。脈拍は一分間に六十。炎症があれば脈は速くなるが、脈は遅である。熱ではなく寒だ。

舌を診る。苔は無い。暗紅色で潤っている。やはり虚寒だ。

虚寒証で考えると、食欲不振と軽い胃の痛みが人参湯らしいが、人参湯では人迎氣口が沈大という事はない。人参湯の脈は人迎も氣口も六脈も、熱が有っても無くても、浮虚細である。

痛みは右肋下に限局している。腹痛でも心下痛でもないから寒疝である。処方は大建中湯。

【処方】 山椒 4 g 乾姜 4 g 人参 4 g 以上水煎し膠飴 20 g を溶解。三日分。

痛みは、すぐに収まった。食欲も増し、胃の具合も良くなった。彼女もこの処方が気に入って、しばらく続服した。とても顔の色つやが良くなり「胆嚢炎に罹る前より、よほど元気になったわ。」と喜んだ。

附子粳米湯

心腹切痛。痛み去って積はその形を顕わす。

K夫人。息子の不登校の事で悩んでいたの、恐らく心労であろう。突然に附子粳米湯証を発生した。

「今朝から、お腹全体がものすごく痛みます。」

「下痢しますか？吐き気は？」

「下痢や軟便で、朝から三度ばかりトイレに行ってます。吐き気はありません。」

心下から下腹まで、腹部全体が激しく痛む。青い顔を苦痛でゆがめている。額に汗が見える。痛みが激しくて、お腹の何処が痛みの中心なのか分からない。勿論、朝から何も食べていない。

脈を診る。六脈と人迎氣口はすべて弦大浮。脈拍は一分間に八十。やや速い。しかし脈が三拍うつと息を吸う。古人の遅脈の定義に従えば、一息三動は「遅」である。従って虚である。

舌を診る。やや乾燥している。古びて、やや乾いた感じの黄苔がある。

脈が速いので熱を計る。三十八度あった。腹痛で虚が原因であるから、附子粳米湯を二包調合する。

【処方】 附子 2 g 半夏 6 g 粳米 6 g 大棗 4 g 炙甘草 3 g 以上水煎服用。二日分。

「お陰様でね、痛みが取れました。まだ左のここだけ、押さえると痛みが有りますけど。」

「その左の下腹が、痛みの中心だった所なんですかね。熱は下がりましたか？」

「はい。熱も下痢も治りました。でも痛みが取れてみて分かりましたが、ここを手で探ってみますとね、何かが、ここに有るのがハッキリ分かるんです。」

「そうですか？」

「はい。これは、きっと癌だと思います。」

手拳大の固まりが、ハッキリ手に触ると言う。私は絶句してしまった。この人は常に冷静な人だ。確信があるに違いない。検査の結果も卵巣癌だった。手術を受けたが、苦しみつつ数ヶ月後に亡くなった。

偏弦者は飲也

挾飲の傷寒。悪寒発熱、左手は浮、右手は沈。

泊まり込み合宿。やっと寝付いたかと思う夜半の事。具合の悪い人がいるのに気付く。望月君だ。

「どうしたの？」

「いや、寒くて、震えが止まらなくて。」

「頭は痛くない？」

「頭より咽が痛いんです。蒲団着てるのに背中がゾクゾクして。」

そっと額や首筋に触れてみる。汗はない。舌も診る。苔はなく淡紅色で潤っている。

脈を診る。左手は浮いて緩数。しかし右は左より強く、全体にやや沈んで弦数有力である。左右の脈が揃わない右だけ弦の偏弦の脈である。仮に裏に何も問題が無ければ、脈は左右が揃うはずである。

人迎と気口も左右の浮沈が反対である。左の人迎は浮緩大。右の気口は沈大有力。脈拍は一分間に九十六。脈が速い。熱が有る。計ってみると三十八度あった。

「首筋は、凝ってない？」

「ちょっと凝ってますかね。私、熱なんか、大人になってから出たこと無いんですがね。」

真夜中に桂枝去桂加白朮茯苓湯を取りに行く。

【処方】 白芍 5 g 大棗 4 g 炙甘草 3 g 生姜 1 g 蒼朮 5 g 茯苓 5 g 以上一日分。水煎服用。

望月君のお腹に薬が収まったのが午前二時半。暫くすると悪寒がとれ、四十分もすると汗が出て来て、彼も一息ついた顔になった。熱を計ると五分ほど下がっていた。それから彼も私も眠った。翌朝には平熱になっていた。

左手には、侵入している外邪の性質が表れる。浮緊は傷寒、浮緩は中風である。彼は汗が無く悪寒が甚だしかった。悪寒発熱は傷寒である。しかし左手の脈は浮緊ではなく、浮緩である。従って傷寒ではなく中風。処方桂枝湯である。

しかし反対の右手の脈は弦である。弦とは何か。弦にも色々あるが、ここは金匱要略に言う「偏弦は飲也」に従って裏に飲ありとした。

望月君の左の人迎は浮緩であった。風邪が外から左手に入って、人迎が浮緩になる。

望月君の右の気口は沈大有力であった。気口浮大を虚とすれば、気口の沈大は虚の反対の実である。そして、ここでは実の正体を「飲」とする。

金匱に偏弦の脈は飲也という。しかし、これは不親切な言い様である。弦は左右いずれに表れるというのか、その際に反対側の脈がどうなるのか、まるで説明がない。

私は、偏弦の飲脈は右手に表れると考える。その時、左手には風寒の邪の脈、浮緩や浮緊が表れる。

痰飲の脈は双弦である。苓桂朮甘湯、木防己湯、茯苓飲、みな双弦である。なぜ偏弦の者があるのか。偏弦は素より飲の有る所へ新たに風邪が侵入し、左脈だけ風の脈になり、右脈は飲の脈のままである。また侵入した風邪に表を閉ざされ、裏に飲を生じて偏弦を呈するものも有る。

桂枝去桂加白朮茯苓湯は雑病で項背強ばり、胃が重く、手足までだるくなる者に応用できる。脾陰が虚して胃中に飲を蓄え、あたかも風邪が客している如く項背強などを表すが、悪寒や発熱には至らない者である。桂林古本傷寒論に風邪の脾に乗ずる者というのがある。これではないかと思う。

[文献摘録]

【桂林古本傷寒論】傷風脈証併治第十一

風病の四肢懈惰して体重く、衣に勝つ能わず、脇下痛んで肩背に引き、脈浮にして弦洪。此風邪の脾に乗ずる也。桂枝去桂加茯苓白朮湯之を主どる。

【金匱要略】痰飲咳嗽病篇

脈双弦は寒也。皆大いに下したる後、裏虚し脈偏弦の者は飲也。

(明の寿世保元や朝鮮の東医宝鑑では「脈双弦は寒飲也」に改めている。)

【傷寒論】太陽上篇

桂枝湯を服し、或いは之を下し、仍ち頭項強ばり痛み、翕翕として発熱し汗は無く、心下満して微しく痛む者、桂枝去桂加茯苓白朮湯主之。

骨?

嘘か真か、骨が喉に刺さり命を落とす人、年に数十人有りとか。

M君。三十七才。百七十二センチ。七十キロ。

「このままじゃ、まずいと思って来たんですよ。これで死ぬ人がいるって聞いて。」

「骨が刺さったのは何日前？」

「十日以上前です。」

「熱は？」

「五日前、急にガタガタ寒気がして熱が出ました。」

「解熱剤は効きますか？」

「二時間ぐらいで、汗が出て一度は下がるんですが、すぐ又出るんです。」

「今は何度？」

「三十九度です。」

魚の骨が喉に刺さった。数日して医者に診てもらったが、骨は何処に有るのか判らなかつた。熱が出始めてからは、解熱剤と抗生剤も飲んでいる。さむけと発熱がある。

傷寒論の太陽病中編に「瘡家は発汗すべからず。」とある。瘡とはキズである。悪寒が有っても発汗は出来ない。

舌を診る。舌は正常。色は淡紅。白苔が少しあって潤っている。

脈を診る。六脈は細緩。人迎気口は浮細緩。左右差はない。脈拍は一分間に七十二。

脈が遅い上に細い。熱の脈として順当でない。病の吉凶は脈の順逆に大いに関係がある。三十九度もあれば、脈拍は百以上あるのが普通である。ただM君本人は、自分は常に脈拍が少ないと言われているから気にしないでくれと言う。分からぬまま十味敗毒湯に金銀花と連翹を加える。

翌朝。M君来局。熱はさらに上がって四十度。十味敗毒湯は失敗である。脈は細緩不数。舌脈とも前日と大差ない。

「身体、だるい？」

「いや、不思議と何ともないですね。」

「食事は？」

「食べてます。」

「身体は暑く感じる？」

「ええまあ、熱が有る分、いつもよりは熱いです。」

沈思黙考。十味敗毒湯で熱が上昇するというのは、虚実を取り違えている。虚は何処にあるのか。

仮に遅脈を裏寒証、即ち四逆湯や真武湯の証と仮定する。裏寒がある者を誤って発表すれば、汗出して虚脱した状態になる。傷寒論の太陽上篇の甘草乾姜湯証である。また裏寒がある者に誤って柴胡剤を用いると、寒が増大して熱は上昇し、食欲も無くなり、病は増劇してぐったりする。やはり甘草乾姜湯で救う。

十味敗毒散は柴胡剤である。また広い意味の發表剤に属する。しかし投薬の前と後で本人の様子はさほど変わっていない。四十度でも元気と言えれば元気である。だから裏寒とも

違うようである。しかし何かの虚である。熱が高いのに脈拍が八十に満たない。体温計の無い時代の経験不足の医者なら熱はないと判断したかも知れない。潤っていて熱を感じさせない正常な舌。これもあやしい。虚に違いない。

そもそも熱の脈ではない。それならと、こちらも体温計の熱を無視して考える事にする。

脈は細緩である。脈の緩は脾虚である。脈細とは脈中の血が少ない事。即ち血虚である。血虚に当帰。脾虚に小建中湯。喉に骨が刺さって化膿しそうなので黄耆を加える。処方外科の大家、華岡青州の帰耆建中湯。

【処方】黄耆4g 当帰4g 桂皮4g 白芍薬6g 大棗3g 炙甘草3g 生姜1g

以上一日分。水煎服用。三日分。

「ありがとうございます。よく効きました。」

「熱は？」

「煎じ薬を飲んで寝たら、夜中にすごい汗が出て、二度着替えて、朝は五度八分でした。」

「骨は、どうなったの？」

「分かりません。薬は三日分みんな飲みました。」

脈は太さを増し、両尺は弦になっている。補血は成功している。脈拍は一分間に四十八。用心の為、同じ処方を更に七日。結局、骨の行方は分からなかった。

婦人血枯経閉

ダイエットは恐るべし。血は枯れて経水断つ。

かおりさん。とても健康な人に見えるが、去年も今年も一度も月経がなかった。ホルモン剤を飲めば、月経にはなるが、婚約者に説明が出来ないという。

問診を進めて行く内、大変な事を聞き出した。便秘に効くしダイエットにもなると、数年前から、毎日センナ葉とジュウヤクを煎じて飲んでいる。しかも、その量が普通じゃない。一日分のセンナの量は約五十グラム。ジュウヤクもほぼ同量。常識的な量の十倍、或いは五十倍である。

お腹が丈夫なのも善し悪しである。無月経の原因はこれに違いない。アルコールも強い。毎日飲む。自分で「底無し」と言っている。

舌を診る。舌が大きい。舌の大きい人は生まれつきの丈夫な人である。舌色は赤い。舌が赤いのは熱である。汚い黄苔がある。黄苔も熱である。

脈を診る。脈拍は一分間に八十。やや速い。脈はすべて浮細洪数。細洪は血虚。数は内熱である。

センナ・ジュウヤクの連用で血虚になった。血の流れが少なくなり、本人はあまり気にしていないようだが、肩が凝って腰が痛く、手も足も冷たくなり、汗も出なくなっている。血が少なくなり、腸道は潤いを欠き、血虚血燥から内熱へ発展した。内熱の形成には大量の飲酒も関わっているはずだ。

先ずセンナ・ジュウヤクを止めてもらう。便秘と無月経。両方を同時に解決する処方が必要である。脈を診ていて、証治準繩の大便秘不通門の文を思い出した。

【証治準繩】大便秘不通門

血虚津液枯渇して秘結する者、脈は必ず小澁。面に精光無く、大便秘は軟と雖も努責して出でず。大劑の四物湯加陳皮甘草紅花、導滯通幽湯、益血丹。

「脈小澁」とある。脈はピッタリである。「面無精光」とある。ふっくらとした白い顔だが艶がない。準繩には処方が三つ。どれが良いのか分からない。順に試みる。先ずは四物湯加減。

【処方】当帰 6 g 熟地黄 6 g 川? 6 g 陳皮 3 g 紅花 3 g 甘草 3 g 以上一日分。水煎服用。十日分。

センナ・ジュウヤクを止めても、細い鉛筆のような便が毎日出た。顔の艶が戻って、皮膚の毛穴が目立たなくなった。舌の黄苔が消えている。脈もいくらか太さを増している。続服すること六十日。まだ月経が来ない。残便感が有ってスッキリ出た気がしない。導滯通幽湯に転方。

【処方】当帰 6 g 生地黄 3 g 熟地黄 3 g 桃仁 3 g 升麻 3 g 紅花 3 g 甘草 3 g 枳榔 2 g 以上一日分、水煎服用。十五日分。

導滯通幽湯を一ヶ月。二年以上無かった月経が有った。残便感もやや改善。同方を継続。次の月、また月経が有った。残便感に枳殼と木香を加える。残便感消失。ひと月置いて、また月経が有った。

次の月に無事結婚。婚後も半年、同方を継続。その後は服薬を止めたが、月経は正常に来て、病は再発しなかった。

導滯通幽湯が適方だった。かおりさんには脈数や黄苔など、化熱の証拠が幾つかあった。升麻や乾地黄が必要だったのだろう。

食鬱成塊

腹痛激甚、氣口の沈実は食鬱なり。

相撲をしているという小学生。両親は普通サイズだが子供の方はとても大きい。何度か県内で優勝の経験があるらしい。身長百六十センチ、体重七十キロ。

子供の顔色が良くない。艶の無い黄白色の肌に毛穴がブツブツ目立って、梨の皮を見る様である。父親が説明する。

「夜中に腹が痛いと言い出しまして、それこそ七転八倒です。救急車で行ったんですが、腹のリンパ腺に悪性の腫瘍が出来てるから手術すると言われて手術したんです。ところが退院してからも、ちよくちよく腹が痛みますし、先日は初めの時と同じくらい痛みまして、なかなか止まらなかったんです。どうも病気が良くなってるのかどうか不安なんですよ。」

「今、痛みは止まっていますか？」

「いや、今も本当には止まってないんです。」

「痛いのは、どの辺？」

男の子が臍周りを手でなでて、この辺という仕草をする。その手が意外に小さい。両親が、実は後悔している事が有ると言う。

「小さいとき、あまりに食が細いので、病院へ相談に行ったんですが、当時の流行りだった様で、ホルモンを注射してくれたんです。それからというもの、まあ食べるは食べるはグングン肥って、私らはこんなですが、こいつだけこんなになったんです。」

「なるほど。」

「後で聞くと、ホルモンなんか注射すると良くないって、言うじゃないですか。今度の病気との関連が心配なんですよ。」

舌を診る。舌色は綺麗なピンク。寒熱ともになし。舌は小さく厚みもない。胖ではないから身体は肥満だが痰ではない。白苔が有るから湿かも知れない。舌が小さいのは脾虚かもしれない。舌色は綺麗で暗くなく、?斑も紫条もないから、気滞も?血も存在しない。

?血や痰は腫瘍を形成する。しかし痰や?血でないとすると、腫瘍の原因は何だろう。

脈を診る。特徴のある脈だ。右の気口が沈実である。人迎と左右の六脈は浮濡大。私の言う「濡」は軟大浮洪の脈で、一貫堂で言う「ボカリボカリとした湿の脈」のことである。濡は脾虚湿滯の平胃散系の処方脈である。この男の子は確かにそれらしい体型をしている。身体に見合わない小さな手も骨格の小さい事を意味する。脾虚に違いない。しかも腹痛を訴えている。脾虚でなくて外に何かあるだろう。

気口の脈が沈実である。気口は内である。気口沈実は内の実である。内に何か詰まっているという脈である。

ホルモン注射の性で、食べて食べて遂にこうなったとしたら、気口の沈実は「食積」ではあるまいか。

脾胃の異常から湿を生じ、大量の食を得て、骨は作らず皆肉となし、肉には多量の湿を蓄え、余った湿は集まり固まって、遂に化して腫瘍になった。

万病回春には香砂平胃散の加減方がたくさん載っている。その中から藪証門の香砂平胃散を選ぶ。方後に「食積の久しくして塊を成すは、乾姜を去り大黄を加える」と加減法が出ている。但し大黄は加えない。手術して既に塊は無い。

【処方】香附子 4 g 縮砂 3 g 厚朴 5 g 蒼朮 6 g 陳皮 5 g 枳殼 3 g 山楂 3 g 麦芽 3 g 神麴 3 g

木香 2 g 乾姜 2 g 甘草 2 g 生姜 1 g 以上一日分。水煎服用。十日分。

大発作の後、軽い痛みが続いていたが、この処方を数日服薬すると痛みは消失した。大便の回数も一日に三四度だったが、一度になった。

気口の沈実は、やや浮いて緩渋になった。脈から湿が抜けて濡は弦になった。脈からも身体からも、さらに湿が抜けてくれるのを期待する。

服薬は二年以上に及んだ。処方一度も変えなかった。本人が来局した時は必ず脈を診た。脈は常に弦で濡にはならなかった。気口の沈も一度も出現しなかった。そして腹痛も一度も起きなかった。

十年後。患者本人が現れた。勿論、名乗られて初めて、あの時の小学生だと解った。何と立派な青年になっている。外を廻る仕事だからと言うが、顔が真っ黒でテカテカ光っている。快活に話す。

「いやあ、痩せるのはダメでしたよ。親父にうるさく言われたんですが、今も七十キロあります。背もあれから、あんまり伸びなかったんで、百六十三位かな。」

「薬止めてから、お腹が痛む事はなかったの？」

「二度ありました。救急車呼ぼうかっていう、すごいやつが来て、お袋が冷凍庫から漢方薬を出してきて、それですぐ治りました。二度目は私、家を出てたもんで、救急車に乗せられました。実は漢方薬の事はすっかり忘れてたんです。強い注射して呉れるんですが、全然止まらなくて、やっと思い出して親父に冷凍庫の漢方を車で病院に届けてもらって、服んだら三十分ですね。すぐ止まりました。」

腹満便秘

膨満甚だしく、脚はヨタヨタ、寝たり起きたり。

今村多鶴さん。十年ほど前よく顔を見せていた。今日はお嫁さんに付き添われて来局。十日ほど前、お嫁さんは彼女が以前使っていた薬を持ち帰っている。多鶴さんとお嫁さんが話す。

「あの、桂枝加大黄湯ですか、あれ、今度は効かなかったんですよ。」

「便秘のままですか？」

「ええ、吐き気も治らないし、寝たり起きたりの生活なんです、今日は思い切って連れてきました。」

「吐き気が有るんですか？」

「お腹が一杯で、吐きそうで。」

「食べたものも、吐いてしまうんですか？」

「ですから、あまり食べないようにしてます。」

「食べるのを減らせば、吐きませんか？」

「はい。」

吐くのを恐れて食べない様になっている。お嫁さんが簡単にカロリー計算をしてみると、一日に千百カロリーほどしか食べてない。市販の下剤では腹の膨満が治らず、大便が少量ずつ何度も出てスッキリしない。午前中は頭が重い。腹の膨満の為に元気がなく足までヨタヨタする。それで毎日寝てばかりいる。

「お腹が張って苦しいと、頭まで重くなります。」

「肩が凝りますか？」

「いいえ、凝りません。便秘さえなければ悪い所はないんです。」

「お母さん、胸ヤケするんじゃないか？」

「ええ、けどこれは昔からで、それも食べた物によるのよ。」

外見からも、お腹の周りが大きくなっているのが分かる。食事を減らしているのに、昔より肥って見える。顔色は白くない。黄色。やや黒いのかも知れない。年は七十に近い。

舌を診る。大きな舌。ふっくらしている。中医では「胖」という。粘った白苔がある。赤い点々がたくさんある。どこかに熱が有る。

舌の胖と粘った白膩苔と胸ヤケとを合わせて考えると、痰である。痰なら皮膚の色は白はずだが、顔は黄色い。脾胃の熱による燻黄だろうか。赤点は胃熱かも知れない。しかし熱は強くないのだろう。舌は乾かず、苔は黄変していない。

脈を診る。脈拍は一分間に六十四。遅い。やはり熱は多くない。人迎は氣口に倍して大きい。人迎は浮弦大。人迎の大は外から風寒の邪が侵入している、即ち外感の脈である。左寸も浮いて大きく、よく目立つ。左寸の浮大は外感表証である。関脈は左右浮弦大である。弦は痰かも知れない。尺では左右で浮沈が反対である。左尺は沈実。右尺は浮実。尺脈の浮は珍しい。

人迎と左寸の浮は外感病を意味する。邪気を去らなければ、下剤ばかりでは解決しない。問題は右尺の浮である。古人は人迎に現れた脈状から、外邪の性質を論じるだけでなく、人迎と同じ脈状を左右の六脈から探して、どの経に邪が入ったのかを知る。すると人迎の浮に対応するのは、左寸と右尺の浮である。外感では左手は表、右手は裏である。また尺は下焦である。即ち右尺浮実とは「裏」「下焦」に外感邪気が侵入している意味になる。

風寒の邪は体表に客し裏に及び、下焦の腑まで侵入している。これは裏滯表病である。恐らくは元から腹中に痰と胃熱があり、そこへ風寒の邪が来て体表に客した。ところが裏に問題があったため、表邪は抜け損ね、下焦にまで侵入して居座ってしまった。邪気により、体表から腹中まで気の流れが妨げられ、頭重、脚無力、腹満便秘となり、また邪気が痰を触発して嘔気を起こしている。外邪を払い痰を逐い、熱を清し、内外の気を行らす処方が必要である。

外の邪気には桂枝、大棗、甘草、生姜。嘔吐を止め痰を去るには半夏。膨満を治し気の

実を治すには枳実、厚朴。清熱には大黄。処方は厚朴七物湯加半夏。

【処方】厚朴 8 g 甘草 3 g 大棗 3 g 枳実 3 g 桂枝 3 g 生姜 1 g 大黄 1 g 半夏 6 g
以上一日分、水煎服用。7日分。

服用を始めて、すぐ吐き気が収まり毎日大便があった。何より足がしっかりした。数ヶ月で完治した。

彼女の脈は左右の尺で浮沈が反対であった。左の尺脈は人迎の浮とは呼応せず沈実である。つまり外邪は右の尺へ入って、左の尺へは入らなかった。

元の王好古は此事難知という本の中で、外感病で下法を用いようとするれば、下法に応ずる脈があるかどうか、右ではなく左の脈を診て決め、しかも下すには?血剤を用いて下すと言う。つまり、この症例は裏滞表病であり、下すべき証ではなかったという事になる。

?血腹満

左関の脈甚しく大。血実の腹満。

加藤和子さん。五十一歳。私の同級生の奥さん。

「お腹が張って、苦しいんですか？」

「そうです。十数年前に子宮筋腫の手術をした後からですが、特にこの二三年は張り方がひどくて、気分が悪くなるほど張るんです。レントゲンにガスがたくさん写っていると言われました。」

「便秘しますか？」

「時に、一週間くらい無いことも有りますね。」

「食事は？」

「不思議と空腹にはなりますから、食べれます。」

「食べると、後で苦しいんじゃないですか？」

「食事の後が苦しい、という事はないんです。」

「大便が出れば、お腹の張りも解消しますか？」

「いいえ。お通じは有っても無くても、お腹は張ったままです。何様、こんなお腹で。」

本当にお腹が大きい。妊婦さんのようだ。温めても下剤をかけても治らない。季節や身体の調子には関係しない。気分が悪いと言うが吐き気はない。

顔や手足は細く、身体は引き締まっている。皮膚は浅黒い。なぜか皮膚に赤みがある。

赤黒い皮膚には光沢があり、皮膚は乾燥していない。

舌は乾燥して小さい。萎縮して見える。奥の方に薄い白苔がある。舌色は正常である。

脈には特徴がある。左関の脈が甚だ大きい。重按すれば洪であるが、六脈中のどの脈より左関の脈が抜きんで大きく、浮弦大である。強く按じて消失せず、実脈の類である。

左関は肝であり血である。左関の虚は血虚、洪なら?血である。では左関の実大とは何

だろうか。血実としたらどうだろう。

右関の脾の脈は小弦。小さいが重按しても力がある。脾虚ではない。左右の寸は浮小緩。平常である。

両尺は大きく力があって張りがある。浮べて大有力、沈めて実大である。尺は裏である。裏は腹である。脈の有力は腹の脹りである。実は腹の堅満である。腹が膨れれば脈も張り、腹が硬ければ脈も堅くなる。人迎と気口はともに浮小。人迎気口小は気血虚である。しかし細く弱い脈なのに補虚では効無く、駆?血に切り替えて症脈ともに改善されることがある。ここは浮小を細洪と読み替え、?血とする。

実は萎縮した舌は血流障害で、皮膚の黒色は?血、赤みと光沢は血熱ではないかと思っている。桃核承気湯で血実を下したらどうだろうか。しかし脈は?血の洪でなく、舌も紫色や暗紫色ではなく、?斑もない。気分も落ち着いていて、桃核承気湯証の狂は窺えない。

「口の中が乾きませんか？」

「乾燥した感じがしますね。」

「飲むんですか？」

「いいえ。あまり飲みたくはないんです。」

「ちょっと湿してやったら、それで済むという意味？」

「そうですね。」

「便秘の時は、下剤とか、呑みますか？」

「いえ、便は硬くてコロコロですけど、下剤を呑むと水下しの便になって、ダメなんです。」

「口燥き、但だ水を嗽がんと欲して、嚥むは欲せず。」というのだから、?血に違いない。しかし下剤は水下しになるというのでは、煎薬の桃核承気湯はやりにくい。結局、某社の桃核承気丸を使う。湯剤と内容は同じだが緩慢に働く。

【処方】桃核承気丸、一日六十丸、分三回。十日分。

腹満は消失。半年ほどで完治した。ただ彼女は時折来局して丸剤を持ち帰る。飲んでると肩こりや頭痛もなく、体調が良いからと言う。そのうち彼女はすっかり皮膚の色が白くなり、ピンクの肌になった。体型も変わってふっくらした。?血が取れたにちがいない。黒いのは生まれつきではなかったらしい。?血剤で色が白くなるというのも時に経験する。

血分腫

面目腫れて脈洪有力。?血の浮腫。

四十歳の主婦。子供が二人いる。漢方薬で利尿剤のような物があつたらと来局。

「おしっこの量が少なくて、顔や足に水が来るんで、漢方の利尿剤が欲しいんです。」

「出る量が少ないですか？」

「そうです。少ししか出ないんです。それで、この一年で体重が十キロも増えたんです。」

「排尿の回数は、一日、何回くらい？」

「5～6回です。」

「ちょっと、足を押さえてみて好いですか？」

「はい。」

「確かに、腫れてますね。病院は行った事あるんでしょ？」

「はい。どこも悪くないって、言われてます。」

浮腫がひどいが、しっかり硬く張っている。虚腫ではない。凹んでも比較的是やく戻る。脚がしっかりしている。脚の色つやも良い。元気そうだ。

「何か今までに、病気をしてますかね？」

「そうですね。昔、妊娠中毒症になりました。それから、乳腺炎で何度も熱が出た頃も有ります。最近、と言っても五年ほど前ですが、子宮内膜炎で入院しました。」

「入院ですか？ どんな風になって？」

「生理が止まらなかったんです。十日ほど入院しました。」

「そうですか。婦人科方面にトラブルが多いですね。」

「ええ、今も生理痛がひどいです。」

「月経の周期は正常ですか？」

「はい。二十五日できちんと来ます。」

「今はもう、月経が止まらない、なんて事はないんですか？」

「ええ、ほとんど三日で終わります。」

腎虚や脾虚の浮腫には見えない。婦人科方面にトラブルが多いが、その事と浮腫が関連するかどうか分からない。

脈を診る。脈は左右ともに洪にして有力、?血の脈である。なぜか左手の脈だけ、全体にやや沈んでいる。人迎気口は浮洪で左右差はない。脈拍は一分間に七十六。

「口の中が乾燥した感じになりませんか？」

「ああ、それは生理が来る前です。口が乾いて、たくさん飲みます。飲む割に出ないから腫れてしまうんですね。それと、月経前は便秘にもなりますね。」

「のぼせるとか、足が冷たいとかは？」

「のぼせは無いんですけど、足は冷たいです。それと腰が痛いです。」

「腰痛はどんな時に？ 長く立ってるとか？ 前かがみになったときとか？」

「寝てる時です。起きて動き始めると、不思議と治ります。」

月経が近づくと?血が増加する。?血は「口は燥して、但だ漱水せんと欲して嚙を欲せず。」のはずだが、時にはゴクゴク飲んでしまう人もある。月経痛、口乾口渴、経前の便秘、起きて動き始めると治る腰痛。すべて?血である。

?血の痛みは身体を休めていると血の流れが悪くなって起こる。軽症では朝目覚めると痛み、起きて動いている内に血が巡って痛みを忘れる。やや重いと、ふと夜中に目覚めて痛みを覚える。重症では痛みの為に眠れなくなる。

桂皮は左の脈に入る。やや沈んだ左脈が「桂枝を使って、陽気を通じてくれ」と言っている気がする。

桂皮の有る?血の処方がよい。浅田宗伯の方函口訣、桂枝茯苓丸の条に血分腫という事が出ている。処方桂枝茯苓丸の煎剤。車前子も加える。

【処方】桂皮 5 g 赤芍 5 g 茯苓 5 g 牡丹皮 5 g 桃仁 5 g 車前子 5 g

以上一日分、水煎服用。十日分。

結果は上々、浮腫は半分以上も取れてしまった。見事に効いたので、私も彼女も満足した。経血がどす黒い色だったが、鮮やかな色に変わった。続けて服めば将来起こり得る?血性の病気を未然に防ぐ。

桂枝茯苓丸を使う時の脈は「洪有力で細くないもの」と一応決めてある。そして脈の「洪有力で細いもの」を桃核承気湯に規定している。

彼女の浮きの悪い左脈は血寒である。常に桂枝茯苓丸証に見られる訳ではない。しかし桂枝茯苓丸を使うには好都合な脈であった。辛温の桂枝は血を温め巡らせる。

癲癇様の発作

寒湿入脾、身体拘急失神、脈沈緊。

四十代の夫婦二人連れ。先ず職人さんらしい感じの旦那さんが口を開く。

「家内ですが、自律神経と言うんですか、引きつけるんですよ。」

「意識が、無くなるんですか？」

「そうです。癲癇じゃあ、ないらしいですが。」

「病院で診てもらったこと、ありますか？」

「ええ、ただ、病院じゃどこも悪くないらしくて。なあ、そうなんだろう？」

「はい。お医者では、脳波にも異常がないから自律神経だろうって。お薬も頂いたんですけど、飲んでても、あまり変わらないし。」

はにかんでいる夫人に代わって殆ど旦那さんが話す。引きつけは子供の頃からあった。結婚してからも三年に一度位は発作があった。しかし、まれな事でもあり、旦那さんもあまり承知していなかった。ところが、近年次第に発作の回数が増え、近頃は毎月起きるようになった。

「発作の様子、御覧になった事がありますか？」

「ええ便所の中で、こう、こうなってますよ。失神して。」

旦那さんは手で握り拳を作り、腕を斜め上方にグッと伸ばし、身体をよじって首もねじ

曲げ、お寺の山門の仁王さんのような顔で固まって見せる。旦那さんの隣で、下を向いたり歯を見せて笑い顔を作ったりしている夫人に聞いてみる。

「発作が起きるのが、予測できますか？」

「はい。発作の五分くらい前から、気分がおかしくなるんで、解ります。」

発作の前兆。それはソワソワした何か落ち着かない、心身のパニックという感じで始まる。そして、急に鳥肌が立つような、冷たい感触が身体を走り、腹痛と便意を感じてトイレに駆け込む。すると、排便と同時に身体に痙攣が起き、遂には失神に至る。気がつくときトイレの中で脱力している。その時、多くは下痢である。よほど強く引きつけるらしく、発作後の数日はあちこちの筋が痛い。

顔色は善くない。面色萎黄。しかし大きな人である。背も高い。体重は七十キロ。

舌を診る。幅が広い。淡紅色。奥の方だけ白苔がある。

脈を診る。左右とも、やや沈んで弦大緊である。人迎と気口の脈は沈軟大有力。人迎の沈軟は寒湿である。気口の沈軟は虚冷である。脈は大いに役に立った。処方黄土湯である。

【処方】黄土10 g 蒼朮5 g 乾地黄5 g 黄耆3 g 甘草3 g 附子2 g、山東阿膠（別包）3 g
以上一日分、水煎、分3服用。十五日分。

大発作は簡単に止まった。人迎気口の脈も沈から浮になった。買い物の途中、ふと気がつくとき十数メートル移動していて、その間の記憶がない等ということもあったが、これもあまり長く掛からず消失した。しかし、まだ様々な症状があった。腹痛下痢、のぼせ、眩暈、足冷、疲労、不安動悸、イライラ等である。真の癲癇発作であれば、発作さえ無ければ良しとする。しかし彼女の場合、不定愁訴と発作とは一体のはずである。不定愁訴の延長線上に発作がある。不定愁訴が治らなければ、いずれ発作が再発する。結局、様々に黄土湯に工夫して不定愁訴を追いかけ、完治には六年を要した。

古人は黄土湯の脈は緊とする。方輿²は遅緊或いは尺内沈緊と言ひ、浅田の方函類聚でも緊である。脈緊に従って私は便血の人を何人か治した。脈緊は寒である。脈の遅も寒である。脈の沈は寒湿である。

中国や日本の古い文献、或いは最近の中医の文献にも黄土湯の癲癇様発作への応用に触れたものはない。すべて出血に関わる事ばかりである。

稲葉文礼の腹証奇覽、黄土湯之図には「図の如く臍の左辺動気して、時に奔豚気の如く上って心胸にせまり、劇しきものは卒倒す云々。」とある。確かに奔豚気と言ひ、卒倒と言っている。しかし、まだ出血を離れて黄土湯を論じてはいない。

龍野一雄先生は、黄土湯の此の方面への応用は卜庵荒木性次先生に始まるとする。

〔文献摘録〕

【温病条弁】卷三・下焦篇之三・寒湿

先便后血、小腸寒湿、黄土湯主之。

奔豚

脈浮滑、坐して跳躍し止まず。

目の前で、奇妙な事が起こっている。椅子に坐ったまま、婦人が盛んに跳躍中である。身体全体がドッキンドッキン、さながら一個の心臓と化したように盛んに運動している。幸い会話には差し支えないらしい。

「どうされましたか？」

「あの、先日ね、自転車に乗っていましたが、この向こうの交差点で、バイクと接触して、転んだんですね。そうしましたら、それから、メマイがして、困ってるんです。」

「お怪我の方は？」

「はい、左の肩と頭を、打撲しましてね、でも、その方はもう、大分、よろしいんです。」

「メマイは、どんな時に起こりますか？ 立つときとか？」

「いつも、ずっと、メマイしてるんですけど、縞模様の物など見ると、特にグラグラと揺れますね。」

「あの、先ほどから、気になっているんですが、お身体が揺れてますよね。メマイって、その事ではないんでしょう？」

「ええ、これは、私の自律神経。でもメマイが激しいときは、こちらもひどくなります。」

「なるほど。メマイが起きるとき、何か下腹の方から突き上げて来るとか、昇って来るとか言う感じは、ありませんかね？」

「ございます。そうなんです。それがとっても嫌な感じで。それがメマイの原因で、それが下腹の辺りから上がってくると、メマイがして、身体まで興奮して、揺れるんです。」

頭髪が汗でグッショリ濡れている。これは奔豚である。奔豚の患者は皆至って平静である。淡々と症状を訴え、心理的な不安も動揺も伺えない。肉体と精神の不思議なミスマッチ。私なら、自分自身の状態に狼狽してしまう。肉体に症状が出てしまう事で、心理的葛藤からは解放されているのかも知れない。

奔豚の患者さんとは、表面的な会話は可能である。しかし、不安か？ イライラするか？ などと尋ねても「ええまあ、身体が今、こんなですからね。」等と、世間話風に返されてしまう。

患者自身は病気を心因性だと知っているだろうか。十分に心因性と認識できるにも係わらず、わざと認識しないように、自らの心理にマスキングを掛けているのかも知れない。

ただ奔豚では、その人の心理を理解しなかった事で治療に失敗したと思った事はない。むしろ心理的に接触しにくい、不思議な感触に依拠して奔豚と診断している。

「ビックリし易いですか？」

「はい。子供の頃から、驚くと下痢するんです。キューッと、お腹が痛んで、下痢します。」

「眠れますか？」

「はい。よく寝られます。」

「お蒲団に寝た姿勢になったとき、お腹でドキドキ、動悸を感じたりしませんか？」

「ああ、有りますね。私は、起きている時にも、ワナワナ振るえて、止まらない事もあるんです。」

「汗は？」

「これは、更年期じゃないでしょうか。ドッと汗が吹き出る事があります。」

「食欲は？」

「事故で転倒してから、食べられません。口の中が粘ってて、嫌ですね。」

奔豚らしい所がたくさんある。色白で小柄。小さな顔。痩せて見える。

舌を診る。大きな舌である。舌色が薄い。粘った白膩苔。舌色が薄いのは血虚か陽虚である。白膩苔は湿や痰である。脾陽虚で痰湿を兼ねるといふ所か。大きな舌も痰湿とする。

脈を診る。脈は浮大滑数。細い小さな手には全く不似合いな、速くて大きな勢いの有る脈である。

苓桂甘棗湯である。汗が出やすいとか、驚いた時の腹痛下痢も苓桂甘棗湯である。私は常に浮滑数大の脈で苓桂甘棗湯を使っている。

【処方】 茯苓 9 g 桂皮 5 g 大棗 5 g 炙甘草 3 g 以上一日分、水煎服用。十日分。甘爛水は省略。

十日後の来局時には、飛び跳ねる症状は消失していた。しかし彼女はそれには触れず、お陰様でメマイは随分良くなりましたと挨拶した。私もそれで済ませて、先日は椅子の上で飛び跳ねていましたね等とは言わなかった。

〔文献摘録〕

【傷寒論】（太陽中篇）

発汗後、其の人、臍下に悸する者、奔豚を作んと欲す。茯苓桂枝甘草大棗湯之を主どる。

怒気胸悶気塞

気持ちは分かるが、怒っちゃいけない心臓に悪い。

林一隆氏。四十八歳。料理人である。

「心臓の薬ありますか？ いや私なんです、大声出して怒鳴ったんですよ。そうしたら胸に来て。」

「胸に痛みが、差し込むんですね？」

「いや、痛みじゃなくて、こう締め付けられた感じで、ウーンって、しゃがみ込んでしまったんです。」

「時間はどの位？すぐ治りましたか？」

「二分間くらいですか。恐ろしかったです。」

「吐き気とか、冷や汗は？」

「いや、有りませんでした。」

「それ以降の発作は？」

「それが、ちょくちょく有るんです。重い物を持ったり、少し忙しいと直ぐ締め付けが来ます。」

「なるほど。怒るのは、絶対ダメですね。」

「ええ勿論、あれからは一度も怒ってないです。」

一日に一度か二度、しゃがみ込んでしまうほどの締め付けが来る。ただ初めての時と比べれば、発作の時間は短い。

キリッとした印象の人である。血色が良い。贅肉のない身体つき。締まった顔立ち。明るい皮膚。シミひとつない顔。年齢より十歳は若く見える。キビキビと調理場で仕事する姿が目に見え浮かぶ。

舌は潤って淡紅色で白苔がある。舌尖が鮮紅色である。舌尖の鮮紅は心熱である。舌辺に青紫色の斑がある。斑は血である。どこかに、恐らく心臓に血が有る。血薬の配合が必要かも知れない。

脈拍は一分間に百を越える。数脈である。数は熱である。陰虚内熱なら寸が拡大するが、両寸は微である。陰虚ではない。従って数は実熱である。関尺の脈は弦大にして堅。堅い脈は心筋の動きが堅いという意味だ。硬直した状態で早鐘のように打つ、結代はないが、やはり危険な感じのする脈である。

胸痺熱証は小陷胸湯証である。

【処方】半夏 8 g 実 8 g 黄連 2 g 以上一日分、水煎服用。七日分。

服後、締め付けは半分程になった。脈拍が八十八に落ちた。ただ脈の間隔にムラが出来ている。急に脈拍を落とすと、一時的に脈がムラになる事がある。

舌の斑は消失した。血薬の配合は必要なかった。舌尖の鮮紅色も消失した。しかし舌全体が紅い。ふと見ると林さんの顔も赤い。色白だから綺麗なピンクになっている。まだまだ黄連が必要だ。怒りは黄連が主治する。

一ヶ月服薬して、しゃがみ込む程の発作はなくなった。急に胸が重くなる事が時々あったが、その内、それも無くなった。脈のムラもない。舌色も正常。脈拍は七十六。

そろそろ薬を止めても良いかなという、その矢先、渋い顔で林さんが現れた。

「怒ってしまっ。」

「出たんですか？」

「ええ、時間は短かったんですが。やっぱり立ってられませんでしたね。」

「林さん、あなたは気が短いでしょ。」

「そうなんです。絶対、怒らないようにしてたんですが。」

「あなたは瞬時に事態を把握するんです。その能力が他の人より高いんですよ。火が付くのも瞬間的です。パット解るんですね。こりゃ、怒らなきゃいけない事態だと。三秒です。怒るのを三秒待てば良いんです。」

胸痺の発作は、死ぬのではないかという恐怖を伴う。林さんは熱心に服薬し、約半年で完治した。

小陥胸湯は傷寒論の結胸の処方である。傷寒で発熱し、熱と痰が結合して、呼吸する度に心下や脇肋が痛み、咳や痰がある者に効く。

結胸と胸痺は異なる。しかし胸痺の処方、??薤白半夏湯の薤白を黄連と入れ替えると、小陥胸湯になる。??薤白半夏湯と小陥胸湯は寒熱が交代した処方である。

痰の脈は沈滑である。しかし小陥胸湯の脈は傷寒論に浮滑とある。浮滑の滑は痰。浮は痰の所在が胃ではなく、胸に在るという事だろうか。

林さんの脈は浮滑でなく弦大堅である。胸痺は結胸より気の痞えの場所が深いという事だろう。

産後下痢

出産しても妊娠しても、何故か下痢。

川添奈保子さん。三十四才。二歳くらいの可愛い女の子を膝の上に乗せている。やや肥満。

「二年前のお産後から、ずっと下痢なんです。」

「それ以前も、下痢しやすい体質でしたか？」

「いいえ。そうじゃなかったと思います。」

「下痢は、一日に何回くらい？」

「三回から、多いときは五回くらいです。」

「お腹が痛みますか？」

「ええ、催した時にちょっと。でもまあ、痛いという程じゃないです。」

舌を診る。舌は淡紅色で潤っている。苔は無い。

脈は沈大。脈拍は一分間に六十。遅い。遅も沈も陽虚である。大は水滯だろうか。人迎も気口も沈大である。人迎の沈大は寒。気口の沈大は水滯。

「顔とか足とか、ムクミませんか？」

「さあ、多分無いと思いますけど。」

「ちょっと、脚を押さえてみましょう。」

脚を押す。大きく窪んでなかなか戻らない。冷え性で電気毛布がないと寝られない。水滞と陽虚。

処方 は 真武湯。

【処方】 茯苓 6 g 白朮 4 g 白芍 4 g 附子 1 g 生姜 1 g 以上一日分、水煎服用。十日分。

下痢は消失。冷え性はあまり変わらなかった。真武湯は春まで続けた。

春になったある日。彼女から、下痢が始まり、真武湯を服用していても効果がないと電話があった。真武湯以外に正解があるとは夢にも思っていなかったので、急遽来局を請う。

「実は、妊娠したんです。ツワリは無いんですけど、下痢するようになっちゃって。」

「そう。妊娠と下痢、それって関係あるの？」

「だから、下痢が始まったのが、この子のお産の後で、今度妊娠したら、下痢が再発したんです。」

彼女は妊娠出産と下痢の関係を納得している。しかし、男の私にはトンと合点が行かない。

脈は浮大緩。妊娠して脈は沈から浮に変わった。妊娠の脈は昔から浮と決まっている。脈を診ても役に立たない。妊娠している事が分かるだけである。真武湯が正答でなかったとすると、下痢と浮腫と脈の沈大遅とはそもそも何だったのか。

お産の後、まだ病院に居るうちに下痢が始まり、真武湯に出会うまで二年間も下痢だった。出産によって陽虚や腎虚になったとして真武湯を選んだ。ところが今度はまだ出産もしていないのに下痢である。

私の妻が流産しそうになった時、脈は沈になった。急ぎ附子湯を作り、流産を免れたら、脈は浮に戻った。ある婦人が体外受精した。脈は常と変わらず沈弱であった。恐らく妊娠（着床）は不成功だろうと思ったが、やはりその通りであった。

もし川添さんが妊娠に伴って真武湯の虚寒症に陥り、脈が浮から沈に変わる様なことがあったとしたらどうだろう。それは最悪の場合、流産を意味しないだろうか。川添さんは下痢しつつ脈は浮である。彼女を虚寒とするのは誤りである。

妊娠してなければ彼女の脈は沈大であるとして、婦人科の処方から下痢の薬を考える。当帰芍薬散証の脈は沈大である。人迎氣口の脈も沈大になる。当帰芍薬散とする。

【処方】 当帰 4 g 川? 4 g 白芍 4 g 蒼朮 4 g 沢瀉 4 g 茯苓 6 g 以上一日分、水煎服用。十日分。

数日で下痢は収まった。浮腫も軽快した。当帰芍薬散を継続し、冬には無事出産して、今度は産後も下痢にならなかった。

当帰芍薬散は滅多に使った事がない。記憶に残るのも、この下痢の婦人と腎炎の婦人、そして無月経の未婚の婦人位である。これらの女性は皆、脈は沈大遅であった。

三人は体型も共通している。背は高くなく、背丈の割に体重があって肥って見え、必ずしも色白でなく、冷え性で、脚には浮腫が有った。

当帰芍薬散の脈の沈も大も水滯である。裏に何か物が存在すれば、たとえ水であっても脈は大になる。

人迎の沈は寒湿。気口の沈大は水滯である。

陰証発疹

風と湿と寒と相搏、皮疹を発す。脈は浮虚?遅。

スーツの婦人。額に粟粒大の小さな暗紅色の皮疹がビッシリと出来ている。瘦せている。黄色い顔。

「こんなものが、出来ちゃってるんですけど。」

「痒そうですね。」

「いえ、それが、ほとんど痒くないんです。でも、どんどん広がるのが気味悪くて。」

「広がるんですか？」

「ええ、初めはオデコに十個ほど出たんですけど、一日で顔から頸と肩、それから腕に行って、二日目に上半身全体、今日は三日目で、もう腰を過ぎて足の方まで広がってます。」

随分と快速の皮膚病である。まだ三日目である。数日後には全身が額のようになる可能性がある。ひとつずつの皮疹は小さく、粟粒ほどの大きさで、扁平な形をしている。最初に始まった額では隙間なくビッシリ密集し、既に赤黒い皮疹の頭部は糜爛している。皮疹の赤みは下に行くほど少なくなり、最も後れて出た脚では地味な褐色で糜爛も見られない。数の点でも額が最も多くて、下へ行くほど減少する。下腿ではパラパラと散在する程度である。

これは要注意である。急速に全身に広がったというのに、ほとんど痒みが無いというのが怪しい。皮疹の色は赤黒く冴えない色で、彼岸花の花の色よりもっと暗い。とても正攻法では当たれない。

脈を診る。脈拍は一分間に六十。遅い。脈は浮虚遅洪。寸は微細である。人迎も気口も浮虚である。左の人迎が右の気口より大きい。舌は潤って淡紅色。苔はない。

人迎が気口より大きいのは外感である。風は遊走する。蕁麻疹でもないのに、三日で全身に広がる軽快な性質は、外感の邪気に違いない。邪気は風か湿か寒か。脈が遅いから寒だろうか。

皮膚病は熱性のものが多い。しかし、脈舌からは清熱は不可能に見える。しかし赤い皮疹に温熱の治療をしても大丈夫だろうか。

それでも、附子剤の中から使えそうなものを探す。人迎大の真武湯など有るはずもないが、当たり障りの無さそうな所で、これを一日分だけ作ってみる。実は私は桂皮が怖いので

だ。

【処方】芍薬4 g 茯苓8 g 白朮6 g 生姜1 g 炮附子1 g 以上一日分、水煎服用。一日分。

翌日。不思議なことに脚だけ皮疹が消えた。附子が使える。附子が使えるなら桂皮も大丈夫。脚より上の皮疹が残るのは、寒を去って風を去らないからだ。風は上から来て頭面に客し、次第に下へ波及する。桂皮で去風しよう。

脈の浮虚遅澁は風湿である。病は風湿相搏発疹である。浮虚遅澁の澁は湿の脈である。脈は寒のために遅になり、風のために浮になり、湿のために澁になった。処方は甘草附子湯とする。

【処方】桂枝4 g 附子2 g 甘草3 g 蒼朮4 g 以上一日分、水煎服用。二日分。

顔に幾らか残ったが、二日間で発疹はほとんど消えた。

「お陰様で、もう二日も飲めば、みんな消えそうです。」

「ほんとですね。出るのも速かったが、退くのも速い。」

「でも今日、朝から腕や脚の関節があちこち痛くて、まさかりウマチじゃないですよ。」

脚を押さえる。浮腫がある。湿が多い。関節に発赤はない。桂枝加朮附湯に改める。？
苡仁も加える。

【処方】桂枝4 g 芍薬4 g 蒼朮4 g 大棗4 g 甘草2 g 生姜1 g 附子2 g 苡仁10 g
以上一日分、水煎服用。五日分。

皮疹も関節痛も浮腫もすべて消失した。私は関節痛が現れた時、緊張しつつもある種の感動を覚えた。皮疹の形で出ていた風湿が風寒湿痺になって、その正体を現したからである。皮疹の段階で、風湿相搏による発疹とした私の判断に誤りは無かった。

江戸時代の医家の書いたものに、薬湯などに浴して無理に皮膚病を納めしまうと、後で痛風になるという事が出ている。半信半疑であったが、この度は実際に皮膚病から始まる痛風というものを、此の目で実見する事になった。痛風は今で言うリュウマチである。

皮膚病は熱に属する者が多い。もし誤って、この婦人のような陰証の発疹を滋陰降火したり、清熱したとしたら、どうなただろうか。恐らくは、全身の皮膚が糜爛し浸出液が溢れ、痛風ももっと重く発症したに違いない。

白朮附子湯

眩暈。大きな出来物。脈は浮虚遅。

近所のご隠居さん。うちの家内が十日ほどメマイで困っている。何か薬を呉れないかと来局。

「連れてこようと思ったが、本人が、気分が悪くて伏せつとるもんで。」

「グルグル、天井が回るようなメマイですか？」

「いや、そんなヒドイもんじゃあない。」

「吐き気がしますか？」

「いや、吐かない。しかし、食欲はないな。頭の気分が悪いらしい。」

「食欲がないんですか？」

「まあ、身体に障る言うて、無理に食べさすので食べはするが、美味しゅうはないらしい。」

よく知っている婦人である。背丈は百四十数センチしかない。丈夫な方ではない。痩せている。よく分からなかったが、普段見ている印象で真武湯のエキスを三日分渡す。

三日目。夫婦二人で来局。眩暈はほとんど良くなったから同じ薬をとという。効いたのなら、何も言う事はない。二人が家人と世間話をしている間に私は調剤する。

「先生、出来物の漢方薬は無いかね。」

「誰につけるの？」

「うちの家内。」

奥さんが立ち上がって、両手で髪を揚げ、うなじの辺りを見せる。後頭部の髪の生え際、そこに鶏卵大の大きな出来物がある。半月も前から大きくも小さくもならず、口を開ける気配もない。

指で押してみる。堅い。根が深い。

脈を診る。脈は浮虚遅細。

メマイと出来物と一石二鳥に治すには、煎じ薬の方が良いよと真武湯は取り返して、白朮附子湯を渡す。

【処方】白朮 6 g 甘草 3 g 大棗 4 g 生姜 1 g 附子 2 g 以上一日分。水煎服用。五日分。

眩暈は良くなり、頭がスッキリすると食欲も回復した。うなじの出来物も高さが半減。しかし基底部はそのままの大きさである。更に服薬が必要である。更に半月ほど服用して完治した。

そもそも食欲がない真武湯、頭が重くて気分の悪い真武湯とは、白朮附子湯証であった。

金匱要略の歴節病篇の白朮附子湯の文は「近効方朮附湯は風虚頭重、眩苦極まり、食味を知らざるを治す。肌を暖め中を補い、精気を益す。」である。

風湿眩暈

メマイが始まると、何んにもする気がしなくなる。

古村静子さん。昔からメマイの発作が起きると来局する。大抵、二週間ほど服薬すれば治る。必ず脚には浮腫が有り、脈はいつも沈。人迎と気口の脈も沈大。人迎は外。気口は内である。人迎の沈は湿。気口の沈は痰。即ち痰湿眩暈である。

処方、脈が緩無力で脾虚が目立つ間は、古今方彙の加味四君子湯だった。脈が沈滑になり、痰湿が目立つようになってからは、二陳湯去甘草加枳実木香川?だった。服薬すると尿利が増し、浮腫が減じ、頭がスッキリして治る。時には眩暈発作が激しく、二週間も激しいメマイや嘔吐が続く。来局は難しく、入院して軽快するのを待ち、退院するとフラフラしながら来局した。すべて水の仕業である。

今回も眩暈を訴え来局。既に六十二才。百五十五センチ。六十キロ。御主人も一緒である。

舌を診る。潤って白苔がある。舌色は濃紅色やや暗。脾虚の頃は淡紅色だったが、最近なぜか舌は常に濃紅色である。?血とも見える色だが、?血剤は用いたことがない。

脈を診る。今回、意外なことに六脈はすべて浮数である。いつもの沈脈は何処にもない。それどころか、左の尺脈が著しく浮いて大である。尺の浮は珍しい。人迎も気口も浮弦大。脈拍は一分間に九十二。速い。

脈が浮いて速い。風邪でも引いているような脈である。沈脈が消えてしまつては、いつもの手は使えない。何が起きたのか。水は無くなったのか。ただ今回も彼女は尿不利を訴えている。

脚を押してみる。脚は窪んで、なかなか戻らない。浮腫がある。まだ水が有る。ふと隣に坐っているご主人が、妙な事を言いだす。

「うちのバアサンのメマイは、鬱病だな。」

「え、鬱病ですか？」

「だって、なーんにも、やらなくなって、一日ボーッとしてるもの。」

「ええ、それが、なんか頭がボーッとしちゃって、何もする気がしなくなっちゃうんです。」

「悲観的になるんですか？」

「さあ、悲観的っていう訳でも無いんだけど、じっと坐ってるだけで、一日すんじゅうんです。」

憂鬱とか悲観とか、興味の喪失とか言う様な気分の変調ではない。ただ無気力になるのだ。さて、脈浮、浮腫、眩暈、無気力、どう考えよう。

浮数の脈は外感を思わせる。浮腫で脈浮は痰ではない。湿である。左尺の浮とは何か。外感では左手は外。尺は下焦である。従つて左尺の浮は、外から来た風湿の邪が下焦に客したものである。

防己黄耆湯に思い至る。防己黄耆湯で下焦の風湿を逐い、メマイと浮腫を治す。痰は、痰気鬱結すれば鬱になるが、湿邪も滞れば鬱になるだろうか。

実は腹証奇覧という本に防己黄耆湯の鬱が出ている。腹証奇覧翼「防己黄耆湯。婦人半

才前後、急に肥満してのぼせ強く、頬に紅がさし、月経が少なくなり、気分鬱々として塞ぐに此方よきあり。」

舌の濃紅色も湿が滞り、気血の流れを阻害したものである。最近、しばしば胃の具合が悪いというので、胃薬に茯苓と芍薬を加えて防己黄?湯を作った。

【処方】和防己6g 黄耆6g 蒼朮4g 大棗4g 甘草2g 生姜1g 白芍4g 茯苓6g

以上一日分、水煎服用。七日分。

七日服用して諸症既に消失。また家事が出来るようになった。

和の防己は中国で青風藤と呼ばれる。薬性は温である。真の防己には広防己や粉防己がある。最近、此の手の防己が手に入らなくて困っているが、和の防己より性質が強く薬性が寒である。長沢道寿の薬性能毒には防己は性寒で脚の太い人でないと使えないとある。広防己は近年、腎不全を招いた事で知られる関木通と同じ属である。

六味回陽飲

歩行は難しく、遺尿失禁。脾腎両虚。

歳を聞くまで、五十過ぎの息子が母親に付き添って来たと思っていた。ところが二人は夫婦で、八十過ぎの老婆に見えた人は五十三歳だった。半年ばかり前、夫人は膝関節に出来た小さな骨を病院で削ってもらった。ところが、以来歩行が不自由になり、失禁するようになった。

「歩きにくそうですが、足が痛むんですか？」

「いいえ。」

「足は、冷たいですか？」

「はい。」

「おしっこが近いと、お聞きしてますが、一日に何回ぐらいになりますか？」

「さあ、数えた事が無いんですが、しょっちゅうです。」

「夜間も、起きるんでしょうね。」

「はい。」

ここで夫人は「好いですか。」と断ってトイレに立ったので、御主人と話をする。御主人が小声で話す。

「実は、家内はオシメをしてるんです。夜間も何度もオシメを取り替えます。トイレの回数はハッキリはしませんが、さあ一晩に十二回位ですか。昼間はその倍も行くでしょう。」

「脚は、痛くないようですね。」

「どうした訳か解りませんが、手術してから脚が弱って歩けません。」

「足が前へ出ませんね。」

「そうです。足が十センチずつしか前に出ないから、ヨチヨチ歩きです。」

トイレから帰って来た夫人の脚を押さえる。浮腫がひどい。どこを押さえてもブジュブジュと陥没して、まるで腐った瓜の様だ。虚腫である。顔も手足も煤けたように黄黒く艶がない。表情も乏しい。どう見ても八十を越えた老人に見える。

舌を診る。舌は小さい。潤っている。舌苔は無い。色は暗い濃紅色。

脈拍は一分間に六十。遅い。両寸は微。他の脈は何処も緩弱。尺脈の左右を比較すると、左が弱い。腎虚である。関は左より右が弱く細虚。脾虚である。

浮腫、頻尿は腎陽虚である。牛車腎気丸を想定して問診する。しかし、左尺の虚を診て腎虚を確認したのは良いが、両関を比較して腎虚に兼ねて脾虚も存在する事が判明。脾虚では腎気丸は使えない。確かに腎気丸にしては全体に脈が弱すぎる。腎虚なら腎虚心盛になって左寸が右寸より大きい、寸は左右とも微である。両寸の微は陽虚、或いは気虚である。脈遅も陽虚である。陽虚も気虚も甚だしい。

ピッタリの処方がある。景岳全書の六味回陽飲である。脾陽虚に乾姜。腎陽虚に附子。脾虚に人参と甘草。腎虚に当帰と熟地黄である。

【処方】 人参 5 g 附子 2 g 甘草 3 g 乾姜 5 g 当帰 5 g 熟地黄 9 g 以上一日分、水煎服用。十五日分。

彼女が来局。驚いた。ちゃんと五十代の婦人に見える。六味回陽飲は若返りの妙薬らしい。青膨れしていた顔が引き締まっている。顔色も煤けていない。無表情だったのにニコニコしている。足取りも改善した。脚の陥没も少ない。腎と脾の脈がうまっている。排尿回数も昼は十三回、夜は五回に減少した。

三ヶ月でオシメは要らなくなった。しかし冬になり血圧が百八十に上がった。まだ陽虚である。附子の量を十五日ごとに漸増して、3 g、4 g、5 g とする。附子が増えるに従い、血圧は正常化した。

関の左右を比較して、右の関弱は脾虚。左の関弱は肝虚である。この例は右関（脾）小と左尺（腎）弱、即ち脾虚と腎虚の複合である。また両寸が微で腎虚の左寸の拡大がないのは気虚である。

一般に腎陽虚の八味丸の脈は、尺では左尺弱。寸は左寸が拡大する。このとき左手は関大尺小である。腎陰虚の六味丸も脈は同様である。しかし六味丸では陰虚内熱になって数脈になり、両尺が弦大になる事もある。こうなると脈では腎虚が分かりにくい、左寸の浮大を診て腎陰虚を疑ってみる。

腎陰腎陽両虚の脈は両尺虚である。左右とも関大尺小である。尺が関より小さいのは正常ではない。しかも、それが左右に現れるというのは大虚である。地黄飲子（宣明論）等の証である。

昔、牛車腎気丸を服用中の男の人で実験した事がある。彼は時々左尺が弱くなる。この時、試みに桂皮と附子を増量した。すると左尺は充ち両尺は等しくなった。これを見て桂附の量を増減して観察した所、この男性に限って言えば、桂附を増せば左尺が充実するという事が証明できた。初心の頃であったから、一人大発見したつもりでいた。

〔文献摘録〕

【景岳全書】（明・張景岳）新方八陣・熱陣・六味回陽飲。

陰陽の將に脱せんとする等の証を治す。

痰核

目の中に土手。脈は弦滑。

徳永和美さん。右の目に眼帯をして来局。身長は百六十センチ。体重は六十キロ。色が白く大顔でもあり、骨も大きいのだろう、実際の彼女はもっと大きな人に見える。私の前に坐ると「目を見て呉れますか。」といいながら、眼帯をはずした。

「目の中に、こんなものが出来てるんです。」

「ああ、それねえ。フリクテンで言うんじゃないかな。痛みますか？」

「ええ、初めは、とても痛かったんです。眼科で放射線か紫外線か照射して、痛みは無くなりました。でも、それから身体がすごくなるって。」

「他は問題ないですか？」

「ただいだけです。このナマコみたいなもの早くのけて欲しいんですが、漢方薬で取れますか？」

この女性は顔も大きいが目も大きい。その大きな目の白目に灰白色の土手が出来ている。土手は長さ七ミリ、高さ二ミリ、幅は二～三ミリばかり。確かにナマコだ。灰白色のナマコは水の固まりに見える。古人は痰核という病名に時折言及するが、これも痰核と呼べないだろうか。

右目である。右は氣に属すると言うが、水に属することもある。右は水、左は血。古人は肥白なる人は痰ありと言う。確かに、この人は色の白い大きな人だ。去痰法で治療できるかもしれない。

舌色は薄い紫色である。なぜ紫なのかは解らない。眼科の治療と関係が有るかも知れない。白膩苔がある。白膩苔は痰湿である。

脈を診る。痰の脈は沈滑という。しかし、この人は弦大滑有力。沈ではないが有力滑だから痰とする。処方は一陳湯加天南星黄?。しかし倦怠感を考慮して人参白朮を加える。つまり処方は六君子湯加天南星黄?である。舌の紫は?血かも知れなかったが、まずは去痰に専念する。

【処方】 人参 4 g 白朮 4 g 茯苓 4 g 陳皮 4 g 半夏 6 g 炙甘草 2 g 生姜 1 g 天南星 3 g 黄?
3 g

以上一日分、水煎服用。七日分。

来局。七日前、ナマコは目の中でピラミッドのように堂々と聳えていた。しかし今は薄

くなり、形がへしゃげて、高さも幾らか低くなっている。舌の紫色も消えた。痰が去って血が巡り、?血も去ったと思われる。倦怠感も無い。その後、二ヶ月で完治した。

二陳湯で痰を逐い、黄?、天南星で痰熱を清した。目の症状から熱を考えるのは難しかったが、熱や実でなければ白睛に大きな土手を築くなど、決して出来る事ではないと考えた。脈にも力があり去痰に適していた。

学生の頃、先輩の【蔵象学説的理論與運用】という本の翻訳を手伝った事がある。私の担当した所は眼科の五輪八廓学説という部分であった。この様な配当の説は、当時の私には荒唐無稽に思われた。しかし、説はなぜか私の記憶に残り、それどころか眼科の患者に会うたび脳裏をかすめる。五輪説では、眼の白睛は気輪と呼ばれ、肺に配当されている。半夏は肺に入り、黄?は肺熱を瀉す。

六年後、彼女が再び現れた。訴えは胃痛、背痛、噎気、呑酸である。実は、何時のことであったか、ある中医の書に彼女に用いたのと同じ二陳湯の加味方が、解説されているのを見てメモして置いた。メモは「某中医曰、噎気呑酸、二陳加黄?南星」である。

脈は六年前と同じ。痰の本源は胃である。迷わず以前の処方から人参白朮を去って、二陳湯加天南星黄?とした。胃は一週間で治った。二病を一方で治したことになる。

電話で脈診

最初は大きいのが幾つか、止まって今度は小さいのが、これに続く。

午前九時。松野夫人から電話。よほど辛いらしい。声がかすれて聞き取りにくい。要は、ひどい頭痛と吐き気で起きあがるのも難しいと解釈する。ご主人にエキス剤で呉茱萸湯を渡す。

昼頃、また電話。少しも良くなっていない。むしろ病状が深刻になっている。死にそんな声で話す。頭痛がひどい。左目の奥と左側の頭が特に痛い。起きると目眩がして痛みが激化する。目を開けると吐き気がして、目も開けられない。熱はない。高血圧? メニエル? 緑内障?

受話器を握っているのも辛いらしい。夫人には気の毒だったが、さらに食い下がって問診を続ける。全身の脱力感がひどい。朝から排尿していない。やや息切れしている感じが、少し胸が苦しく、軽い動悸がする。ようやく私の頭に「心臓」の二文字が浮かぶ。

脈をとって見て呉れないか、と言ってみた。「はい。」という小さな声の後、しばし沈黙が訪れる。いつも心筋梗塞のご主人の脈は夫人がとっている。しかし、果たして今の状態で、夫人が自分の脈がとれるかどうか。

「あの、脈は、おかしいです。」

「おかしい?」

「はい。大きいのが幾つか拍つと止まって、今度は小さいのが続いて、また大きいのが来ます。大きいのをばかり数えると四十ほどですが、小さいのも足すと六十位になります。」

「分かった。心臓だね。心臓がダメなんだ。あのね、家の人に救急車、呼んでもらって。」

「だめです。病院に着くまでに死にます。かまいませんからお薬を下さい。家の者をや

ります。」

夫人の医者嫌いは知っている。しかし、えらいことになった。処方は何だろう？ 胸に痛みがないから、この際は胸痺心痛の処方はない。頭痛も目眩も吐き気も客証にすぎない。脈を治さないで解決しない。速やかに、しかも安全に、脈を回復できる処方が必要だ。

生脈散はどうだろう。しかし、生脈散は陰虚だから脈数で結代になる。松野夫人の脈は大小合計しても六十ほどだから脈は多くない。生脈散証に気虚か陽虚を兼ねているとする。息切れ、即ち短気も気虚である。ショック状態に近いはずなのに汗が出てないのも陽虚かも知れない。心陰虚の生脈散に炙甘草を加えて補気する。

【処方】 紅参6 g 麦門冬10 g 五味子3 g 炙甘草4 g 以上一日分、水煎服用。

翌朝。症状は変わらない。しかし、仮に生脈散が無効だったとすると、夫人が今朝、自分で電話をかけて来られたかどうか分からない。そうしてみると、電話の声も昨日ほどせっぱ詰まった感じがしない。ひどいガラガラ声だが声も出ている。

生脈散を作る。今度は人参を増量して、甘草の他に黄?も加える。電気毛布をして寝ていると聞いて、桂皮と黄?を加えたかったが、とりあえず無難な黄?だけにする。

【処方】 紅参8 g 麦門冬10 g 五味子3 g 甘草4 g 黄?10 g 以上一日分、水煎服用。二日分。

薬は昼夜に二包を皆飲んでしまった。症状はほぼ同じ。ただ脈は可成り整って来たらしい。夫人は勝手に二包を一日に飲んでいいる。更に桂皮も加えて六包調合。処方は生脈散加炙甘草黄?桂皮。

【処方】 紅参8 g 麦門冬10 g 五味子3 g 甘草4 g 黄?10 g 桂皮3 g 以上一日分、水煎服用。

脈の結代と頭痛がなくなり、食欲が出てきた。更に六包。

発症から九日目。松野夫人は夫の主治医を訪ねて診察を受けた。其の足で来局。

「やっぱり、何が起きたのか、確かめて置こうと思ひまして。」

「そうですね。それでF先生は何て？」

「心不全だったと思うが、今頃来ても遅いよって。ちょっとご機嫌斜めでした。」

「そりゃあ、まあ、そうですね。」

「あの、コーヒーは、心臓には、いけないんですか？」

「いや、そんな事は無いですけど。」

「いえね、ずっとオシッコが一日一回で、気になってたんですけど、昨日はコーヒー飲んだら、五回も行ったんで。コーヒー続けてみようと思うんです。」

バツの悪い思いをした。大事な事を聞き忘れていた。さりとてコーヒーに代わる妙薬も思い浮かばない。しばらく兼用してもらおう。処方生脈散加甘草黄?桂皮。兼用??茶。

肝虚失眠

韓、中、日の友好の為に劉さんの不眠を治す。

韓国語会話グループの帰り、講師の崔さんから相談を受ける。

「あの、劉さんですね、身体が心配なんですけど、一度、お店に、御相談に伺っても宜しいですか？」

「奥さん、何処か悪いの？」

「あの、眠れない、らしいです。」

「そう、あした店に来たらいいよ。今日は、身体の具合が悪くて休んだの？」

「いいえ、ちょっと、バイトです。そんなに、悪くないんですから。」

ソウルから来て大学院で研究する崔さん。上海からの留学生、劉さん。国籍も民族も言語も違うが、日本で出会って、万難を排して結婚に漕ぎ着けた。

「しチュレ、します。お言葉に甘えさせて頂いて、相談に来させて頂きました。」

「失礼、しまーす。」

「眠れないの？」

「そうです。崔さんがグーグーいびき始めたら、こっちは寝られないです。」

「劉さん。以前、例えば上海に居た頃は、眠れなくなったりした事は無い？」

「ない。眠れないは、最近だけよ。うん。」

「自分で何か、思い当たる原因は無い？」

「それが、解らないんよ。」

「結婚してから、毎日、会話は日本語でしょ？」

「そう、私達二人、日本語。崔さん中国語だめ、私、韓国語だめだから。」

「いちいち頭の中で翻訳するから、疲れるんじゃない？」

「翻訳いらないんよ。初めから日本語で考えて、ねえ、崔さん。」

「そうなんです。日本語チュかう時は、頭も日本語です。翻訳は、シチュヨ無いんですから。」

「へえ、そんなもんかね。」

二人とも、日本語はペラペラである。朝鮮語は敬語にうるさい言語だから、崔さんは敬語も完璧である。ただ崔さんは「つ」がダメ。日本語の「つ」は特殊な音で、「トウ」でも「チュ」でもない。

眠れない以外に大した症状はない。ただ眠れなくなってから、数キロ痩せている。やや便秘。肩は凝らない。寒がり。少し足が冷たい。汗は出ない。暑くても汗は出ない体質。

小柴胡湯の体質者には、肝気的作用だろうか、まるで汗が出ないという人がいる。

舌を診る。白膩苔がある。幅の狭い舌。色は淡紅である。膩苔や縮まった形の舌は、柴胡剤に多い。

脈を診る。人迎気口は左右の差がなく浮弦で小さい。人迎気口の小は虚である。左右とも寸は大。寸大は陰虚である。右寸大は肺胃陰虚。左寸大は腎陰虚。両尺は弦大有力。両尺の弦大は柴胡を連想させるが、人迎気口が小で陰虚では仲景の柴胡剤はどれも使えない。

実は両寸を詳しく診ると、右が左より大きい。関は左右とも弦だが、左は右より小さい。右寸大と左関小を併せて考えると血虚、四物湯の脈である。但し四物湯にしては寸脈が大きすぎる。脈拍は一分間に六十。遅い。肝気が鬱滞するから遅脈になる。

肺陰虚と腎陰虚、それに血虚がある。そして柴胡を思わせる舌証。肝鬱から肝陰を損じ、更に諸陰を損じ、肝血の虚に至ったとする。処方は一貫煎加芍薬酸棗仁。右寸大に麦門冬。肺陰を補う。左寸大に乾地黄と枸杞子。腎陰を補う。血虚には当帰。肝鬱には川楝子。川楝子は柴胡の代わりに清熱解鬱する。不眠には酸棗仁。酸棗仁は頭が良くて頭を使いすぎる人の不眠に効く。四物湯の意を含めて芍薬を加える。補肝と平肝解鬱の作用が有る。芍薬の脈は左関小右関大である。

【処方】 乾地黄 6 g 麦門冬 6 g 枸杞子 6 g 沙参 4 g 当帰 4 g 川楝子 3 g 白芍 6 g 酸棗仁 6 g

以上一日分。水煎服用。十日分。

「この間はあ、ありがとうございます。お陰様でえ、もう、眠れます。」

「そうですか。安心しました。」

「あの、劉さんの漢ボウ薬ですが、やはり、お金をお払いしたいんですが。」

「いいよ。お金なんか。君も毎週ただで韓国語教えてるじゃない。」

「私は、韓国と日本の、文化の交流のチュもりなんですから。」

「それなら僕のも韓日友好だ。いや、中、韓、日、友好だな。」

「すみません。申し訳ないです。ホント助かりました。劉さんは眠れないと、うるさいんですから。」

両寸大は陰虚を意味する。翌年の六月また不眠が現れ、両寸も拡大して、三ヶ月ばかり服薬した。書物によれば、一貫煎の脈は細数である。細も数も陰虚を意味する。陰を消耗して脈は細くなり、陰虚内熱になって、脈は速くなる。

私の経験例では一貫煎の脈は弦大遅が多い。遅い脈は肝鬱である。肝陰の消耗より肝鬱が目立つ形なので、脈が細くない。左関小、右関大なら芍薬を加える。

喘息（1）

胸肋が塞がって、呼気する能わず、ふくら雀の如し。

「ふくら雀」という事が有るらしい。寒い時分、雀が羽毛に出来るだけ空気を蓄え、膨

れ上がった格好で、肩を寄せ合い寒気に耐える様子という。

昔、息を吸うことは出来ても、吐く事が出来ず「ふくら雀」の様になるなら、大柴胡湯が良いと教わった。その時、その先生は唇を前に突きだし、頬を膨らませ、一息吸う毎に次第に上体を後ろへ反らし、吸うばかりで吐くことが出来ず、胸が一杯になって苦しんでいる患者の様子をやって見せた。

山崎聡子さん。十年以上喘息を患っている。少し言葉に訛りがある。

「発作は、たびたび起きますか？」

「起こらん日は無い言うてええ位、起こります。」

「発作の時は、どうしますか？」

「何もしません。朝まで坐っとなります。」

「お医者で、お薬をもらってますか？」

「いいえ。坐つとれば治りますから、医者には掛かった事ないです。」

驚いた。十数年間、毎夜ただ坐って発作に耐えている。

「発作の時は、息は、吸いにくいですか？ 吐きにくいですか？」

「吸えますから、吐きにくい方でしょうか。」

「坐って、姿勢は前かがみが良いですか？ 反対にのけぞる方が良いですか？」

「まあ、のけぞる方になっとなりますね。苦しいから。」

「咳は出ますか？」

「咳は、ポツリ出るぐらいですが、痰が絡みますね。」

ポツリとは、タマにという事。呼吸難は実。吸気難は虚。息を吐くのが難しいのだから実である。舌を診る。舌は比較的大きく、充実している。舌色は正常である。白苔がある。厚くはないが舌の辺縁を残して、尖から奥まで白苔が覆っている。

脈を診る。脈は速くもなく遅くもなく、弦緊大有力。寸微尺弦の形である。実脈である。

坐っていれば治るからと、薬も飲まず、医者にも掛からずというのも実だろう。体格は普通。年相応に肉付きがよい。皮膚は浅黒く艶がない。シミが多い。声は女性としては低音で、話し方は穏やかである。少し息が粗い。

処方は大柴胡湯加味。喉に痰が絡むと言うので厚朴を加える。ついでに紫蘇も加えて柴朴湯の形にする。喘息なら紫蘇子の方が良さそうだが、当時、紫蘇子はあまり使わなかった。

【処方】柴胡 6 g 半夏 6 g 黄? 3 g 芍薬 4 g 枳実 3 g 大棗 3 g 生姜 1 g 厚朴 4 g 紫蘇葉 2 g

以上一日分、水煎服用。十五日分。

飲み始めると、夜毎の発作は次第に大きさを減じて、十五日分のみ終わる頃には全く消失した。以後、一年半、彼女は黙々と薬をのみ完治した。一年後、腎盂炎の薬が欲しいと

言って来局した。

「腎盂炎で、月に二回は熱が出るんです。」

「最近ですか？」

「昔からです。」

「そんなこと、前には言ってなかったでしょ？」

「それが、煎じ薬を飲ましてもらいよる間は、腎盂炎も出なんですが、それがまたこの頃、高い熱が出てお医者へ行くと、腎盂炎じゃと言われるんです。腎盂炎専門の、煎じ薬はないですか？」

簡単な事である。大柴胡湯である。

【処方】柴胡 6 g 半夏 6 g 黄芩 3 g 枳実 3 g 芍薬 3 g 大棗 3 g 生姜 1 g

以上一日分、水煎服用。三十日分。

半年ばかり連服して、彼女は腎盂炎も忘れた。

喘息（2）

標本は兼顧せず。肝の鬱を解し、?血を逐う。

鈴木さん。喘息は七年前に始まる。部下の越智さんの熱心な勧めで来局。

「いや、実はほかで漢方を調剤してもらって、今も飲んでるんですよ。」

「飲み始めて、どの位ですか？」

「丁度、一年ほどですか。」

「効きますか？」

「うん、まあ良いようです。いや、それがね、この人があっちよりこっちが良いと、うるさいんでね。」

某薬局の処方麻杏甘石湯が基本らしい。麻黄、杏仁、甘草、石膏の他に柴胡、黄芩、人参、大棗、厚朴、桑白皮、麦門冬、白朮、茯苓、黄耆などが入っている。全量は四十g程。効果はそこそこ有るらしい。

「発作ですが、今は、どんな時に出来ますか？」

「毎朝ランニングするんです。その後は吸入薬が要ります。それと風邪を引いたらだめです。すぐ発作です。」

「風邪の時は、どんな症状になりますか？」

「真っ青になって、脂汗が出て、座布団を挟んで。すぐ医者で点滴ですよ。息が吸えませんかからね。」

咳や痰は全くない。ランニングしなくても朝はゼーゼー言う。だから吸入薬の使用は朝が多い。風邪でなくても、疲れると発作が起きる。発作は吸気難である。発作の時は前かがみになって、座布団にもたれている。

舌を診る。舌は濃紅色。やや紫。濃紅色は血熱。紫色は?血。舌の中央に縦に一本溝がある。舌中心の縦の溝は肝鬱の人に多い。辺縁に齒痕がある。奥に灰白色の苔がある。白膩苔なら少陽の柴胡剤が考えられるが、膩苔ではない。苔色もくすんでいる。(膩はベタベタしている、という中国語)

脈を診る。持脈の初めは大小強弱の脈が交代して現れ、脈状が一定しなかった。ちょっと間をおいて、再度診ると今度は安定して緩大の脈が得られた。人迎も気口も浮緩大である。しかし、左関だけは、なお大小の交代を繰り返している。寸は細にして長浮である。

脈は寸小尺大。寸小だから陰虚ではない。腎虚や肺陰虚は否定される。診脈の途中で脈が変化するのは気滞である。特に左関の肝脈で交代が著しいから肝の気滞である。舌の紫と併せて考えれば、気滞は?血に発展している。

鈴木さんは朝の調子が悪い。?血証では、起床後しばらくは血液の流れが緩慢で、?血の症状が増幅する。弦であるべき肝鬱の脈が、ふんわりと緩なのは熱である。熱は脈を浮かせ長くする。寸脈の長も熱である。熱が少陽の熱なら、黄?を加え小柴胡湯に近づけるが、苔は膩でなく乾燥してもいない。熱は血熱とする。証は肝鬱気滞血?と血熱。

「そうですねえ、今の薬は呼吸器の薬がたくさん入っていて、表面的には有効です。ただ根本原因に効くものではないんです。」

「なるほど。」

「そこそこ効いている薬を止めて、別の処方に乗換えるのは冒険ですが、吸入薬も使って下さって良いですから、根本治療の薬を飲んでみませんか。」

「根本原因というのは、何ですか?」

「漢方には、?血というのが有るんです。」

?血を巡って、しばし鈴木さんと会話が続く。?血になると、口の中が乾くが水は飲まないとか、神経痛になるとか話す。しかし、彼には思い当たる節がないらしい。しかし肌膚甲錯と言って、?血から皮膚がガサガサになる事があって、乾癬という面倒な皮膚病を?血の薬で治した事がありますよと話すと、自分も昔、全身が乾燥してガサガサになり、痒くて数年も悩んだ頃があったと言い、そこで、やっとその?血の薬とやらを作ってくれいとなった。付いてきた部下の越智さんも、ヤレヤレという表情である。

処方血府逐?湯。丹参を加えて血熱を清し、駆?血作用も増強する。

【処方】 桃仁 5 g 紅花 3 g 当帰 3 g 乾地黄 3 g 赤芍 3 g 川? 3 g 牛膝 3 g 柴胡 3 g
桔梗 2 g 枳実 2 g 甘草 1 g 丹参 8 g 以上一日分、水煎服用。二週間分。

服薬開始後、疲労から風邪を引いたため、吸入も必要になり、効果の判定は難しかった。ただ「同じ薬で良い。」と彼が言うので、そのまま続行した。

最初の出足こそ悪かったものの、その後は一度も風邪を引かず、一度も点滴を受けることなく、吸入薬も初期の頃、いずれも体調の良くない早朝に数時間も運動した後、二度使用しただけであった。

喘息（3）

たくさん食べ始めたら、発作の前触れ。

前原翔君。十四才。百五十五センチ、六十キロ。目が大きい。デブプリとお腹に肉が付いている。

喘息の持病が有る。どうしても治らないので、神奈川から去年、お祖母ちゃんの居る当地へ引っ越してきた。色は浅黒く、血色は良い。

「どんな治療をしていますか？ 内服薬とか、吸入薬とか？」

「それが、蕁麻疹が出て、何んにも使えないんです。」

「吸入も？」

「ええ、効かないし、効かないだけじゃなくて、蕁麻疹が出るんです。飲み薬も。」

「息づかいが、ちょっと荒いですね。」

「発作じゃなくても、大体いつもこんな感じですね。太り過ぎも有ると思いますけど。」

「発作の起きる時間帯が、決まっていますか？」

「夜中が多いですね。夜中に出て、翌日一杯、夕方か夜まで続きます。」

「発作の時間が長いんですね。季節は？」

「夏も冬も有りませんね。でも、梅雨時がひどかった気がします。」

翔君に「発作の時、咳とか、痰とか出る？」と尋ねる。翔君が首を横に振ったので、N Oの意味だと理解する。だるそうにしている。一昨日の発作の後で、まだ、だるいのだと言う。

「発作が終われば、すぐ、元気になる子も多いんですけどね。」

「ええ、でも、この子は発作が終わっても、しばらくはトイレに行くのも大変なんで。」

「呼吸が苦しくなったら、どうしてます？ 寝た姿勢で居られますか？」

「いいえ、坐って前かがみにしています。」

「発作の時、汗が出ますか？」

「汗はでません。あの、発作の時は必ず下痢です。吐きそうにもなります。」

「下痢ですか。食欲は？」

「発作中は食べません。たくさん食べ始めたら、喘息の前触れなんですけど。」

翔君に吸うのが苦しいか、吐くのが苦しいかと尋ねたら「吸う方。」と答えた。吸気困難は虚である。吐き気や下痢を伴う胃腸型の感冒というのが有るが、翔君のは、さしづめ胃腸型喘息である。

舌を診る。舌が薄い。舌色は淡紅。白苔がある。脾虚である。なぜか暗紫色の斑がある。白苔の間に紅点が多数ある。脾虚だが虚寒ではない。

脈を診る。脈は濡である。私の言う濡とは緩大軟洪である。湿の脈である。人迎も気口も濡浮大である。一分間に八十四。少し息切れしているからだろう。数である。脈の間隔がムラである。呼吸器の異常で循環器にも負担が掛かっている。

大きなお腹。水が余っている。脾虚から湿を生じている。口癖のように「だるい」というのを身重と解せば、これも湿である。浅黒い皮膚も湿邪の人に多い。肥っていても肌が白くなく、舌は薄く、脈も沈滑ではないから、痰ではない。

発作の前に食欲が亢進するという喘息には平胃散が良いと聞いている。不換金正気散という処方がある。平胃散に?香と半夏を加えた処方である。衆方規矩には喘急に麻黄、紫蘇子、桑白皮を加えるという加減方もある。下痢や吐き気が有るので麻黄は避け、茯苓と紫蘇子を加える。

【処方】 蒼朮 4 g 厚朴 4 g 陳皮 4 g ?香 4 g 茯苓 4 g 紫蘇子 4 g 半夏 6 g 大棗 3 g 甘草 2 g 生姜 1 g

以上一日分、水煎服用。二週間分。

二週間分の薬を飲むのに一ヶ月以上掛かった。?香の臭いが嫌だったのか、なかなか飲むのが大変だったらしい。初めは効果も判然としなかった。ただ脈から洪や軟が消えて弦緩になり、脈が締まった形になって、湿が抜けつつあると思われ、また舌の暗色も消え、発作時の下痢や吐き気も消失したので同じ処方続けた。その内に発作もなくなり、一年ばかりで完治した。

パニック

口中カラカラ、冷や汗タラタラ、心臓ドキドキ。

閉店準備中、若い女性が何かひどく打ちひしがれた感じで来局。福家法子と名乗った。

「変わった名前ですね。フクイエさんですか？」

「フケです。名古屋から来ました。」

「こちらへは、御旅行？」

「いいえ。公演です。」

「公演？ お芝居ですか？」

「ええ、まあ、でもアクロバットみたいな事もするので。」

どんな芝居か知らないが、彼女はアクロバットをする。ところが、これが出来なくなった。勝ち気で怖い物知らずのはずなのに、突然、心の底から恐怖がわき起って、みるみる足が氷のようになると熱気が耳へ上がり、冷や汗が流れ、胸が詰まって、口のなかはカラカラ、そして吐き気。これでは公演は出来ない。

恐怖発作が始まったのは公演の二日目。演技が出来ず、名古屋へ逃げ帰ろうと何度も空港へタクシーを飛ばした。今夜の此の時間にも公演が始まっている。道理で悲惨な顔になっている。

舌を診る。舌色は淡紅。きれいな色である。暗い色の舌なら?血や陽虚、色がうすければ血虚であるが、その気配は無い。乾燥している。本人が口の中はカラカラと言う通りである。白い苔も乾いている。大きな人でないが舌が大きい。厚みもある。こうした大きな舌は生まれつき丈夫な人である。

脈を診る。沈鬱悲惨な印象とは裏腹に脈は数。一分間に百以上拍っている。これは内心の動揺である。自信喪失による鬱気分と、恐怖によるパニックが同居している。寸微尺大。人迎気口浮大である。

寸微尺大は小柴胡湯などに見られる。とは言え発熱は無いから柴胡はいらない。柴胡は黄連に替え、気分の急迫には甘草を増量する。

漢の張仲景先生が丁度お誂え向きの処方を、千数百年も昔に作って下さっている。処方
は甘草瀉心湯。

【処方】甘草 5 g 半夏 6 g 乾姜 3 g 人參 3 g 大棗 3 g 黄? 3 g 黄連 1 g 以上一日分、水煎服用。五日分。

「どうでした? 舞台は?」

「助かりました。飲んだ翌日の舞台から、出来ました。」

「でも、やっぱり平気じゃなかったでしょ?」

「いえ、それが案外リラックスして出来たんです。お薬を飲む前は身体中硬くて、コチコチだったんですけどね。」

「そうですか。勝ち気なのかな。」

「そうですね。落ち込んで、食事も咽に通らなかったんですけど。もう大丈夫です。」

福家さんは薬を持って名古屋へ帰った。一ヶ月後、福家さんから電話。家にいる間はよかった。しかし公演に出かけたら、またダメだった。憂鬱、不安、恐怖。グーッと胸へ詰まって来て、じっとしてられない。家で夫の両親も交えての食事がとても辛い。緊張で食べられない。

今はパニック症状より鬱の方が強いらしい。いろいろ尋ねていると、最初のパニック発作の少し前に、妊娠中絶している事が判った。中絶によって陰を傷つけた可能性がある。温清飲に柴胡・連翹・甘草を加えて送る。四物湯で補い、柴胡と甘草で解鬱する。パニックは後で鬱になることが多い。

【処方】当帰 4 g 川? 4 g 白芍 4 g 乾地黄 g 黄? 3 g 黄柏 3 g 梔子 2 g 黄連 1 g
柴胡 3 g 連翹 3 g 甘草 2 g 以上一日分。水煎服用。十日分。

効果があった。まずグーッと胸に来ることが無くなった。食事は一人でするようにして気分はいくらか楽である。次第に良くなり、数ヶ月で完治した。

パニックになる人は恐がりのくせに気が強い。パニックの前期と後期で症状が変わる。それに合わせて治方も変える。前期では恐怖。後期では鬱になる。前期は甘草瀉心湯が多い。後期は甘麦大棗湯、甘麦大棗湯合半夏厚朴湯、甘麦大棗湯合甘草瀉心湯、鈎藤散、温清飲、柴胡加竜骨牡蛎湯等である。鈎藤散と温清飲には必ず柴胡を加え、柴胡加竜骨牡蛎湯には芍薬を加えて鬱に対応する。

急迫と口乾。これは甘草瀉心湯証の判定には重要である。ある先輩は甘草は口乾を治すと言った。薬徴は甘草の主治は急迫と言う。

甘草瀉心湯

狐惑の病たるは、恐慌、嗄声、咳嗽して終夜眠らず。

森周作君。二十四歳。テレビ局社員。母親と来局。よく下痢する。疲れるとすぐ咽が痛くなる。いつも咽の調子が悪い。時には咽痛から発熱する。高熱になることもある。背が高く血色が好い。元気なのだが、テレビの仕事は秒単位で、ストレスが多く神経がすり減る。

脈は寸微にして尺は大緩。舌は白膩苔に紅点が多数。舌の紅点は黄連だろうか。イライラしやすい人なら、黄連が良い。これさえ飲んでいけば、下痢にも咽痛にも、ストレスにも好いからねと、甘草瀉心湯を調剤した。

【処方】甘草4g半夏6g人参3g乾姜3g大棗3g黄芩3g黄連1g

以上一日分、水煎服用。十日分。

咽が弱くて下痢し易いのは、半夏瀉心湯にも甘草瀉心湯にも有るので、どちらにするか迷った。ただ周作君には幾らか口乾、頻尿、多汗の傾向が有り、これを甘草の心虚の証として、甘草瀉心湯を選んだ。

一ヶ月して母親から電話があった。実は息子は囑望され、先月、急に東京のテレビ局に移って仕事を始めているが、どうも様子がおかしい、大変な事になっていると。

「どんな風に、おかしいんですか？」

「咳をしながら、電話して来て、それも、まるで声が出てないんです。」

「咽が痛いんでしょうか？」

「痛いんじゃないくて、声がかすれてしまってますね。」

「何と言って、電話して来るんですか？」

「眠れないとか、とてもやれないとか、すぐ来てくれとか、言うんです。なんか普通じゃないです。」

狐惑病である。

「あのね森さん。薬は、あれで好いんだけど、飲んでたのかな？」

「まだ一回も飲んでないんです。一回も服まないうちに引っ越しのどさくさで、お薬が

失くなって。」

母親は甘草瀉心湯を持って東京へ飛んだ。翌日、状況を報せて来た。

「息子の所へ着いて、すぐに煎じて、一回は飲ませたんですが、昨夜は息子も私も一睡もしませんでした。息子は一晩中、コンコン咳が出て止まらないし、何か目つきが普通じゃないと思いました。」

「おかしくなってから、どのくらい日が経ってるんだろうか？」

「多分、一週間ぐらいだと思います。何日も部屋の外へは、一歩も出てないそうです。」

「何日もですか？ 怖くて、出られないのかな？」

「そうだと思います。私が行った時、部屋のカーテンを全部締め切って、真っ暗な中で、それも部屋の隅の方へ隠れるようにして、コンコン咳をしながら、居たんです。」

「何が怖いかに聞いてみましたか？ 誰かに見張られてるとか、悪口を言われてるとか、言いませんか？」

「そんな事は言って無いですね。怖くて不安で外へ出ないんだと思います。」

頻繁に連絡を取り合う事にする。初めは薬の効果か、母親が来て安心したのか、よく分からなかった。しかし、その後の改善は速やかだった。次第にリラックスして、咳をしながらも風呂に入ったり髭を剃ったりするようになった。十日過ぎる頃には咳も止み、声も出るようになって安眠出来るようになった。

風邪くらのことで、そう長く休む訳にもいかない。ちょっと早いかなと思われたが、二週間目に出社した。甘草瀉心湯は数ヶ月続けた。しかし、もともと強気の人なので、母親は不安がったが、いつの間にか飲まなくなった。

元気な若い青年が、終日眠らず、一歩も外へ出ずというのだから、狐惑の不安恐怖というものは、よほど、すさまじいものようである。生命に係わる、と感じたに違いない。

[文献摘録]

【金匱要略】（百合狐惑陰陽毒病篇）

狐惑の病たるは状は傷寒のごとし。黙々と眠らんと欲して目閉ずるを得ず、臥起安からず。喉を蝕するを惑となし、陰を蝕するを狐となす。飲食を欲せず食臭を聞くを悪み、其の面目は、乍ち赤く乍ち黒く乍ち白し。上部を蝕まれれば声嚔る。甘草瀉心湯之を主どる。

できもの

七度の転居、表の気は虚して?を病む。脈は短。

父の知人。男性。四十半ば。父が犬を連れて公園へ行くとよく会う。血色が良い。よく肥っている。元気そうだ。目が大きく親しみやすい。百六十五センチ、七十二キロ。顔は日に焼けて黒い。テカテカしている。ゴルフの日焼けではないらしい。自営業と聞くと、

生業は何か知らない。

「身体中どこでも出物が次々出て困るんです。今もここと、足にも幾つか。これはこの間まで出てた所。」

「いつ頃から、ですかね？」

「五六年かなあ。出て大きくなって化膿して、膿が出て治るまで十日から二週間。常に三つ四つは身体のどこかに出てる。」

直径3～4センチの化膿する出来物が次々と出来る。糖尿病ではない。この病気は病気の進展に従って、例えば潰乱前と潰乱後など、処方を変える事が言われる。例えば、出来物が硬く、張りのある間は排膿散。軟化すれば排膿湯。口を開けば托裏消毒散。潰乱して収束しかねるようなら千金内托散。

しかし、この人は同じ身体の上で色々な段階の化膿症が見られるのだから、時期による薬の使い分けは、不可能である。更に身体の事を色々尋ねる。しかし、さほどおかしい所は見あたらない。どこか声の調子がピリッとしないが、病気と関わりがあるのかどうか。

舌を診る。淡紅色で白苔がある。概ね正常舌である。

脈は緩大にして短。大きな身体に見合った大きなゆったりした脈である。しかし短脈である。

短脈は気虚である。よほど虚証の人に見られる。「気、相い接続せず。」と言うから、呼吸は浅く、動く度に息が切れる。勿論、この人はそんな虚証ではない。しかし短脈なのだから「脈の気」が不足しているのは間違いない。特に表で気が不足になり、皮膚は気血不足になっているかも知れない。健康そうでも、体表面の気血を増す必要がある。皮膚が生き生きすれば、出来物は自然に消退する。

処方千金内托散加白芍。人参、当帰、黄耆で血気を増す。防風、桔梗、白芍、桂枝、川芎で解表し肌表を温め、皮膚の血管を拡張して、血気を皮膚へ集める。厚朴は化膿巣から去湿して皮疹を縮小する。

芍薬は肥満した筋肉を引き締め、余分な水を追い出して筋肉を生かす。

調剤室で調合にかかる。後から父が入って来た。

「あの人は、五年間に七回も家を変ったらしい。」

「市内で？」

「うん。」

「仕事の都合で？」

「いや、それは分からん。」

「何の仕事？」

「それも聞いた事がない。公園では、いつもシェパードの雑種を連れてるがな。」

【処方】人参4g 当帰4g 黄耆6g 桂枝4g 川芎3g 厚朴3g 防風3g 桔梗3g 白芍3g 甘草2g

白芍薬4g 以上一日分、水煎服用。十日分。

先ず新しい出来物が出なくなるのが大切である。幸い服用中の十日間、新たな出来物は出なかった。

脈も、短が消えて緩になった。有効である。続服すると古い物も綺麗に治って、一ヶ月もすると薬を止めても良さそうな状態になった。再発はしなかった。

短脈は、恐らく引越し疲れだろう。五年に七度の引越しでは、同じ所に一年と居ないことになる。それでは生活が落ち着かない。外見からは分からないが、思いのほか苦勞が多く、精神的、肉体的の疲れが有るのだろう。声に迫力がないのも、その辺の事情と係わりが有るかも知れない。

脈の長短。私の指の幅を越えて脈拍つのが長。長さが私の指の幅に足らないのが、短である。

十六味流気飲

肝膿瘍、気を行らして、病巣を打ち壊す。

十六味流気飲は癌に効くと言われたりする。しかし、処方構成から見ると、千金内托散の加味方とも言える。千金内托散に烏薬、木香、枳殻、檳榔、紫蘇葉の行気薬を加え、更に芍薬も加えている。

高校の同級生、金子真一君から電話。どこかガヤガヤと人の多そうな所から電話している。

「金子です。今ね、市立病院に入院してるんだけど、熱の下がる漢方ない？」

「君が？ 何処が悪くて？」

「最初から話すよね。二週間前ガタガタ震えが来て熱が出て、近くのM先生、友達だから、診てもらったら、白血球が多いからどこか化膿してるって。ここを紹介されて来て、CT撮ったら肝膿瘍だった。」

「熱が高いの？」

「毎日夕方、ガタガタ震えて三十九度か、それより高く出る。座薬で下げるけど、翌日また出る。」

「手術の予定は？」

「まだ、様子見てるらしい。十分、膿みきったら、手術するらしい。CTで見ると、肝臓がね、直径が十センチほどの薄い円盤状に炎症してるらしいよ。」

「炎症だけで、まだ化膿してないの？」

「そうらしい。あの、家内に薬、取りに行ってもらうから。」

座薬をしなければ、自然には発汗する事は無い。座薬をしなくても、早朝は三十七度台に下がる。

熱の出方から、病は少陽に在るとする。小柴胡湯に消炎解毒の薬物を加えて調剤する。

【処方】柴胡 6 g 半夏 6 g 黄芩 3 g 人参 2 g 生甘草 2 g 大棗 3 g 生姜 1 g 茵陳 5 g 連翹 3 g 桔梗 3 g

防風 3 g 以上一日分、水煎服用。七日分。

市立病院のロビーから、金子君が電話してきた。

「一応、七日分全部飲んだ。経過を言うとね、飲み始めたらサムケは起こらなくなった。二日目に、朝六時の体温がピッタリ三十六度だったんで、或いはと思ったけど、それ以外の日は三十七度台だった。夜は二日ほど三十九度近くになったけど、三十九度以下なら座薬しないでも好いって言われてるから座薬は使ってない。」

前方に梔子、金銀花、蒲公英を追加して解毒と消炎を強化する。すると、四日目、急に全く発熱しなくなった。後はCTの結果を待つ。更に数日後に電話。

「今日、CTの結果を聞いたんだけど、炎症してる部分が、八センチに縮小してるらしいよ。このまま続けたら、もっと小さくなるかなあ？どんどん小さくなったら、手術しないで好いよね。」

「さあ、どうだろうか。全く化膿はないのかな？」

「炎症の真ん中に、円形の軟らかい所が有るらしい。だけど、まだ化膿してないって。」

「薬は、あの調合のままで行くよ。タンポポが効いたみたいだから、やれる所までやってみよう。」

「え、タンポポなの？ 医者には小柴胡湯って言ってあるのに。」

一ヶ月で炎症の範囲は三センチに縮小した。更に一週間して病巣は痕跡程度を残して消え、病気はほぼ終息したと説明された。ところが突然、金子君がタクシーで乗り付けた。

「あの、退院、出来なくなったんだよ。」

「なんで？」

「退院する前に、もう一度、CT撮ったら直径三センチ、深さ一センチの大きさで、膿が出来てて。」

「炎症の真ん中に在った出来物のシシみたいな所か。どうするんだろ、手術するのかな。」

「まだ、どうするとも決まっていらないけど。いまさらねえ。」

「急いで方針転換だな。炎症じゃなくて、しこってるのをプチ壊さないと。」

脈を診る。脈は浮弦緩大。まだ破気や行気に耐えられる。処方十六味流気飲。炎症の再燃が恐ろしいので、温性の木香と烏薬は去る。病気が長くて疲れもあるだろうと、檳榔子も去る。解毒や排膿のための金銀花、皂角刺、青皮を加える。

【処方】当肌 3 g 川芎 3 g 白芍 3 g 人参 3 g 桔梗 3 g 桂枝 3 g 白朮 3 g 黄耆 3 g 厚朴 3 g 枳殼 3 g

防風 3 g 紫蘇葉 2 g 甘草 2 g 金銀花 3 g 青皮 3 g 皂角刺 3 g 以上一日分、水煎服用。七日分。

一週間目、膿の範囲が縮小した。二週間目、エコーでは膿の部分は確認できなくなった。四週間目、CTでも痕跡を残すだけとなり、結局、手術しないで退院した。

アレルギー性鼻炎

鼻水、くしゃみ、目やに、目の痒み、両の寸脈は浮。

大川修司さん。三十九歳。会社員。すらりとした体型。色白で体毛が多い。ひどい鼻声である。

「朝はクシャミの連発。それから鼻水がポタポタ、目が痒くて目やにが出て。昼間はちょっと良くて、夕方から、またクシャミの連発です。」

「昼間は軽いという人が多いですね。」

「職場でまだ暖房してるからですよ。外へ出たら、すぐ鼻水とクシャミです。」

「季節的なんですか？」

「七八年前に始まった頃は、春だけでした。今は春、秋、冬ですね。」

「夏はないんですね。手足は冷たくなり易いですか？」

「いや、寒がりじゃないんです。動くとすぐ汗ばむ方なんです。」

その昔、鼻炎には小青龍湯ばかり使った。そのうち附子剤、柴胡剤、半夏瀉心湯、六味丸、麦門冬湯、升麻葛根湯など、応用する処方が拮がって、この二十年程、小青龍湯には御縁がない。

夏の間は発症しなくて、暖かい所で軽快するとすれば陽虚である。しかし手足の冷えは無く、動くとすぐ汗ばむ。

「咳が出るとか、咽がおかしいとか、無いですか？」

「よく咽が痛くて、耳鼻科へ行くと咽の奥が赤いって言われます。」

「他に何か、病気はないですか？」

「十年前、腎炎で十ヶ月ほど入院しました。最近まで、時々尿検査してたんです。」

腎炎と聞いて、小柴胡湯を思い浮かべる。咽が赤いのも腎炎の小柴胡湯証の名残じゃないだろうか。咽の炎症、鼻炎、腎炎、どれも炎症である。無関係ではない。しかし小柴胡湯を用いるとして、汗が出やすい事や陽虚らしい徴候があり、いずれも柴胡桂枝湯を思わせる。実は体毛が多いのも、柴胡桂枝湯の体質の人である。

しかし肩こりが無い。芍薬の有る柴胡桂枝湯証は肩が凝る。凝らないのは小柴胡湯のはづである。

脈では、もし脈が浮いて大きければ柴胡桂枝湯、浮いて細い脈なら小柴胡湯である。どちらも脈は寸微尺弦で、人迎氣口は左右差がなく浮弦大である。

舌を診る。小柴胡湯なら白苔があるはずだが、苔は何も無い。色は淡紅。やや乾燥している。舌は厚目で小さく充実した形である。やや実と見て良い。柴胡剤でもやれそうだ。

脈を診る。両寸に特徴がある。寸が顕著な浮である。寸は表である。外に風邪がある。桂枝が必要である。しかし左右の関は細弦である。左右或いは右の関脈が細い時は芍薬は用いない。従って柴胡桂枝湯ではない。両尺は弦大有力。人迎氣口も左右差がなく弦大緩。脈拍は一分間に八十。やや速い。熱である。左右の関は細くても按じて根脚があるから虚ではない。小柴胡湯で良い。

処方の小柴胡湯加桂皮。両寸の浮は表邪として桂皮を加える。

【処方】柴胡 5 g 半夏 6 g 黄芩 3 g 人参 3 g 甘草 2 g 大棗 3 g 生姜 1 g 桂皮 4 g

以上一日分、水煎服用。七日分。

良く効いた。ひと月もすると、漢方薬は必要なくなった。脈に根脚があるとは、細洪の脈であっても、やや按じて指の力に抵抗する力がある事である。それは、やや速めの脈拍にも負っているだろう。脈が速いと、打ち込んでくる勢いが違う。

桂皮は表邪を治す。その証は両寸の浮、自汗、朝のくしゃみ、鼻水である。小柴胡湯は少陽の邪を治す。その証は、常にある咽痛、咽の発赤、脈弦細洪、やや速い脈である。腎炎の既往も小柴胡湯の範疇である。小柴胡湯なのに舌に苔が無いのは、病の所在がやや外に偏っているからだろう。

少陽病に兼ねて、表証が有るとすれば、柴胡桂枝湯である。しかし、柴胡桂枝湯証で寸脈が顕著に浮を呈するという例は見た事がない。小柴胡湯加桂皮の証は、小柴胡湯の特殊な変証である。

桂皮で治すべき表邪があるのに、人迎氣口は左右差がない。外感はずに表われて、人迎に表れなかった。その理由は定かではないが、邪が少陽に入ると、普通、人迎氣口は左右差がなくなる。

小柴胡湯加芍薬は両関脈弦大の者に用いる。両尺も弦大である。寸小尺大である。更に痛みや凝りがあるとか、残便感や兎糞が確かめられると、芍薬の加味は確実である。芍薬の加味は裏に繋がり、肝鬱の四逆散、大柴胡湯へ発展する。

小柴胡湯加桂皮芍薬、即ち柴胡桂枝湯の脈は小柴胡湯加芍薬に似て、やや全体に浮き、浮弦大緩である。人迎氣口はともに浮弦大緩。寸小尺大である。

胃弱体質

生来の胃弱、安中散を愛用して七年。

村上潤也君。三十四歳。独身。背が高く面長な顔立ち。色が白い。百七十九センチ。六十九キロ。

彼は七年も安中散を愛用している。これさえ服んでれば安心、という顔である。ただ、私には、彼に安中散が合うとは見えなかった。とは言っても、気に入って飲んでいるものを、他の薬に変えさせるのは難しい。親しくなって、雑談でもする様になるまで待つ。

「僕は、昔から胃弱なんで。年中、胃を気にしてないといけなくて。」

「安中散は、効かないんですか？」

「昔は、もっと胃が悪くて困ったんです。それが、ある所で安中散を勧めて下さって、良くなったんです。でも胃弱は胃弱ですから、いつも胃が悪くていけないんです。」

「痛い？ それとも、胸ヤケするとか、もたれるとかですか？」

「重いのかなあ。苦しいんですよ。」

「ちょっと、舌を出してみて。」

何と、粘った白苔がベツトリである。これで安中散なんか飲んでいて良い訳がない。まるで寒熱が逆である。舌は大きく厚みもあり、立派な物である。体力のある人に違いない。舌は赤くないから胃が悪いと言っても炎症は少ないらしい。

脈を診る。彼の脈は四逆散や大柴胡湯に近い。寸は微。関と尺と人迎気口は弦大有力。大きくて力のある脈は彼の硬い性格、思いこみの強さ、意志の強さである。警戒心旺盛な肝が脾土を克している。腹診しなくても、彼のお腹が緊張しているのが想像できる。

短い期間、試しに別の薬も飲んでみないか？と言ってみる。不安が強ければ強いほど、頑固になるものだが、押し問答の末、とうとう小柴胡湯加芍薬を調剤した。

【処方】柴胡 5 g 半夏 5 g 黄芩 3 g 人参 2 g 甘草 2 g 大枣 3 g 生姜 1 g 白芍 6 g

以上一日分、水煎服用。十四日分。

「安中散と、どっちが良かったですか？」

「安中散も、服んでさえいれば、良かったですからね。まあ新しい方も効いてる気はしますよ。」

舌のベタ付きが減少している。安中散が服みなくなったら、いつでも元へ戻れるからと小柴胡湯加芍薬を続ける。安中散は、いくら服んでも胃の存在を忘れる事は無かった。しかし今度はやや気楽そうにしている。だから安中散の時ほど熱心に服まない。恐らく胃の苦しさは感じていない。ただ心理的な胃の不全感が拭えない。彼の几帳面さが警戒心となって、彼を小心にさせる。しかし、小柴胡湯加芍薬は肝気を押さえて脾胃を解放する。数年飲んで、次第に服薬は遠のいた。

某日、彼から電話があった。結婚もして半年前から隣県に転勤になっていると言う。

「胃は悪くないんですが、何か鬱病になったみたいなんですよ。」

「本当に？ どんな症状？」

「全然、外へ出られなくて、ずうっと寒くて、時々は熱くなったりもするんで。」

「眠れますか？」

「何か身体がぬくもらない感じで、寝つけなくて、あまり寝てません。」

一週間も家から外に出られない。だから鬱病だと言うのだろうが、気分は鬱ではない。全身の毛穴が勝手に閉じたり開いたり、サムケがしたり熱くなったり、ザワザワと落ち着かない。素より小心な人である。身体のザワついた感じは心理にも影響する。訳の分からない身体の違和感に怯えている。

熱くなったり寒くなったりとは営衛不和である。桂枝湯が必要である。或いは「恐れは腎をして虚さ使む」と言うから、桂皮を加えて腎陽を補うとも言える。柴胡桂枝湯を転勤先へ送る。

【処方】柴胡 5 g 半夏 5 g 桂皮 4 g 白芍 3 g 黄耆 3 g 人参 3 g 大棗 3 g 甘草 2 g 生姜 1 g
以上一日分、水煎服用。十日分。

十日で自称鬱病は完治した。その後は、また小柴胡加芍薬に返ってしばらく服用した。

前立腺肥大（1）

何ぞ左尺の脈は独り浮いて、甚だ大なるか？

吉川貞夫氏。六十六歳。とても小さな人である。百五十三センチ、四十五キロ。五六年前にも来局している。その時の主訴は便秘であった。小建中湯が良く効いた。

「小便が近いので弱りましてな。医者で診て貰うと、マエダテセンたら言う所が悪いとかで。」

「ああ、マエダテセンね。」

「解りますかな？これを、手術をせんで、治すという事が出来ますか？」

「一日に何度くらい、トイレに行きますか？」

「十数回です。昼間だけで。」

「夜間にも、起きられますか？」

「さあ、それが一番の問題で。ちょっとウトウトすると、すぐ行きとうなって、寝る間がない。」

医師は特に手術を勧めてはいない。前立腺はさほど肥大してないのではないか。それが証拠に尿利は快調である。

「以前にも、いらっしゃいましたよね。」

「そうそう、あんたに飴を溶かすケンチュウとか言う薬を、作ってもろた。」

「今は便秘しないんですか？」

「うん。医者に、下剤は下利して困ると言うたら、座薬をくれて。」

「なるほど。」

脈を診る。意外である。左尺の脈が他の部の脈に較べて三四倍も大きく、無力ではあるが著しく浮いている。小建中湯の頃には脈はすべて緩弱であった。左尺は腎膀胱である。左尺の小は腎虚である。では左尺の浮虚大とは何か。昼夜併せて二十回ほどの頻尿である。左尺の浮虚大を膀胱腑の虚熱とする。虚であっても腑の熱だから、脈は浮いて甚だしく大になる。実熱でなく虚熱であるから、頻尿以外には痛みも不快もない。本当は膀胱の病でもないだろう。左尺以外の脈はすべて沈細有力である。沈は裏である。有力は実である。実は熱である。実熱とする。細は津液枯渴である。

恐らくは胃熱が膀胱腑へ波及し、虚熱となって膀胱の調子を狂わせている。虚熱でも実熱でも、熱は津液を枯渴させる。津液が枯れれば脈は細になる。熱の原因は座薬かも知れない。座薬には大黃のような清熱も小建中湯のような脾陰を補う作用もない。胃熱で津液が枯れるのを脾約という。

処方麻子仁丸。

【処方】麻子仁丸、一日六十丸、分三。七日分。

「あの薬、もう少しもらっとうか。」

「効きましたか？」

「うん、予想外に効いた。」

「夜は、トイレに起きますか？」

「いや、とんと起きんな。昼も六七回になった。」

「座薬は使ってますか？」

「そう言やあ、座薬使うのを忘れとるようなが。あれは、お通じの薬ですか？」

麻子仁丸は趺陽の脈浮洪である。私は足の趺陽の脈は診ないが、趺陽の浮洪と私が診た左尺の浮大無力とが近似した脈状であるのは、偶然ではないだろう。麻子仁丸の脈は、龍野一雄先生は浮?、内藤希哲は浮洪有力、清末民初の曹穎甫は脈大と記載する。

〔文献摘録〕

【傷寒論】（陽明病篇）

趺陽の脈、浮にして洪。浮は則ち胃氣強く、洪は則ち小便数し。浮洪は相搏して、大便は則ち難く、其の脾は約を為す。麻子仁丸之を主どる。

前立腺肥大（2）

肝鬱脾虚、尿頻尿少、少腹重墜、脈弦緩。

佐藤博史さん。公務員。五十四歳。優しい印象の人である。元気そうだ。落ち着いた声で話す。

「前立腺肥大で、尿の出が悪いんです。尿量も少ないです。水分の摂り方が少ないと更に減りますね。」

「排尿の途中で、止まったり出たりしますか？」

「そんな事はないんだけど、膀胱の辺りが変な感じでね。」

「尿が出残ってる感じ？」

「いや、そんなのでもない。脹ってる感じかな。」

「排尿した後は、膀胱の脹ってる感じが消えますか？」

「いやあ、消えないなあ。」

下腹の重く脹る感じが有る。逍遙散の主治文に「少腹重墜」という言葉が出て来るが、或いはそんな症状かも知れない。夜間の排尿はない。昼間はやや多く十回程。

舌を診る。乾燥した多量の白苔があり、苔は舌面を厚く広く覆っている。白苔は柴胡剤か？舌は色が薄い。舌の両辺に紫条がある。舌の淡色は血虚である。舌の紫条は？血である。

脈を診る。脈は弦緩。寸小尺大。人迎と気口の脈も弦緩大。左右差は無い。仲景の柴胡剤や、その類方を使おうとすれば、人迎と気口は俱に弦大で脈は寸小尺大、舌には白苔が有るとするのが望ましいが、条件的には概ね符合する。ただ舌の色が淡いから補血と補脾が必要である。柴胡剤で脾虚と血虚が有るとすれば、処方は逍遙散である。逍遙散を想定して更に問診する。

「几帳面な、性格ですかね？」

「まあ、自分としちゃあ、きちんとやる方が気分は良いね。」

「几帳面にやらない人が居ると、腹が立ちますか？」

「そうだね。口には出せないから、余計にね。」

「言いたい事が言えない性格ですか？」

「言えませんね。絶対に。」

こだわる。しかし自らの主張は極力抑える。だからストレスが溜まる。腹が立つ。嫌な気分を引きずって憂鬱になる。私はこれを肝鬱性格とか肝鬱気分とか呼んでいる。逍遙散を作り、小便不利には香月牛山の説に従って鈎藤を加える。

【処方】柴胡 3 g 白芍 3 g 当帰 3 g 白術 g 茯苓 3 g 甘草 1. 5 g 薄荷 1. 5 g 生姜 1 g 鈎藤 6 g

以上一日分。水煎服用。二週間分。

効果があった。尿は快利して下腹の不快感も消えた。ただ舌の紫条はそのままで、その原因も治法も分からなかった。ただ？血剤が必要とも思えなかった。

半年後、異変があった。痛風の発作で足の甲が腫れ来局。痛風であれば、湿邪を考慮する必要がある。脾虚があると湿に感じやすい。以前、舌に多量の白苔が有るのを見た。逍

遥散にしては多すぎる白苔。あれは湿邪だったに違いない。

舌を診る。いつもの白苔が痛風発作の炎症のため、汚い黄苔に変っている。逍遥散の補血が効いたか、炎症の熱によったか、舌色は淡から紅に変わっている。両辺に紫条がある。

脈を診る。今回は診脈の途中で脈が変化する。初めは弱細、後では弦大緩。人迎と気口も脈状が変化する。初めは沈、後では浮である。変化する脈は気滞である。以前より肝鬱気滞がひどくなった。

「実は、毎年この時期、若い人を集めて、研修、やらなきゃならんのです。それがストレスでね。」

「そうですか。近頃の若い人は、我々とは、ちょっと考えが違いますからね。」

「そうなんです。」

ストレスで肝鬱気滞になり、気滞から湿滞になり痛風になったとする。土茯苓を使ってみる。土茯苓は尿酸排泄の効があると、朱良春用薬経験という本に出ている。鉤藤を去って土茯苓と海桐皮を加え、白朮は蒼朮に換え、白芍も赤芍に換える。土茯苓、海桐皮、蒼朮は去湿の薬である。

【処方】柴胡3g 当帰3g 赤芍3g 蒼朮5g 茯苓5g 薄荷1.5g 甘草1.5g 生姜1g 海桐皮5g 土茯苓12g 以上一日分、水煎服用。二週間分。

結果。少し足に残っていた痛みも取れ、数ヶ月で尿酸値も低下した。この処方では小便も快利する。舌の紫条も消えた。湿滞が解消して気も血も流れたようだ。朱良春先生は、痛風は湿濁?阻であると言う。

前立腺肥大（3）

尿頻にして間に合わず。

「おしっこが近くて、ちょくちょく間に合いません。トイレの前まで来てるのに間に合わんです。」

「勢い良く出ますか？」

「いや、良くはないです。腹に力を入れて出します。」

「夜間には、起きますか？」

「昼ほどには行きませんが、それでも、一晩の間に四回は行きます。」

野本さん。八十三歳。間に合わない。ちょっとでも尿意を感じたら、あそこの先を掴んで駆け出す。それでも時々失敗する。昔、肝臓病に罹ってから手の掌が赤い。特に朝は血の流れが悪く、真っ赤になる。手の甲も静脈が浮いて赤い。咽も渇くようになり、水を多量に飲む。最近、手足が厥冷する。手足が冷えて尿が近いのかとコタツをしたが、頻尿は治らなかった。手に触るととても冷たい。

肝臓病から?血になった。手が冷たいのが問題である。単なる冷えと区別しなければならない。以前、三十代の若い男性が心筋梗塞の手術を受け、退院してきた時、顔は真っ赤なのに手は氷の様に冷たく、静脈がみんな浮き出て手は紫色だった。その場で丹参の粉末を服用させると、三十分もしないで厥冷が解消した。梗塞になりそうなのは、心臓ばかりではないという事だ。

脈舌を診る。舌は暗紅色で、舌辺に紫条が見える。?血である。少量の汚い白苔がある。脈は数にして細澁無力。澁は?血。細は虚。無力も虚。脈拍は一分間に八十八。不整ではないが、弱い数脈は心臓が弱っている気がする。補虚強心と駆?血に田三七の末を用いる。

【処方】 田三七末 6. 6 g (分3吞服) 十五日分。

服薬後は尿の出方がとても良くなり、ずっと我慢も出来るようになった。福建省永春県中医院の林祖賢医師は、冠動脈疾患に田三七を利用するうち、前立腺肥大の改善が認められる例を経験した。そこで前立腺肥大の患者に田三七を投与した所、十二例で排尿の正常化と前立腺の縮小が認められ、十一例で排尿の改善と前立腺の萎縮傾向を認めた。無効は三例だったと報告している。

気虚脱肛

肛脱、不痛不痒。脈は細澁、わずかに弦。

父の友人。六十六歳。元銀行員。贅肉のない小柄な老人。顔は浅黒く赤みや艶が乏しい。

「実は、わしゃ痔が悪うてな。恐らくは、現役の時に乗っておったバイクが原因と思うのじゃが、脱肛と言うんじゃろ、出て来て困るのよ。」

「そうだったんですか。」

「痛みますか？」

「いや、痛とうも、痒ゆうもないのよ。出さえせにや、ええのじゃが。」

「手で押し込んだら、入りますか？」

「うん。すぐに収まる。出っぱなしではない。」

「やはり、排便の時に出て来るんでしょう？」

「そうそう。それと、歩いておる折りにも出て来る。」

肛が下垂して無力性に脱肛するのは脾虚が多い。先日も若い婦人の産後の脱肛を補中益气湯で治した。

「疲れますか？」

「疲れるてて、一日楽隠居の身じゃけれ、疲れる事も無いわい。する事がない。」

「冷えますか？ 足が冷たいとか？」

「意識した事は無いが、逆に秋口になると、足の裏が燃えて靴を脱いだりする事が有る

ぞな。」

「汗をかきますか？」

「まあ、あんまりはかかん。人よりや少ない方じゃろ。」

「あまり、ご病気などはなさないようですね。」

「おかげな事に大病はしたことがない。それでも去年の冬に風邪を引いて、ひと月も身体がふらついた事が有ったぞな。」

「メマイですか？」

「いや、メマイではのうて、身体がしゃんとせなんだ。」

舌を診る。淡紅色。色がうすい。潤っている。黄苔がある。黄苔も潤っている。

脈は六脈も人迎気口も浮いて細弱澁。わずかに弦。左右差はない。脈拍は一分間に六十。遅い。

黄苔の意味は分からないが、潤っているから実熱ではない。脈の浮細澁遅は虚である。わずかに弦とは、弦とは言いかねる程の弦である。弱中に弦の感触が有る。

気虚による脱肛に違いない。参苓白朮散証の脈にも、虚中に弦がある。使い慣れた参苓白朮散の脈から類推して、四君子湯証とする。よく痔に使われる補中益気湯とは脈で区別する。補中益気湯の脈は、気口の脈が浮大で人迎に倍する。他の脈も気口の脈に同じく？、即ち緩大無力である。

処方 は 四君子湯。

【処方】 紅参 5 g 白朮 5 g 茯苓 5 g 甘草 3 g 大棗 4 g 乾生姜 1 g 以上一日分、水煎服用。十日分。

結果は良好。服用三日目で脱肛は起きなくなった。旅行して一週間ばかり休薬したら症状が出現したが、帰宅して服薬すると、三日で元に戻った。続服三ヶ月。完治した。

毎日、人参を5グラムも飲んだが、食事の量も体重も顔の色艶も、何ほど変わる所も無く、ただ脱肛が治っただけである。不思議な気がした。

書物によると、気虚下陷の症状は「面色淡白、眩暈、易汗、短気、倦怠、食少、便溏、腹部重墜、便意頻繁、小便淋瀝」である。四君子湯の症状は「面色萎白、言語輕微、四肢無力、脈来虚弱」である。

脱肛に四君子湯を用いた。しかし記載される様な症状の多くは存在しなかった。つまり、すっかり気虚の症候がそろった四君子湯証を待っていては、四君子湯を使う機会は無いついことになる。参苓白朮散証も、気虚の下痢のはずだが、実際には食欲もあり、下痢の外には症状がない。

青瓢箪

飲食すること人に数倍。少しも肥らず。

田舎の町から、母親が中学生の男の子を連れてきた。鼻炎の薬が欲しいと言う。なるほ

ど、始終鼻をクシュクシュいわせている。

ところが中学生を相手に問診していると、おかしなことを聞き出した。一食に御飯を大きな茶碗で七八杯もおかわりすると言う。どう考えても、私の食べる量の五倍である。勿論、おかずも食べる。

身長は百六十五センチ。体重は五十キロ。体重はやや少な目。毎日食べている大量の御飯は、一体どこへ消えるのか。

改めて中学生の顔を見る。顔は青く冷たく、まるで血の気がない。色白などと言うものではない。あくまで青い。丸刈りで、シミひとつなく青くツルツルした面長な顔は、さながら大きな青い瓜を見るようである。まさしく青瓢箪である。瓜として青物市場に出せば立派なものだが、元気盛りの中学生の顔としては、如何な者であろうか。第一、青い顔してモクモクと、七八杯も御飯を食べてるなんて気味が悪い。手足の冷えは無い。便秘も下痢も無い。

舌を診る。舌は淡紅で白苔がある。舌は正常である。

脈を診る。脈は浮にして緩弱。やや細。陽虚ではない。

かつて読んだ本に「飲食、筋肉にならず。」というのがあった。食べても食べても、少しも肥らず、脾胃の敗れたという者に、参苓白朮散を用いるとあった。

「お母さん、これはおかしいですよ。」

「御飯を制限してみましようか？」

「いや、それでは意味がないと思いますよ。」

「この子は鼻が悪いぐらいで、元気なんですよ。病気知らずで。」

「鼻にも胃腸にも効く薬が有るんですが、試してみませんか？鼻炎の方は極く軽いものです。それより胃腸の能力に問題が有ると思います。食べたものが利用されないで、ただお腹を通過してますね。」

「そのお薬は、鼻にも効くんですか？」

「ええ、勿論効きます。」

【処方】参苓白朮散 3g × 3 × 30

一ヶ月後、二人はニコニコしながらやって来た。

「先生、食べる量は半分になったのに、体重は四キロも増えたんです。」

「鼻はどうですか？」

「鼻もいいです。クシュクシュいわせなくなりました。」

男の子の印象は一変した。色艶が良くなり、顔に赤みも差して、中学生らしい精悍そうな顔付きになっている。ひょっとすると、以前は青膨れした顔だったのかも知れない。参苓白朮散は気虚の浮腫を治す事がある。明らかに、顔の輪郭が以前と違っている。

自信をつけたのか、男の子は私と母親のやりとりを、楽しそうに見ている。母親が興奮したように「食べる量が半分になったのに」と言うと、歯を見せて笑った。

保元湯

汗をかきやすく、冷えやすく、昏々と眠る。

藤中一雄氏。六十歳。数年前まで関西方面で会社を経営。背が高い。百八十センチ、六十八キロ。

彼は数ヶ月前、帯状疱疹に罹った。ところが、その後どうしても身体が元に戻らない。

「ヘルペスが、全身に出てましてん。」

「うまく、治りましたか？」

「ええ、もう痛みはありません。ただ元気がね。出ないんです。寝てばかりで。」

「なるほど。身体がだるいんですね。」

「いやあ、だるいのんとは違うんです。寝てしまうんですわ。毎日十三時間、十五時間、寝てます。汗ビッシヨリかいて、グッスリ眠ってるんです。いまでも横になったら、すぐ寝てしまう思いますわ。」

「ビッシヨリ汗をかいて、寝てるんですか？」

「そうです。起きてる時はちょっとも眠うないのに、それが眠り始めると、何時間でも醒めないんです。かと言うて、途中で起こされて眠たいかという、そうでもないんです。実は、ヘルペス出たときも、何日も昏々と、眠とったんです。」

「寝れば、昼でも夜でも、汗は出るんですね？」

「そうです。そうですけどね、寝なくてもね、ちょっと動いたら、すぐ汗が出よります。元から汗かきの方ではあったんですけど、この所の汗は、ちょっと異常と違いますかな。」

気虚である。或いは陽虚である。皮膚の毛穴が開きっぱなしになって、開いたまま閉じないから、暑くもないのに汗が出る。肺は皮毛を主どる。大いに気を補って、皮毛の力を取り戻す必要がある。

脈を診る。皮膚は汗が出てヒンヤリしている。脈拍は一分間に六十。遅い。浮弱軟である。人迎は氣口に倍して大きい。人迎は浮虚軟大。氣口は浮虚小である。

脈は弱。脈の虚はそのまま肉体の虚である。症状とも一致している。人迎は大、氣口は小。外感だろうか。いずれ病は外（表）に在る。人迎の浮緊は傷寒、麻黄湯。人迎の浮緩は中風、桂枝湯。では人迎の浮虚軟大とは何だろう？人迎の浮虚軟大は、浮緩の桂枝湯より更に虚である。即ち桂枝加黄耆湯、黄耆建中湯である。

帯状疱疹後の神経痛に桂枝加黄耆湯から甘草を去る処方、黄耆桂枝五物湯を用いる事は多い。藤中さんのヘルペスは既に終息していて、その時の事は想像するしかないが、ヘルペスの時は黄耆桂枝五物湯だったかも知れない。甘草が無いから五物湯と言うのだが、補気の甘草を加える事もある。千金方では人参を加えている。人参や甘草が加われば、甚だしい虚にも使える。だから処方は人参と甘草を加えた黄耆桂枝五物湯、即ち桂枝加黄耆湯加人参位かなと思いついていた。

ところが、ふと何処か違うのではないか、という気がした。この人は虚しているのに倦

怠感がない。そのくせ、起こされなければ十数時間も寝てしまう。聞いた事のない症状である。きっと珍しいタイプの虚なのだ。

「汗が出る時、熱さを感じてますか？」

「いや、感じてませんね。恐らく、熱いより汗の出る方が先ですわ。」

「サムケは、有りませんか？何となく、薄ら寒いとか。」

「いや、サムケは有りません。ただ、冷房してるとこ行ったらあきません。ガタガタ震えが来ます。昔から冷房には弱いんです。これはヘルペスより前から、昔からです。」

「足は冷たいですか？」

「いいえ。冷え性、言うのんとは違うようなんですわ。」

桂枝湯系の処方芍薬を含む。あまり虚がひどいと、芍薬は使えない。その冷の性質と脈を締め水を外へ追い出してしまう性質とで、時として有害である。

芍薬は筋肉を強くする。手足のだるさに効く。だから逆に、この人の様に手足のだるくない人には芍薬は必要がない。臓腑から言えば芍薬は肝である。黄?五物湯証などは肝陽虚であるが、冷房に入るとガタガタ震えるとは肺の陽虚である。保元湯を作る。保元湯は肺陽温補の処方である。

【処方】 人参 6 g 黄耆 20 g 甘草 3 g 桂皮 3 g 以上一日分、水煎服用。七日分。

三日目、藤中さんから電話があった。

「すんません。あんまり美味しいジュースみたいなお薬なんで、つい飲み過ぎて、気い着いたら、後ひとつしか有らしまへん。家内が病院の帰りに寄してもら言うてますさかい、二十個ほど渡してやってください。」

「調子はどうですか？」

「一日でシャキーッとしましたわ。汗も、ピシャーッと止まっています。」

神経衰弱

思慮大過、心脾を傷り、脈細失眠。

天野綾さん。二十八歳。背が高く痩せている。顔面蒼白。血の気がない。もとは色白美人なんだろうが、今はひどく顔色が悪く、艶も張りも無い。青黒くさえ見える。二年前に離婚して随分と苦労した。

「すぐに疲れて、何も出来ないんです。」

「眠れますか？」

「安定剤飲んでるんです。眠れないと肩が凝って痛いし、時に吐き気そうになるんです。」

「肩じゃなくて、頸は凝りませんか？」

「凝ってますね。頸の横も前も。」
「後ろじゃなくて、頸の前の方、咽の両側が凝るのは、神経疲労なんですがね。」
「もう心配な事は、何も無いんですよ？」
「いや、不安や悩みじゃなくて、脳の疲れです。神経が参ってるんです。神経衰弱。」
「神経衰弱ですか？」
「新聞を見たり、本を読んだりした時、理解力が落ちてると思いませんか？」
「落ちてるといふより、読めませんね。サーッと眺める位です。」
「ぶっつけた記憶もないのに、青あざが出来てたりは？」
「あります。血管が切れやすいんでしょうか？」
「そうですね。それも神経疲労の症状なんです。」

不眠。乾嘔。頸凝り。思考力の低下。皮下出血。婦脾湯の症状が揃っている。婦脾湯証の人は新聞が読めない。大きな見出しだけ見て済ませる。読んでも字を追うばかりで、内容が理解できてない。再度読み直せば、やや理解に至るが、少し読み書きをすると、頭の調子が悪くなり、眠れなくなったりする。筋力も低下していて、友人に引っ張られた腕が、数ヶ月も痛むと言ったり、わずかに圧迫されただけで皮下出血したりする。来客と話していると神経疲労で頸が凝るので、頷くのが苦痛になり、頭の中が詰まって思考が出来なくなる。やっと客が帰るとグッタリしている。並の疲労とは別種の血の気が引いたような気持ち悪い疲労感がある。

舌を診る。舌は白く透明で血の気がなく小さく薄い。薄い白苔がある。気も血も虚している。

脈は細洪弱。人迎も気口も浮小弱。気血虚である。手は温かく脈の沈や遅はないから、陽虚ではない。婦脾湯を作る。

【処方】黄耆4 g 人参4 g 白朮4 g 茯苓4 g 酸棗妊4 g 龍眼肉4 g 当帰2 g 遠志2 g
木香1.5 g 甘草1 g 生姜1 g 大棗2 g 以上一日分、水煎服用。二週間分。

二週間後。すっかり顔色が良くなって来局。もう病人には見えない。脈も太さを増している。舌色も良くなった。睡眠も改善。頸も詰まらなくなった。新聞もやや読みやすくなった。しかし熟睡感がない。

以前はイライラしていたが、今は気分が少し落ち込んでいるらしい。最近、体重が五キロ減った。鬱になると体重が減る。

合歡皮と言う薬がある。朱良春用薬経験という本に、人の憂いを無くし楽しくさせる作用があり、不眠にも効くとある。婦脾湯に合歡皮を6 g加える。

合歡皮を加えると、熟睡感が出てきた。無意味に考え事をする癖を止めるように注意して、十ヶ月ほど服薬して完治した。

婦脾湯の人はノイローゼではない。不安も焦燥もない。しかし脳と身体の特異な疲労が存在する。心の病気ではなく、脳も含めた肉体の衰弱である。

原因としては精神的ショックが多い。離婚、受験の失敗、失恋等、失敗や喪失、すさまじい不安に曝された経験などである。昼も夜も考えるだけ考え、悔やむだけ悔み、ショッ

クと過度の思考で脳はすっかり消耗する。鬱のように見えることもあるが、香蘇散や分心気飲、温胆湯など気鬱の処方では、かえって虚がひどくなって治らない。長引いて十年以上も続くことがある。周りの人も患者も病気の本体を理解しないから、気晴らしや心機一転を狙って、趣味、旅行、語学の勉強、資格取得などを試み、病気を悪化させる。本当は、衰弱して何も出来ない人は、そのままが良い。考えるのが好きで、つい何事か考えてしまう人や不安で確認のために何度も蒸し返して考える人には、思考の停止を訓練する。つまり、脳の消耗を避けてエネルギーを蓄積する。

皮膚炎

イライラして心火、怒って肝火、火は上って、顔にも火がつく。

谷 明夫さん。会社員。三十六歳。顔に派手な鮮紅色の皮膚炎がある。口唇の周囲がひどい。右頬あら鼻の右側にも広がっている。炎症の分布は左右対称でなく、右側が主である。

皮膚炎は彼が二十台の頃からあって、抗生剤を服用すれば治った。ところが、この一年、抗生剤が効かなくなり、化膿して血や膿が出るという。

「原因は分かっているんです。二日も会社が休みだと、眼に見えて良くなりますから。」

「忙しいんですか？」

「常にトラブル対策に追われてるんです。必ず起きるんですよ。トラブルが。嫌になってます。」

「あなた位の年齢だと、ベテランなんですよ？」

「そうなんです。それが却って負担で。うまく解決して当たり前ですからね。」

システムの復旧は急を要する。全力で当たる。若い時はトラブル大歓迎だった。彼の仕事であり、彼の高い技術と知識を発揮する機会であった。しかし、今はもう、嫌なんだと言う。トラブルが多発すれば、クライアントと揉める事もある。泣きたい気分になる。もう、うんざりしてる。

舌を診る。意外なことに舌色は淡である。炎症があれば舌は赤いはずだが、全く熱の気配がない。舌の両辺に膩白苔がある。白点もある。潤っている。大きな締まった形の舌なのだが、脾虚かも知れない。

脈は弦大数。脈拍は一分間に八十八。速い。数脈は精神のイライラと炎症の熱を反映している。但し、呼吸との関係で診ると、一息四動で遅脈に属する。これは虚である。

人迎と氣口はやや小で浮緩、大きさも強さも、実熱とするには不足である。気血虚である。

両寸は浮大。両寸大は肺腎陰虚の者に多いが舌に白苔があり、陰虚説は採用しない。火である。左寸は心である。イライラして心火を生じたとする。

「睡眠とか食欲は、問題ありませんか？」

「大丈夫です。寝ますし、食べてます。まあ、問題が起きると、解決するまでは食べられません。」

「解決したら、食べられる？」

「はい。」

解決するまで食べられないとは、相当なストレスである。日常のトラブルで食欲が左右される。これは「肝が脾を克す。」である。

気血が虚している。脾虚である。しかしイライラすれば心火を生じ、腹を立てれば肝火が起きる。

処方 は加味帰脾湯。心火には山梔子。肝火には柴胡。

【処方】 柴胡 3 g 山梔子 3 g 黄芩 3 g 人参 3 g 白朮 3 g 茯苓 3 g 酸棗仁 3 g 龍眼肉 3 g 当帰 2 g 遠志 1.5 g 木香 1.5 g 甘草 1 g 生姜 1 g 大棗 3 g 以上一日分、水煎服用。七日分。

かなり日が経ってから来局。顔の炎症がひどい。

「治ってたんですが、トラブルが発生したら再発して。」

「効果が有ったんですね。続ければ出なくなりますよ。」

「どの位の期間ですか？」

「期間は断言できませんが、先ずは、完全に症状が消える事。次はトラブルが有っても再発しないようになる事ですね。再発すると完治が遅れます。」

良くても悪くても、同じ薬を続ける事を勧めた。しかし、そういう事が難しい性格らしく、少し良くなると中断し、悪くなると驚いて服用する。それでも、飲んだり止めたりを繰り返すうち、以外に早く皮膚炎は発症しなくなった。

彼の皮膚炎は、皮膚に表れたヒステリーである。彼は「泣きたい気分」だと言う。しかし、泣くのは子供である。彼にはまだ未熟な部分が残っていて、それがヒステリー性皮膚炎の原因である。

皮膚炎は右側に偏っている。右の顔面は気が不足して皮膚炎を生じた。右は気である。また口の周りは脾胃に属している。脾虚だから、皮膚炎は口の周りに集中した。

嗜睡

脈沈、自汗盗汗、突に入睡。

古田昇平君。十五歳。県外の中高一貫の進学校の学寮で生活している。実は幼時より嗜睡症がある。眠ってばかりで、授業は聞いていないと学校からも注意を受ける。母親と話す。

「寝過ぎる、という事ですね。」

「そうです。ふと会話が途切れたと思ったら、眠ってるんです。」

「じゃあ、急に眠くなる訳ですか？」

「そうです。手に持ってるゲームなんかも、ポトンと落として、スッと眠ってしまいます。」

「寝過ぎるというのは、違いますね。夜の睡眠時間は長いですか？」

「普通です。家でも寮でも起こされますから。寝起きも悪くありませんし、眠そうにもしていません。」

「急な入眠発作が起きるのは、家に居るときですか？」

「いいえ、どこでも。電車に乗ってても、食べ続けるか、話し掛けてやるかしてないと、スッと眠っています。ですから、休暇で帰省する時などは、電車を乗り過ぎさないか心配なんです。」

「入眠する前は、眠そうですか？」

「いいえ。じっとしてるのが嫌いな子ですから、直前まで動き回ってます。」

嗜睡症である。静止していると入眠発作が起きやすい。勉強、テレビゲーム、乗り物での移動等である。実際、乗り物は何度か乗り過ごした。

よく動くというが、落ち着きがないのとは違う。運動は好き。マラソンが得意。本は読まない。夏ばてはしない。性格は温和でこだわらない。実は去年までオネショをしていた。口渇があり、真冬でも一日五六本、冷たい清涼飲料を飲む。

毎夜、盗汗がある。しかし触ると体はヒンヤリしている。昼間も汗が多い。気温が高くなくても汗が出る。多汗だが寒がり。足も冷たい。冷えるとお腹が痛くなって下痢する。お風呂には一時間以上入っている。風呂上がりは汗が止みにくい。

多汗は陰虚にも陽虚にもある。しかし熱くもないのに汗が出るのは、陽虚の自汗盗汗である。口渇があるが、汗で失われた水分を補うというのは単純すぎる。どこかに「燥」がある。

舌を診る。広くて大きい舌である。しかし厚味がない。薄い灰白色の苔がある。やや暗色である。

脈を診る。寸は微。他は関も尺もすべて沈大。関は左右では左の肝の脈が小さい。肝虚である。脈拍は一分間に五十六。遅い。自汗盗汗を陽虚とすると遅脈も陽虚である。寸微も舌の暗色も陽虚である。

人迎も気口も沈大である。人迎は外、気口は内。人迎気口の沈を内外陽虚とする。気口の沈は内の冷、左関小は肝虚。従って内の冷とは肝陽虚であるとする。

何かの理由で肝の虚になり、虚は「肝の燥」になり口渇となり、汗出して内外陽虚となった。帰脾湯を思い付く。多汗と脈沈で帰脾湯を使うのは異例ではあるが経験がない訳ではない。

【処方】 人参 4 g 黄耆 4 g 白朮 4 g 茯苓 4 g 酸棗仁 4 g 龍眼肉 4 g 当帰 2 g 遠志 1.5 g 木香 1.5 g 甘草 1 g 生姜 1 g 大棗 2 g 以上水煎服用。二週間分。

嗜眠も盗汗も消失した。冷たい物を飲むのも減少した。有効である。学校が始まる。エキス剤で帰脾湯を作る。元来素直な人である。毎日服用して、次の休暇に帰って来た時には完治していた。

嗜睡症の少年は心脾両虚ではない。脈、舌、症状、体質、性格に心虚も脾虚も表れていない。代わりに肝陽虚が存在する。本は読まない。動き回る。素直な性格。こだわらない性格。これらの特徴は、心脾両虚の帰脾湯証ではない。脈は異なるが、補中益気湯証に近い。

舌大も脾虚ではない。舌は一個の筋肉である。筋は肝に養われている。恐らく、大きくても薄っぺらな舌は肝の燥と関係があるだろう。

昔の人は「肝は將軍の官、謀慮出ず。」と言う。謀慮、即ち防衛対策を担っている。肝の陽が虚せば、防衛のレベルは下がり、將軍も兵も警戒を緩め、居眠りする。即ち嗜睡である。人体防御の第一線は表である。表の陽が虚せば自汗となる。自汗盗汗嗜睡は肝の陽虚である。

肝陽虚と言うが、陽の基礎は陰である。必ず陰も虚している。肝の陰が不足すれば、肝は潤いを失って「燥」になり口渴となる。

頭痛

諸風は頭目を攻め、上の脰も腫れて頭痛と鼻塞。

川井静子さん。四十四才。色白。ふっくらしている。脰が垂れ下がって、左の目が半分塞がっている。

「あの、こんな風に、左のマブタが腫れてしまうんです。眼科や皮膚科では治らなくて。」

「左目ですか。目が塞がりそうですね。痒みは？」

「少し痒いんですね。少しです。それと鼻炎と三十年来の頭痛があって、悩んでいます。」

「三十年ですか。鼻炎の方は季節的ですか？一年中？」

「一年中ですね。一年中、鼻水と鼻づまりです。」

「頭痛はズキズキするようなのですか？それとも重い感じ？」

「ズキズキ、ガンガンです。毎日、目が覚めたら始まって、ひどい時は吐き気がして、痛み止めも効かない位。起きたら直ぐ鎮痛剤を飲みます。後で飲んでも効きませんから。」

奇妙で理解しにくいのが、マブタの腫れである。幾らか痒みが有るらしいが、発赤は見られない。浮腫の類だろうか。しかし、なぜ左だけなのか。

先ず頭痛から考える。色白でふっくらして見え、本人も肥りやすいと言う。痰だろうか。古今方彙の頭痛門の第一方は二陳湯加減である。痰を去ればマブタの腫れも治るかも知れない。

舌と脈を診る。痰なら舌は胖のはずだが、胖ではなく、おまけに乾燥している。色は正常。白苔がある。脈は寸の浮が目立つ。寸は浮弦。関尺は弦有力。人迎気口は浮弦大。脈拍は一分間に八十。

足が冷たい。冬は足が冷え、顔はのぼせて赤くなる。肩は凝らない。疲れやすい。便秘。たまにカーッと身体が熱くなる。よく分からないが、先ずは痰として、処方半夏白朮天麻湯。

【処方】半夏 3 g 陳皮 3 g 茯苓 3 g 麦芽 3 g 黄耆 3 g 沢瀉 3 g 白朮 3 g 蒼朮 3 g 天麻 3 g
人參 2 g 神麴 2 g 黄柏 2 g 乾姜 1 g 以上一日分、水煎服用。十日分。

来局。症状は全く変化していない。無効である。痰では無いらしい。

脈を診る。誤った療治で矛盾が拡大し、かえって脈の特徴がハッキリした。寸の浮が目立つ。寸ばかりか全体がより浮になっている。関も尺も浮が目立つ。寸は浮弦。関は浮弦滑である。浮いて有力。しかし緊ではなく滑の雰囲気がある。

滑脈を見て、なお何処かに虚を求めるのはおかしい。浮脈が目立つから、外感風邪としてはどうか。そう思って脈を診ると、俄然、外感邪気の脈に見えてくる。外感風邪とすると、諸症状はやや納得のゆく所がある。

頭痛も鼻炎もマブタの腫れも、場所は頭面である。頭面の疾は風に属する。マブタに痒みがある。痒みも風である。足の冷えは血行不良とは限らない。体表面を邪気に覆われ、表邪が去らないために冷えるという事がある。冷えではなくサムケである。

風邪は侮れない。風邪に居座られて、面上で化熱して、ニキビや吹き出物になったのが、清上防風湯や白?升麻湯の証である。風邪が三十年も居座れば、マブタを腫らす位の事はあるかも知れない。風邪は左から侵入する。腫れているのは左のマブタである。

外感風邪の処方が多い。しかし、これは尋常の風邪ではない。三十年も居座る風邪には、どんな処方が良いだろうか。患者を前に古今方彙の頭痛門を紐解く。川?茶調散に目が止まる。

その主治文。諸風は上攻して頭目昏沈し、偏正の頭痛、鼻は塞り声重く（中略）。膈は熱して痰は盛んに、婦人の血風は攻め注ぎ、太陽の穴の痛むを治す。

主治文には傷寒や中風と言わず、諸風と言っている。諸風とは何んだらうか。三十年も居座ってしまう風邪も或いはその仲間かも知れない。偏正頭痛とは、こめかみと額の頭痛である。鼻塞声重とあるから、鼻炎にも効くに違いない。太陽穴は、こめかみの辺りに在るツボの名である。処方は川?茶調散。

【処方】羌活 3 g 白? 3 g 荊芥 3 g 薄荷 3 g 香附子 4 g 川? 4 g 甘草 2 g 茶葉 2 g 生姜 1 g
以上一日分、水煎服用。十日分。

一石三鳥。頭痛、鼻塞、眼瞼腫脹、全て軽快。一ヶ月で完治した。

寸の浮は風である。この人は最初から寸の浮が顕著だった。それなのに風邪の療治をせず、痰の治療をした。ただ言い訳をするようだが、直ちに風邪の療治に掛かれなかったのには訳がある。古人の脈論では「寸の浮は頭痛。」と言う。頭の痛い人に寸の浮が表れても不思議ではない。しかし、朝、目覚めた時、既に始まっている頭痛は、やはり陽虚とせねばならない。陽の部、即ち外表に外感邪気がある。治療は陽の部に気を補って外邪を逐う。反対に体温の上る午後になって始まる頭痛はのぼせや肩こりに関連していて裏や臟腑

の病である。

虫さされ

虫に害され、風がなくても、疹は膨らむ。

あい子さん。元気な中学生。十四才。百六十センチ。六十キロ。

「この子ですけど、体質が悪いんですかね、蚊に咬まされると、こんなになって。」

「ちょっと、見せてくれる。」

「あい子、ちゃんと見せなさい。」

バンと張った見事な大きな黒い脚。そこに五つ六つ、膨れ上がった大きな赤い丘疹がある。

「これ、蚊ですか？凄いな。こんなに大きいと、なかなか治らないでしょ。」

「そうです。針を刺して、中の水を絞り出したりするんですけどね。」

大きい。これが蚊の咬んだ跡かと驚く。信じられないほど大きく赤く膨れ上がっている。丘疹の径は五センチばかり。高さも一センチほど。中には水がタププリ入っている。治った痕も黒い大きなシミになって、たくさん残っている。美観甚だよろしからず。

元気そうだ。本人も脚を見せるのにちょっと躊躇したが、屈託がない。若さと元気があふれている。舌を診る。舌は赤い。特に舌の先が赤い。全体に膩白苔が有る。

脈を診る。手に触ると手が熱い。脈は全て細澁。人迎も気口も浮細澁である。脈拍は一分間に七十六。

昔は細い脈を見ると、すぐ虚証を疑った。しかし細脈恐るるに足らず。湿の脈は細澁である。

「手の掌が濡れてるね。汗かきななの？」

「はい。」

「そうなんです。この子は手だけじゃなくて、全身にすごい汗をかくんです。」

「水分は、たくさん摂りますか？」

「ええ。冷たい物が大好きですね。」

大きな赤い丘疹、赤い舌、手掌の煩熱と全身の汗、口渇冷飲、すべて熱である。脈の細澁は湿。舌の膩苔も湿。湿と熱。病名は湿熱虫咬傷。

丘疹は風である。しかし、あい子さんには風の脈がない。実は熱の脈もない。あるのは細澁の湿の脈ばかりである。丘疹は風によらず虫が作る。彼女は大量の湿と熱を持っているが、虫さえ咬まなければ丘疹を生じない。もし風があれば風と湿熱とが結合して、脈は弦大数か濡大数になるだろう。

処方消風散。但し、風邪が無いから風薬の蟬退と防風は去る。肝腎を補い精血を益す

胡麻も去る。

熱に地黄、知母、苦参、石膏。湿邪に蒼朮、木通。丘疹に牛蒡子。痒みに荊芥。黒いシミに当帰の行血。

【処方】当帰 3 g 乾地黄 3 g 石膏 3 g 蒼朮 3 g 木通 3 g 牛蒡子 3 g 知母 3 g 荊芥 3 g 苦参 2 g

以上一日分。水煎服用。十日分。

「やあ、良くなったね。」

「はい。またたく間に水膨れがちぢんで、小さくなりました。」

「良かったね。」

「この脚の、黒いシミが汚いんですがね。」

「そうですね。まあ、黒いのもそのうち、治りますよ。」

「そうですか。最近、蚊に喰われても膨れませんよ。普通のサイズです。」

十日後、黒いシミも消えた。

風は熱がなければ生まれぬ。元から、あい子さんには湿と熱があった。しかし、この熱は病理的な熱の範疇に属さないものであったらしく、風を生じて皮疹に発展する事はなかった。ただ虫が咬むと風が起き、湿と熱と反応して丘疹を為した。

消風散の証は湿と熱と風が目標である。昔、消風散で、がっしりした体格の褐色の肌の中年女性の皮膚炎を治した。黒い肌は血熱である。脈は弦浮大緩であった。緩は湿の脈の濡（軟大洪）に通じる。

彼女は、こんなに身体が気持ちよくスッキリする薬はないと言って、治った後もしばらく消風散を服用していた。余分な湿や熱が取れると体も軽くなってスッキリする。

〔文献摘録〕

【外科正宗】卷四。疥瘡論第七十三消風散

風湿の血脈を浸淫して、瘡疥を生ずるを致し、搔痒の絶えざるを治す。及び大人小児の風熱の疹、遍身に雲片斑点、乍ち有り乍ち無きにも併び効す。（方略）

口内炎

口舌痛んで、夜も寝られず、痛風の如し。

口内炎は嫌なものだ。楽しい食事がつらくなる。浅海玲子さん。五十九才。百五十センチ。四十キロ。

「口内炎がひどくて、痛くて夜も眠れないんです。」

「眠れないんですか？」

「はい。若い頃から、よく出来てたんですけど、最近、段々ひどくなって、一度に幾つ
も出来ますし。」

痛くて眠れない口内炎というのは聞いたことがない。それほど炎症が強いのか。口の中
を見せてもらう。普通のアフタと呼ばれる口内炎である。灰白色の斑点が出来、辺縁には
赤暈がある。

舌を診る。潤っている。白苔がある。舌色は淡紅で蜜柑色に見える。蜜柑色の舌は気血
虚である。

脈を診る。寸は微細。関尺は弦緊。やや細。人迎気口は浮弦緊。やや無力。脈拍は一分
間に六十八。

人迎気口に左右差は無い。だから内外いずれの病か決めがたい。炎症が有るのに、脈に
は洪や数は見られない。アフタの様な小さな炎症では、夜寝られない程の痛みであっても、
熱の影響は脈にまで及ばないという事だろうか。

脈に緊張感がある。人迎と気口も比較的大きさがあつて、柴胡剤位は見えそうに見える。
小柴胡湯はどうか。舌に白苔もある。脈も寸微にして尺弦である。

【処方】柴胡 4 g 半夏 4 g 黄芩 3 g 人参 3 g 大棗 3 g 甘草 2 g 生姜 1 g 以上一日分、水煎
服用。七日分。

浅海さん、服用終つて来局。

「あの、このお薬は下痢し易くなりますか？」

「下痢するんですか？」

「ええ、下痢は元からですから、お薬のせいばかりじゃないと思いますけど。この所、
下痢が続いて。」

「口内炎はどうですか？」

「毎日、キッチンと煎じて飲んだんですけど、今の所、まだ変わり有りませんね。」

「じゃあ、薬は効いてないかも知れませんね。」

「そんなにすぐ、効果が出るものなんですか？」

「出ます。口内炎ですからね。」

下痢しやすい。特に夏は下痢が多い。夏は体重が減少して、髪の毛まで薄くなる。下痢
は連続せず、三四日の下痢の後、三四日の免糞便の日がある。ところが小柴胡湯を飲み始
めると、下痢は連続する様になってしまった。

一体、どんな問診をしていたのか。脈診も何の役にも立っていない。出直しである。浅
海さんの口内炎は、さほど重症ではない。にもかかわらず、痛みが激しい。何故そんなに
痛むのか。持続的で、あたかも神経痛の様な痛み方である。

漢方に痛風という病名がある。今で言うリウマチである。痛風の痛みには運動痛と自発
痛がある。さしづめ彼女の様に夜間に持続的に痛むとすれば、痛風ならば自発痛に当たる
だろう。物を食べたりする時に痛む普通の口内炎は、強いて言えば、運動痛（おかしいか

な。)という事になる。

自発痛には寒痛、熱痛、痰痛、虚痛、風湿痛、?血痛などがある。中でも夜間に痛みが増すのは、寒痛と?血痛である。

何もかも、考えをすっかり逆にする。夜間の眠れない程の痛みは寒とする。見かけの症状が軽微なのに、痛みが強いのは寒である。もし熱であれば化膿したり、地図状に潰瘍になったりする。脈の緊も寒とする。下痢も寒である。寸脈の微は陽虚である。潤った蜜柑色の舌は気血虚である。舌の白苔は脾湿である。附子湯を試みる。

【処方】茯苓6g 白芍4g 白朮4g 人参4g 附子2g 以上一日分、水煎服用。七日分。

「痛みは、どうですか？」

「痛みより、口内炎そのものが急に小さくなって、今はひとつも出来てないんですよ。」

「下痢は？」

「そう言えば、このところ下痢してませんね。」

今度は附子を3gにする。完治した。

白?升麻湯

癰の身の半ば以上に出る者は、八風の変なり。

川村マヤさん。十五才。叔母さんと来局。顔がお猿のように真っ赤である。真っ赤になり、ボロボロ皮が剥がれ落ち、流れ出た汁は黄色く固まり、顔中にこびり付いている。汚い。見るに忍びない。

初めは額に赤い発疹が出た。そのうち顔全体に拡がり、次いで上半身の各所へ波及した。その症は発赤、糜爛、流汁、乾燥、落屑、そして激しい痒みと燃えるが如き熱感である。

舌を診る。潤っている。舌尖に赤い点が少々。色が淡い。唇の色も薄い。貧血かも知れない。舌は小さく形も薄いから虚である。奥の方には薄い白苔が有る。脾虚かも知れない。

「貧血って、言われてませんか？」

「ええ、貧血です。丈夫なのに、どうしてなんですかねえ？」

「冷え性ですか？手足が冷たいとか。」

「いいえ。でも、この子はシモヤケがひどいんです。」

「シモヤケですか。お腹が痛いなんて言いますか？」

「言います。放っとくと治ったって言うから、いつも放っとくんですけど。」

「痒いんでしょうね？」

「ええ、ものすごく。でも今は痒いより、顔の熱いのが辛いそうです。」

皮膚が黄色い。黄色いのは血虚である。便秘がある。当帰四逆湯や当帰建中湯を連想して、お腹の痛む場所を尋ねる。しかし痛むのはお腹ではなかった。心下である。痛みはか

なり強く、手で押さえて、しばらくジッとしている。

脈を診る。緩細有力。脈拍は一分間に六十八。寸は微。関尺は細有力。人迎気口は浮沈がハッキリしない。浮べても有り、沈めても有力。

手は熱くも冷たくもない。しかし手掌が汗でビショビショである。おそらく足も濡れているだろう。冷えなくても、濡れた足にはシモヤケが出来る。

どうしても当帰四逆湯の類から頭が離れなかった。唇も乾くと言う。十日分の温経湯を作る。結果、病状は変わらず温経湯は無効であった。次いで丸剤で桂枝茯苓丸を試みる。しかし三日後、急にマヤさんが来局。桂枝茯苓丸を服用すると急に痒みが激しくなったと言う。顔の滲出液が増えている。

脈を診る。桂枝茯苓丸を三日間服用しただけなのに、脈が速くなり、脈拍が一分間に六十八から八十四に増えている。どこか刺激したに違いない。脈は細緩有力数。細くて緩やかな脈だが、押さえると力があると言う妙な脈である。寸は沈短。関は弦細。尺は細有力。人迎気口は浮位で浮緩。沈位で有力。何処かに熱がある。そうでないと、桂枝茯苓丸で脈が速くなったりする訳がない。脈は寸の沈が珍しい。普通なら熱で脈が早くなれば、脈の気が増して沈は浮になり、短も長になる。中でも寸脈などは、いの一に浮になる。

ところが寸脈は何者かに阻まれて気が伸びず、沈短である。

寸脈が鍵を握る。寸は外である。外に何があるのか。風邪は先ず人の頭面に客して患をなす。マヤさんの病気も顔から始まり、今も顔を中心に上半身に在って下半身にない。風邪を疑う。外に風がある。

白?升麻湯という李東垣の処方がある。蘭室秘蔵に白?升麻湯の脈は「左右の寸脈はみな短、中は之を俱に弦に得、之を按じて洪緩」とある。私の診た寸の沈短と東垣の言う寸脈の短は同じだろうか。私の「細く緩やかでありながら、押さえてみると力が有る奇妙な脈。」も東垣の脈の表現に近い気がする。

症状を白?升麻湯の方中の薬物と付き合わせてみる。胃痛は胃の熱。黄?で胃熱を清す。手掌の汗は内熱。地黄で内熱を清す。シモヤケは気血凝滞。白?、当帰、桂皮、紅花で気血凝滞を巡らす。舌の淡色は血虚。当帰と黄耆で血虚を補う。顔は陽明胃経に属している。白?、升麻、桔梗、甘草で陽明経の邪気を払い、地黄、黄?、連翹、升麻で面熱を冷ます。

処方白?升麻湯。

【処方】 炙甘草 3 g 升麻 3 g 桔梗 3 g 白? 4 g 乾地黄 5 g 当帰 5 g 黄? 6 g 連翹 6 g 黄耆 6 g 桂皮 3 g 紅花 2 g 以上一日分、水煎服用。十日分。

十日後、マヤさん来局。随分きれいになった。一ヶ月で完治した。この例は、外から来た寒邪が陽明胃経に客して去らず、気血を凝滞させ、裏に入って化熱して面熱と胃熱になり、面熱は面の瘡になり、胃熱は胃の痛みになり、更に熱は留まって陰と血を消耗し、陰虚内熱にも血虚にもなったものである。

〔文献摘録〕

【蘭室秘蔵】 卷下・瘡瘍門・李東垣白?升麻湯

尹老家、素より貧寒の形志。皆、手の陽明大腸經の分に癰を出だし、幼少に?疔のその臂外に皆腫痛する有るを苦しむは陽明に在り。左右の寸脈は皆短、中は之を俱に弦に得、之を按じて洪緩有力なり。此の癰は八風の変により得て、脈を以て之を邪氣は表に在りと断ず。其の証、大小便は故の如く、飲食は常の如く、腹中は和し、口に味を知れば、裏に在らざるを知る也。風寒を悪まず、熱燥に止まり、脈浮かざれば、表に在らざるを知る也。表裏は既に和し邪氣は經脈の中に在り。故に經絡に凝して瘡癰を為すと云う。其の癰は身の半ば已上に出ずる故に、風は上より之を受け、故に是は八風の変の瘡を為す者と知る也。故に其の寒邪を治し、其の經脈中の血氣を調え、凝滞無からしむれば已む。(方略)

掌蹠膿胞症

手掌足跖に黄水を湛え、脈は氣口大、血虚に兼ねて湿熱あり。

婦人六十歳。水虫の漢方を所望。手掌足跖の皮下に黄色や緑の水が溜っている。正常な皮膚と黄水の溜まった部分の境界は明瞭である。液は固まり乾涸して黄色くこびり付いている。甚だ汚い。固まった液や皮膚を少しずつ手で剥がして行くと、後から綺麗な皮膚が現れる。しかし直ぐまた炎症が始まり、黄水が蓄えられ、病気が始まる。

ゆったりした印象の人である。どっしりしていて、華奢な肺虚や脾虚の人ではない。皮膚の色は黄色。肝火に湿熱を兼ねると皮膚は浅黒いが、浅黒くない。色々尋ねる。

「痒みは？」

「ほとんど無いです。汚いでしょ。ちょっと人前じゃ、手も出しにくくて。もう十年になります。」

「肩は凝りますか？」

「左の肩が凝ると頭痛がして、キュキュッと耳の中が痛むんですけど、あれは何なんですかね？」

「耳の中も、凝ってるんだと思います。メマイはしませんか？」

「メマイがします。時々です。それに、いつも目の中に小蠅が飛んでます。」

「のぼせますか？ 顔が熱くなるとか。」

「熱いです。私は顔も手も足も、熱いんです。」

「イライラする性格ですか？ 或いは、几帳面すぎるとか？」

「いえいえ、至ってのんびりした方で。まあ、疲れると眠れませんが、神経質じゃあないんです。」

皮下の水は湿だが、水が黄色くなり乾涸するのは熱である。頭痛、肩こり、眩暈は肝の異常である。ただ肝鬱か肝旺か或いは肝火なのか分からない。確かに不眠はあるが、肝気の高ぶった印象はない。

飛蚊症がある。飛蚊症は肝腎の虚である。肝虚があるとすれば、彼女は肝血虚かも知れない。黄色の皮膚と鷹揚な性格。左は血、右は水とすれば、左の肩凝りも血虚である。すると眩暈、のぼせ、頭痛は肝火や肝鬱ではなく血虚生風ではないだろうか。不眠も血虚で

ある。勞すれば手足に血液が偏り、手足の煩熱になる。血が手足に偏り肝に不足すれば、イライラしなくても不眠になる。肝血虚の不眠である。

病は血虚虚勞による手足の煩熱が原因とする。煩熱は歳を経て熱邪となり、湿と合して濃胞になった。

舌を診る。舌色は紅。熱の反映である。べた付いた感じの白苔がある。湿である。

脈を診る。脈は弦大。脈拍は一分間に六十。人迎も氣口も浮弦。そして右の氣口は左の人迎に倍する。これは内傷である。血虚は疑いない。但し血虚では関は右大左小になるが、この人の関に左右差はない。血虚は右寸大であるが、この人は両寸大である。恐らくは右寸大は肝虚、左寸大は腎虚である。

血虚には四物湯が良い。当帰飲子は四物湯を含む。熱の病気だが、脈が遅いから川?を避ける必要はない。当帰飲子の人は肌が肥えて見え、対する温清飲の人は肌が痩せて見える。この人の雰囲気も当帰飲子のそれである。しかし、このように湿熱が多くては、当帰飲子では清熱去湿が不足である。

実は当帰飲子にも色々ある。中でも私が多用するのは、よく知られている外科正宗の処方ではなく、清の許克昌の外科証治全書に出ている当帰飲子である。乾性の者には牡丹皮を加え、湿性の者には黄?を加えるという加減方も有って、便利な処方である。

他に私が雑誌で見てもメモしておいた金起鳳先生の当帰飲子もある。この処方は血虚風燥の慢性湿疹に用いる処方であるが、この婦人の症例に驚くほどピッタリする。金起鳳先生の処方も四物湯が基本である。黄?もある。湿熱には白鮮皮と地膚子が対応する。そして、皮膚科の処方には珍しい鈎藤と枸杞子がある。面白い処方である。仮に、この人が鈎藤を服めば頭痛が治り、枸杞子を服めば飛蚊症に効くではないか。耳の中が痛いと聞いて、鈎藤が欲しいと思っていた所である。金起鳳先生の当帰飲子を、そのまま使わせていただく。

【処方】 乾地黄 4 g 熟地黄 4 g 当帰 4 g 白芍 4 g 川? 4 g 生首烏 4 g 鈎藤 4 g 黄? 4 g ?黎子 4 g 地膚子 4 g 白鮮皮 6 g 枸杞子 6 g 以上一日分、水煎服用。十日分。

三十日で患部は三分の一に縮小。更に一ヶ月、完治した。

〔文献摘録〕

当帰飲子（外科証治全書・巻四）

〔方〕 当帰、赤芍、乾地黄、連翹、金銀花、荊芥、?黎子、白僵蚕

○ 上には竹葉を加える。乾疥は牡丹皮を加え、沙疥は枯?を加える。

○ 燥、盛んなれば乾芥を生ず。之を搔けば皮枯にして白屑を起こす。

○ 血熱凝滯すれば沙芥を生ず。形は細砂の如く、?熱痒痛、之を搔けば水あり。

五十そら手

筋脈攀急すれば脈も引きつれ、索繩の如し。

五十そら手とは、今の五十肩の事らしい。百々漢陰の梧竹楼方函口訣に云う「舒経湯、手臂しびれ痛み、俗に言う五十そら手などと云う類によし。然れども五十そら手は痛み甚だしからず。此の方は痛みを主とす。さて自由にもならぬ也。矢張り気血の凝滞より来る者に見ゆ。姜黄が主薬なり。此の方は痰熱なし。痰熱の盛んなるは半夏黄湯なり。」

つまり漢陰は舒経湯の症状は、ズキズキと痺れ痛んで夜も眠れぬというもので、挙げると痛い、反らせると痛い等という、普通の五十肩の症状ではない言っている。

宋代の婦人良方に舒経湯が出ている。曰く「そもそも婦人の臂痛とは、筋脈が引きつれて曲げ伸ばしが出来ず、冷やすとひどくなるものだ。もし肝虚によって風寒の邪が血脈、経絡、筋に着き、筋が栄養されず引きつり痛み、脈が緊細なら、柏子仁丸や舒経湯を服すると良い。（後略）」即ち舒経湯の脈は緊細である。患者は四十代後半の女性。

「五十肩なんでしょうけど、痛くて夜も寝られないんです。」

「腕を動かすと痛いですか？」

「ええ。それで、不意に動かしたりしないように、こうしてこっちの手で、ずっと腕を押さえています。」

「動かさなければ、痛くないですか？」

「いいえ痛みます。特に夜が。眠り掛けても、痛みで目が覚めるんです。」

相当に痛いらしい。動かさなくてもズキズキ、キリキリと腕が痛む。温めても冷やしても、入浴しても、少しも痛みは変わらない。もし少しでも腕を後ろへ回す様な事をする大変な激痛が襲う。

舌を診る。舌は潤っていて苔がなく、やや暗色である。苔が無いから痰や湿ではない。暗色の舌は血流の悪さ、或いは寒邪を意味する。熱は存在しない。

脈を診る。脈は緊にして虚。まるで筋肉の引きつれがそのまま脈にも現われているという、キリキリとロープをよじったように引きつる感じの脈である。脈の緊は筋攣。虚は血虚である。左関は右関より小だから肝血の虚である。寸は微だから陰虚ではない。尺は左が大きいから腎虚ではない。脈緊にして虚は婦人良方の言う緊細に近い。処方舒経湯。

【処方】 姜黄 8 g 白朮 4 g 当帰 4 g 白芍 4 g 羌活 2 g 甘草 2 g 以上一日分、水煎服用。
十日分。

驚くほど良く効いた。三日目には痛みが無くなって安眠できるようになり、一ヶ月で完治した。

舒経湯には海桐皮を加える事になっている。しかし当時は海桐皮が手に入らなかったで使用しなかった。海桐皮は羌活と協力して、風湿を去り痛みを止める。ただ百々漢陰も海桐皮は無くても良く効くと書いている。中国で姜黄と言われるものは、日本では鬱金と呼ばれる。私も姜黄は鬱金を使用する。姜黄と海桐皮を対薬にして、五十肩に使うと中国の本にある。

〔文献摘録〕

【婦人良方】 卷三婦人風寒臂痛方論第九宋・陳自明

舒経湯。風寒の傷る所、肩臂作痛及び腰下作痛を治す。又五痺湯と名づける。（方略）

婦人の臂痛、或いは寒に遇へば劇しき者、肝気の虚弱により、風寒は経絡に客す。故にその脈は緊細。柏子仁丸、舒経湯を宜しく用うべし。

若、臂痛して挙動する能わず、或いは痛みに定まる所なきは、此は脾が虚し邪氣相搏して中?に伏痰するなり。その脈は沈細。此の如きは茯苓丸、控涎丹之を主どる。

和方

首から上の鼻、咽、舌、歯、耳は皆おかしくて、寒熱往来。

方輿?の帯下病の処方、??根湯と勝勢飲の二方は和方である。方輿?（卷二、赤白沃崩中漏下）では、帯下という病名を概念を拡大して論じている。即ち帯下がなくても、帯下の病と見なすべき一類の病がある。それは疝気、疝積、淋などに近い病であると言う。

熱証に用いる??根湯は柴胡桂枝乾姜湯に近く、寒証に用いる勝勢飲は当帰四逆加呉茱萸生姜湯に近い。また温経湯はこれらの中に位置する。

帯下病の症状は、これら五つの処方の証を総合すれば、おおよその所は察しが付くが、どれも皆、上熱下寒で、頸から上の症状が多い。但し、??根湯には燥症が有り、勝勢飲には湿症が有って、特徴のある不可思議な症状を現す。

友近勝子さん。六十歳。訴えは複雑である。しばしば咽喉が腫れて、月に二三次は発熱する。歯茎も腫れたり引いたりする。歯を噛み締めると、歯が浮いた様な感じがする。耳も遠くなったり治ったりする。舌の表面が痺れたり、食べ物の味がしみて痛い事もある。

歯や耳、咽や舌がおかしくなると、肩や首も凝っておかしな感じになり、全身もだるくなる。常に倦怠感があり、疲れやすい。朝起きるのがつらい。冷える。冷える為か夜間に三度も排尿に起きる。昼間も尿が近く、一日に十数回トイレに立つ。足が冷たい。

舌を診る。舌は小さく赤みが乏しく暗色である。舌の淡色は気血が少ない為である。気血が少なく舌色が暗いのは寒である。くすんだ薄茶色の潤った苔が舌の中央にある。

脈を診る。脈拍は一分間に七十二。どの脈も左右は同等。人迎と氣口の脈は沈大緩。関尺は沈弦大である。両寸は比較的浮いて弱である。

人迎は外を候う。人迎の沈は寒邪或いは湿邪である。沈緩を沈弱と読み変えれば、人迎の沈は外から湿邪が侵入している事を意味する。恐らく関尺の沈も同じ意味だろう。寸は表である。比較的よく浮いた寸は湿が表に在る表証である。湿邪在表である。

氣口は内を候う。氣口の沈は冷である。内が冷えている。虚冷である。

脈舌を併せて考えると、寒湿虚冷の病である。舌の淡色から気血虚と判るが、補虚法では治せない。補虚法が有効なのは、氣口の脈が沈ではなくて、浮虚大の時である。

この証は当帰四逆加呉茱萸生姜湯証に近い。各所に弦脈が見られる。弦は肝の脈である。この場合の肝は恐らく厥陰肝経の事である。当帰四逆加呉茱萸?生姜湯は厥陰肝経の傷寒の処方である。しかし私が欲しいのは、厥陰肝経の「傷湿」の処方である。

首から上の奇妙な症状は、湿邪がまとわりついて起きるもので、寒邪に依るものものではない。湿邪によって、歯茎や耳の中も腫れたり戻ったりして形が変わる。ハッキリした痛みは寒邪に属するが、痺れやだるさは湿邪に特有である。湿邪は肩、頸、頭面に着いて、皮膚や筋の形を変え、痺れ、痛み、重さ、だるさを感じさせる。

湿邪も感冒症状を起こすのは風や寒と同じである。当然、咽の炎症から発熱という事もある。帯下を見ないが、方輿?の言う帯下病として、勝勢飲で厥陰肝経に客している寒湿を逐う。

【処方】 香附子 6 g 当帰 3 g 川? 3 g 茯苓 3 g 蒼朮 3 g 桂皮 3 g 沙参 3 g 木通 3 g 丁香 2 g 甘草 1 g

以上一日分、水煎服用。二週間分。

服用して三四日もすると、夜間の排尿が無くなり、熟睡するようになった。また歯茎の腫れが取れ、歯で物を噛み締めても、歯が浮いてる感じがしなくなった。そのうち、舌も耳も咽も皆良くなった。その後、数ヶ月の間、勝勢飲を続けて良く効いていた。

ところが冬に入った頃、また夜間に排尿に起きるようになった。しかも以前の咽、舌、耳、歯、肩、頸の症状もぶり返してきた。夜間尿を治すには補腎が必要である。しかし湿邪は脾に入る。この場合は脾を暖め、脾から腎を補う方がよい。勝勢飲に益智仁を加える。益智仁は脾と腎を暖める。益智仁を加え、再び勝勢飲は効くようになった。

??根湯

咽つまり、肘も指も強ばり、頭痛胸悶、口中不快は帯下に属す。

鈴木智子さん。四十九歳。当初多彩な症状があり、柴胡桂枝乾姜湯や当帰建中湯加地黄で諸症は軽快した。ところが次第に舌に症状が集約して、しきりと舌の違和感を訴える。

「ただ、舌が何ともたまらなく嫌なんです。」

「以前は、舌の粘りとか、乾きとかが有りましたが、それとは別なんですかね？」

「はい。違います。どういう訳か肩とか頸が凝ってくると、余計に舌がおかしく感じますね。お医者では舌は何ともないと言われますけど、舌の気持ちが悪いんです。」

渋いのも苦いのもなく、痺れでもない。訴えは舌の違和感としか言いようがない。舌には少しのキズも亀裂もない。正常である。ただ乾燥して白苔があり粘ってはいる。

脈を診る。右寸の浮と左尺の浮大が目立つ。他の部に比べ著しく浮いて大きい。人迎気口は浮弦である。やや実と見て良い。脈は一分間に六十四。やや遅い。右寸と左尺の浮大。右寸は肺、左尺は腎である。舌の乾燥から類推して、肺腎の乾きとする。気分乾燥があると脈は浮になる。

奇妙な舌の違和感と肺腎の燥。この人は既に更年期にある。舌の燥は下部の燥の反映ではないだろうか。単純な舌燥舌乾ではなく、淵源が腎の燥にあり、その為に奇妙な舌の違

和感が起きるのではないか。

これは方輿?の言う帯下病かもしれない。帯下はないが帯下病の処方、??根湯を使う。

【処方】 ??根 5 g ??実 5 g 柴胡 5 g 百合 4 g 知母 4 g 黄? 4 g 甘草 3 g ?苡仁 9 g

以上一日分、水煎服用。十日分。

舌の違和感は消失した。しかし服薬を止めると、症状が舌に集約する以前からあった手足の痺れ、痛み、強ばり、浮腫、倦怠感、胸脇苦満、肩こり、咽の詰まり、頭痛、舌の違和感や粘りや乾きが次々出現する。また服薬を開始すると、諸症も舌の違和感も消失する。全てが帯下病の症状だった。

自律神経失調症

耳塞がり、身は水中に在る如し。

薬師寺すみ江さん。五十七才。痩せて色黒。半年前から耳が塞がって治らない。あいたり閉じたりするが、一日水の中に居るような気分。塞がるのは主に左耳。頸が凝ると耳が塞がりやすい。

もともと耳には問題がある。子供の頃、中耳炎で両方の耳から膿が出ていた。右耳は難聴で耳鳴がある。二十年前にはメニエル病になり、天井がグルグル回る発作が何度もあり、そのうち不眠症にもなって、今もメイラックスが無いと眠れない。

最近、メマイは起きない。なぜか常に不安感がある。耳が塞がるようになって、体重が五キロ減少した。以前より乗り物に弱くなった。デパスとドグマチールが出ている。鬱と判断したのだろうか。

「化学の方のお薬は、止めようかと思うんです。」

「いや、今止めると大変ですよ。まずは眠れなくなりますね。」

「お薬の副作用で耳に来たって言う事はないですか？ 三年も飲んでますけど。」

「副作用で耳が塞がるとは、考えにくいですね。」

「何もする気がしないんです。以前は、スポーツ大好きだったんです。」

「どんなスポーツですか？」

「卓球です。メニエルになっても、平気で試合に出てました。」

「目が回ってて、卓球が出来るんですか？」

「少々のメマイなら出来ます。天井が回っても、注射一本で治りますから。」

不安だと言うが、そんな風には見えない。身体症状を重視した治療で良いのではないか。

舌は締まった形。華奢な体に似合わず、舌は大きくて厚みがある。大きい舌は丈夫な人、締まった形の舌は肝の体質と見る。色は淡紅。乾燥している。乾いた白苔がある。舌の乾燥も乾いた白苔も熱を意味する。舌だけ見れば四逆散や大柴胡湯のクラスである。

脈は弦緩数。脈拍は一分間に八十八。速い。人迎気口は浮弦緩大。寸はやや大で浮。関

脈も浮弦緩大。右尺は有力大。しかし左尺は渋弱である。左尺虚は腎虚である。

中国では、メマイと言えは先ず鎮肝熄風湯らしい。熄風は風を止める意味である。メマイ、耳鳴り、耳の塞がりは風である。即ち内風、肝風である。脈数は熱である。鎮肝熄風湯には清熱の薬が幾つか含まれる。問題は左尺の渋弱である。医学衷中参西録では、左尺が虚の時は、鎮肝熄風湯に熟地黄や山茱萸を加えている。

再度、脈を診る。脈は二度目の方が本当の事が判る。しばらく診ていたが、やはり左尺は渋弱か、と思ったその時、左尺の脈が数秒間フワッと大きくなった。そしてすぐまた元の渋弱に戻った。錯覚だろうか。気滞があると本来の脈が隠れる。左尺に注意して、しばらく脈を見続ける。しかし左尺の緩大は二度と現れなかった。左尺弱とするか、緩大と渋弱が交代する脈とするか悩む。

腎虚があるのに平肝解鬱ばかり強行すると、腎虚が進んで不測の事態を招く。腎虚も無いのに補腎の薬を配合しては、平肝解鬱を妨げる。しかし左尺弱を腎虚とすると、舌の白苔とも矛盾する。陰虚は基本的に無苔である。悩んだが、一瞬であつても緩大が出現した事で、腎虚とはせず脈の交代する肝鬱気滞とする。処方は鎮肝熄風湯。川楝子は柴胡の代わりに平肝解鬱する。

【処方】代赭石 6 g 牛膝 6 g 牡蛎 6 g 龜板 6 g 白芍 6 g 玄参 6 g 天門冬 6 g
川楝子 3 g 麦芽 3 g 茵? 3 g 甘草 1.5 以上一日分、水煎服用、十日分。

数日で耳は塞がらなくなった。舌の乾燥も白苔も消失。数脈も見られない。脈拍は一分間に七十二。熱は解消した。左尺の渋弱は見られない。尺脈は左右の差なく弦緩大である。補腎せず解鬱して、左右の尺が揃った。両寸は縮小。左尺渋弱と左寸大で腎陰虚を疑ったが、補腎せず左寸の縮小を見た。

初期の目的は達し、彼女も盛んに卓球の試合に出る。しかし不眠症が残っている。睡眠薬を飲んでいても熟睡しない。彼女も睡眠薬を止めたいという。鎮肝熄風湯に色々工夫したが、不眠は改善しなかった。ただ何度か薬師寺さんと会ううち、随分と気性の激しい負けず嫌いな人だと分かってきた。何かカッカッと燃えるような烈しさを持っている。肝火である。恐らく子供時代の中耳炎も肝火である。火の不眠には黄連が必要である。また強気の裏で常に感じている不安とは、夜毎恐ろしい夢を見るという温胆湯の小心であると判明した。古今医鑑の清心温胆湯を作る。

【処方】麦門冬 3 g 当帰 3 g 白芍 3 g 人参 3 g 白朮 3 g 茯苓 3 g 半夏 3 g 陳皮 3 g 竹茹 3 g 香附子 3 g 川? 2 g 遠志 2 g 石菖蒲 2 g 枳実 2 g 黄連 1.5 g 甘草 1 g 生姜 1 g
以上一日分。水煎服用。十日分。

熟睡できるようになった。徐々にメイラックスを止める。

鎮肝熄風湯

レントゲン室から出たら、歩けるようになっていた。

古村さん。脳梗塞にでもなったか、歩いてくる格好が変だ。左脚が遅れ勝ちで、ロボットみたいにゴトゴト歩いて来る。昔から持病はメマイ。六十七才。

「あの、またメマイで頭がボーッとして、何んにも考えられないんですけどね。今回のフワフワだけで、吐き気もなく、以前とは様子が違っててんです。」

「そうですか。」

「実はね。こうなる前は体中が痛くって、歩くのも不自由で、寝返りなんかアチコチが痛くって、そりゃあ大変で、手足の指まで痛かったんです。」

「今も？」

「それが不思議なんです。整形外科へ行きましたね、レントゲン撮って頂くのに、脚を揃えてって言われるんですけど、どうしても足を真っ直ぐに出来ないでいたら、こうですよ！って技師さんに、足をつかんでギョッと向きを変えられて。終わってベッドから降りたら、すっかり痛いのが治ってたんです。」

鬼手仏心。レントゲン室の名整体師が、身体中が強ばっていたのを、一発で治してしまった。しかし、まだ満足には歩けない。脚に浮腫がある。押さえると窪んでなかなか戻らない。

舌を診る。舌の色は濃い暗紅色。苔は無い。舌の形は広いが薄い。薄いのは虚である。

脈を診る。脈は弦大有力にして堅。人迎も気口も浮いて弦大有力。両寸は微。脈拍は一分間に六十。

以前に水をさばく事でメマイを治していた頃と較べると、はるかに脈が大きく硬く強くなっている。脈がこんなに硬いと、全身のスジもみな硬いに違いない。全身の強ばりを弛める必要がある。老人には脈の強い人が多い。強さは余裕のなさ、即ち虚である。

医学衷中参西録に建?湯の脈は弦硬にして長、或いは寸盛尺虚、或いは大なること常に数倍にして毫も緩和の意なしとする。処方建?湯。浮腫を考慮して沢瀉を加える。

【処方】 山薬10 g 牛膝10 g 代赭石 8 g 竜骨 6 g 牡蛎 6 g 乾地黄 6 g 白芍 6 g 柏子仁 3 g 沢瀉 6 g

以上一日分、水煎服用。七日分。

服用終わって、古村さん来局。

「お薬を頂いたら、一日で身体がスッと楽になって、頭もスッキリしました。」

「それは良かった。」

「あれは、体中が硬くなってたんですね。ほんとに楽になりました。」

「ここへ歩いて入って見える様子も、とても良くなりましたよ。」

「そうですか？ 歩いてる時の格好が変だったんですか？」

「そうです。今は頭もスッキリしたんですね？」

「ええ、はい。でも、昨日から横になると、グルグル目が回るので横になれないんです。」

それは大変、眩暈なら処方は鎮肝熄風湯だ。あわてて建?湯の山薬、乾地黄、柏子仁を去って亀板、玄参、天門冬、川楝子、麦芽、茵?を加える。

【処方】代赭石 8 g 牛膝 8 g 竜骨 6 g 牡蛎 6 g 亀板 6 g 白芍 6 g 玄参 6 g 天門冬 6 g
川楝子 3 g 麦芽 3 g 茵? 3 g 甘草 1.5 g 以上一日分、水煎服用。七日分。

古村さん来局。横になって寝られる。浮腫も消失した。しかし、まだ何かスッキリしないらしい。話だけでは解らない。脈を診る。

両尺は弦有力である。地黄と山薬を除いたが、腎虚にはなっていない。しかし人迎が気口より二倍も大きい。まるで風邪を引いてる時のような脈である。人迎は外である。外で何か起こっている。

「まだ少し身体が強ばりますか？」

「いいえ。それは今とても楽になってます。」

「サムケはしませんか？」

「そう言えば、厚着してる割に温まらないというか、手でこう、顔をこすってやりたい感じですね。」

体表面で風が起こって毛穴が閉じ、皮膚が軽いサムケを覚えているのと同じ状態にある。内風が外風の真似をしている。鈎藤を加えて肝の風を逐う。

治った。この年は三度も同じ様なメマイが起き、三度とも鎮肝熄風湯に鈎藤を加えて治した。

不整脈

脈促胸満短気、一息三動。病は内傷か？ 外感か？

「胸が苦しくて咳が出るんです。お医者では不整脈と言われました。」

「いつ頃からですかね？」

「先月の引っ越しの時、重い本を何冊も抱えたら、咳が出るようになって、その上、雨に濡れて、その夜、狭心症が起きました。」

「雨に濡れて、冷えたからですかね。」

「主人の本も多くて、それで疲れたと思います。」

戸田裕子さん。六十三歳。昔から疲労、不眠、盗汗、動悸が主訴で、味麦帰脾湯や味麦益気湯がよく奏功する。今回も疲労や盗汗があり、気口が人迎の二倍である。内傷と判断する。

先ず、生脈散を合方した帰脾湯。ついで生脈散を合わせた補中益気湯。それぞれ一週間ずつを試みる。

ところが何故か今回は無効である。生脈散では脈の結代はおろか、汗さえ止まらない。補虚して治らないのだから、病は虚勞内傷ではないかも知れない。尿量が少ない。

舌色は淡紅。白膩苔がある。白膩苔は外感の少陽病、柴胡剤の証に多い。脈を診ると、氣口大だったのに、いつの間にか人迎と氣口が等しくなっている。既に脈は内傷ではない。一分間の脈拍は八十。やや速い。ただ脈が三つ拍つと一息吸う。一息三動は遅脈である。息切れしている。短気は虚である。しかし、この際は虚ではなく胸が詰まるので短気になり、遅脈なんだと考え直す。多汗も心陰虚でなくて、実熱とする。処方柴胡桂枝乾姜湯。多汗には黄耆を加え、尿少、肥満、短気には茯苓と杏仁を加える。

【処方】柴胡 4 g 桂皮 3 g 黄耆 2 g 乾姜 2 g 瓜蒌根 4 g 牡蠣 6 g 黄耆 6 g 茯苓 6 g 杏仁 5 g 甘草 2 g

以上一日分、水煎服用。七日分。

服後、胸悶短気も脈の結代も消失。咳や盗汗も減少。約三週間で完治した。虚実を取り違えて、危うく治し損ねる所であった。外感の脈結代には柴胡桂枝乾姜湯を用いて奏功したことが何度かある。

痰飲脈結代

心下つまって、不食十五日。

水田氏。六十歳。運送業。数年前にも胃の調子が悪く、しばしば来局した。大抵、半夏瀉心湯で治った。

「ご飯が、全く、一口も食べられないんですよ。」

「いつからですか？」

「もう、十五日ほどに成りましょうか。お陰で、五六キロは痩せました。」

「食事が、美味しくありませんか？」

「というより、胃が詰まって、全く受け付けません。」

「水分は摂れますか？」

「水物なら摂れます。今も清涼飲料水のボトルを持ち歩いています。口も粘りますので。」

十五日も水物だけで過ごしては大変である。早急に何とかしなければならぬ。本人は胃癌にでもなったかと心配している。その辺は私にも判らない。香月牛山は国をひとつ持つような人が、この病（膈噎）にかかるという。彼は愛想が良く腰が低く、動作はキビキビ。潔癖な所もある。急に水田氏が胃癌になっても、おかしくない性格の人に見える。

舌を診る。本人も口が粘ると言う通り、舌は乾燥して白苔がベタベタ着いている。舌色はやや赤い。

脈を診る。脈は弦大緊。しかし脈が飛ぶ。つまり結代している。なぜ胃が悪くて脈が結

代するのか。心下の詰まりがひどくて、気の流れを阻害するのか。

脈の弦緊と舌の多量の白苔から考えると、痰飲である。痰家に胃病はつきものだ。処方
は外台の茯苓飲。駆痰のために半夏を加える。

【処方】 茯苓 5 g 人参 4 g 白朮 4 g 陳皮 4 g 枳実 3 g 生姜 1 g 半夏 6 g

以上一日分、水煎服用。七日分。

七日分服用。脈の結代は消失。いくらか食べられるようになり、本人にもいくらか安堵
の色が窺える。しばらく同じ処方をして完治した。

肝鬱脈結代

妬みと怒りで肝気は鬱塞。胃痛して脈結代。

「わたし、胃なんか悪くなった事ないのに、この頃、胃が痛いよね。差し込むって言
うか。かなり痛いよ。ウーンってなりそうな位。」

「食べられる？」

「食べられる。逆に胃が痛むようになって、体具合悪くて肥ったわ。お勤め始めたら、
目の前で大金が動くのを見るから嫌で。ストレスなのよね。奥様達が、次々札束出して来
てね。」

吐き気はない。胃のもたれもない。手で胃部を押さえても不快でない。胃痛が始まって
から、肩が凝り、大便是兔糞状になって毎日出なくなった。

彼女、すらりと背が高く美人。若い頃、随分年上の会社社長と結婚した。ところが早々
に社長は亡くなり、十数年、彼女はひとりで子育てしてきた。もともと勝ち気な人だ。口
には出さないが、私だってあんな事にならなければ、と思っている。子育てに専念できた
のも、ある程度の資産があったからだが、それも底をつきかけたのかも知れない。そこへ
札束である。余計みじめになるから、妬んだりしたくないと思っても、目の前で大金が行
き来すれば苦痛である。

舌を診る。締まった形の舌である。白膩苔がある。締まった形の舌は柴胡剤の人に多い。
白膩苔があるので、なおさら柴胡は使いやすい。舌尖が赤い。心火である。黄連剤の可能
性もある。

脈は弦大緩。寸小尺大で柴胡剤でおかしくない。しかし結代している。しかも遅い。脈
拍は一分間に六十。脈が遅いのは、気持ちをストレートに出せない自己抑制タイプの人にも
ある。肝鬱の諸方が適する。黄連剤などは逆に脈の速い人が多い。処方は逍遙散に香附
子と青皮。

【処方】 柴胡 3 g 当帰 3 g 白芍 3 g 白朮 3 g 茯苓 3 g 薄荷 1.5 g 甘草 1.5 g 生姜 1 g
香附子 4 g 青皮 3 g

以上一日分、水煎服用。七日分。

「治ったわ。」と来局。脈も結代していない。しかし何度も再発するので、結局勤めは辞めてしまった。

胸中不定

婦人、小便不利、心中不穩、脈結代。

親子三人連れで来局。夫婦がうちの娘を診てやってくれと言う。

「動悸がしますか？」

「いいえ。」

「胸苦しい？」

「胸苦しいという程でもないです。」

「胸の中が不安定な感じなんですか？」

「そう、それに近いです。」

何様おとなしい人だ。声も小さい。細い身体。小さな顔。透き通るように白い皮膚。とても二人の子供のお母さんには見えない。体力が無さそう。しかし落ち着いている。性格や気分には問題ない。

脈を診る。結代している。寸も関も尺も細洪。わずかに弦。人迎も気口も細洪で浮。脈拍は一分間に八十。やや速い。脈の細と洪は虚である。結代と微弦は気の結である。やや脈数は短気である。

舌を診る。舌は大きく厚い。舌辺に歯痕がある。色は淡紅色。苔は無く、潤っていて正常に近い。

舌が肥胖している。舌が太ると歯に接触して歯痕ができる。分厚い舌は水飲だが、細い身体の何処に水飲があるのか分からない。弱そうな人だが、舌色は正常に近いから、気血の虚はひどくない。

足冷、小便不利、立ちくらみが有る。苓桂朮甘湯はどうだろう。しかし脈が合わない。苓桂朮甘湯の脈は沈緊である。苓桂朮甘湯の桂枝は下焦の飲を逐う。白朮は心下の飲を去る。しかし、この人の症状は心下に無くて胸にあり、飲の所在が異なる。杏仁は胸の薬である。茯苓杏仁甘草湯なら、胸に陽気を補って水飲を逐う。

【処方】茯苓 8 g 杏仁 6 g 炙甘草 2 g

以上一日分、水煎服用。十日分。

二度目の来局。脈の結代は消失して、胸中不定の感じも取れた。更に二十日ばかり服用して完治した。

心痛

弦緊大有力の脈が話中に急変して、参伍不調濡弱になる。

蔵本修三氏。七十二歳。隣県某市助役を退職。今は生まれ故郷で悠々自適の生活である。

「心臓が悪いのだが、医者は何とか、病名を言っておったが、忘れた。」

「どんな感じで痛みますか？」

「歩いてる最中に、グーッと締め付けが来ると、冷汗が出て、収まった後もフーフー言うね。」

「歩いてる時が多いんですか？」

「百メートルは歩けないな。みぞおちの直ぐ上の所が、苦しくなってね。」

「夜とか他の時には、苦しくならないんですか？」

「それはない。安静にしておれば、大丈夫という事だな。」

舌を診る。舌はやや暗い淡紅色で、潤っていて汚い黄色の苔がある。黄苔ではあるが潤っており、膩苔でも乾苔でもなく、既に実熱ではない。

脈を診る。脈は弦大。緊張感があり有力。脈の不整はない。寸微尺弦である。柴胡剤なら大柴胡湯といった所。さて処方は何？と考えていると、蔵本さんが話しかけてきた。私はまだ診脈の途中である。

「丁寧に診るね。最近の医者は、脈なんか診ない事もある。」

「そうですね。そのかわり、検査で大抵の事は分かりますからね。」

なんと、会話が始まったとたん、蔵本さんの脈が急速に弱まり、弦も緊も消え失せ、濡弱になって脈と脈の間隔さえ一定せず、頻々と結代する。しかし会話が終わると、速やかに脈はもとの弦大緊に戻る。勿論、蔵本さん自身は気付いていない。試しに、今度は私から話しかけてみる。答えて蔵本さんが話し始めると、脈は再び乱調である。

脈の弦大緊は気の実である。気の実は枳実と厚朴で緩める。散濡の脈は虚である。虚は薤白、??実、桂皮で補う。処方は枳実薤白桂枝湯。

【処方】 枳実 4 g 厚朴 4 g 薤白 8 g 全?? 6 g 桂皮 3 g

以上一日分、水煎服用。十五日分。

蔵本さん。きちんと十五日目に来局。

「少し良いようだ。百メートルや二百メートルなら、歩ける。」

「そうですね。日が掛かるかも知れませんが、しばらく続けてみて下さい。」

私は調剤室へ入り枳実を秤にかける。蔵本さんは父と歓談している。

「釣りの方は、ちょくちょく行っておられますかな？」

「ええ、店の暇な時には。」

「お元気でよろしいですね。私は心臓をやられてからダメです。」

「お元気そうだったのに、いつ悪くされたんですか？」

「去年ね、庭の池の掃除をして、あんまり天気の良い日でもなかったのに、腰まで水に浸かって、鯉の大きいやつをね、何匹も抱えて、あっちへやったり、こっちへやったり。あれがまあ無茶でしたな。」

蔵本さんは熱心に服薬して、半年後には「ビルの三階まで駆け上がっても、全く平気になった。」と言って驚かせた。無茶は、ほどほどにして欲しい。

?血脈結代

脈細澁結代、胃痙攣、大便秘結。

長田和代さん。六十七歳。広島の人。がっしりした身体付き。色黒。姪御さんに伴われ来局。胃痙攣と言われている。二三日おきに、激しい心下部痛が起きる。原因は不明である。

「たんべも、胃痙攣で、ひいどう痛んでから、まあだ少こうし、痛みが残っちゃいます。」

「かなり痛いんでしょうね。」

「ええ、そりゃあもう、生汗が出るほど。」

「胃痙攣は、いつ頃から起きるようになったんですか？」

「二十年ほど前にも、一時よう起こっちゃったのですが、今度な、二十日ほど前からです。それと先生、ついで言うちゃあなんですが、便秘の方の薬も入れちゃあ、もらえんですか。」

「便秘ですか。」

「便秘言うても、私な、ひどいんですけ。赤ん坊の頭ほどの、大けえのが詰まっちゃいますけえ。」

「下剤は使ってますか？」

「それが下剤はもう、ひどう下ってから、下腹もキーリキリ痛んで、難儀いて使やあせんのです。」

便秘。糞塊の直径が十センチ以上有る。太い丸太ん棒の様なのが、便器の中で直立して大量に水を流しても溶けもせず、微動だにしない。そのくせ牛乳を飲むと下痢する。胃が弱い。いつも胸ヤケして胃薬を飲む。胃が悪くなると、左の肩が痛くなる。

実は、身体の左半分が全部おかしい。左脚の知覚が麻痺して、触っても感じなかったり、スリッパが脱げて分らなかつたりする。左脚ばかり厥冷する。唇も左半分が麻痺している。左胸も痛い。

舌は小さくて薄い。舌体の栄養不良である。気血が少ないか、或いは血流が阻まれているらしい。舌の色も薄い。黄白色の苔がある。黄苔ではあるが、潤っているから熱証ではない。

脈は結代して弦細澁。脈拍は一分間に七十二。脈の細澁は舌色の淡と併せて見れば血虚である。しかし、?血のために同様な脈舌が表れる事がある。体格や印象からは気血虚とも思えない。

右は気、左は血。脚の厥冷も麻痺も胸の痛みも、すべて左である。左半身に?血がある。外傷の経験はないか尋ねてみた。すると二十年前、腰を強打して二十三日間も立てなかったと言った。

便秘には陽結と陰結がある。脈舌とも熱証は見当たらないから陰結である。処方では滋血潤腸湯。方意はまさに方名の如し。

【処方】当帰 6 g 乾地黄 5 g 桃仁 5 g 白芍 4 g 枳実 3 g 紅花 2 g 大黄 1 g (方中の萘を省略)

以上一日分、水煎服用。七日分。

翌日、本人でなく姪御さんから電話があった。

「昨日は、叔母が大変お世話になりました。とても喜んでます。昨日の内に煎じて、すぐ飲ませましたら、まだ残っていた胃痙攣の痛みがスッと無くなって、今朝はまた良いお通じがあったそうです。」

「そうですか。それは良かった。あちらへお帰りにならないで、お宅に泊まれたんですね。」

「はい。七日分、飲み終わるまで、うちに居させます。」

長田さん。自宅へ帰る日、店に寄ってくれた。頻発していた胃痙攣も起きず、大便も気持ちよく出ている。舌は色が好くなり、やや形がふっくらしている。脈の結代は消失し、太さが増している。駆?血と補血の両方がうまくいっている。以後、定期的に送薬して、ほとんどの症状は治すことが出来た。?血による脈の結代の例である。

〔文献摘録〕

【浅田流方函及び方函口訣】滋血潤腸湯

(統旨) 血枯及び死血の膈にあり、飲食下らず大便結燥するを治す。

(口訣) この方は膈噎の?血に属する者に用ふとも、総じて?血の胸腹に在る者に運用すべし。

膀胱炎

脈は結代。下腹の不快は心臓の病に連なる。

今里知子さん。六十八才。色白の婦人。この数年、頻々と膀胱炎に罹るようになった。その度に抗生剤を服用する。効果は比較的速やかに現れ、一週間ばかりで症状は消失する。症状は頻尿、下腹の不快、残尿感、尿の混濁など。ただ泌尿器科で残尿が認められて、導

尿して二百ミリリットルも出た事がある。

「症状は少し近くなるのと気持ち悪いだけなんです。時にお小水が濁りますけど、痛みはありません。」

「気持ちよく出ますか？」

「はい。でも朝は量が少なくて色も濃いんです。一日に、お水を2リットル位は飲んでるんですけどね。」

「夜間にトイレに起きますか？」

「いえ、ほとんど起きません。」

舌を診る。舌色は暗い。舌の暗は寒か、気滞か、?血かハッキリしない。苔はない。無苔は陰虚かも知れない。舌面に小さなキズが幾つかある。キズは虚である。

脈を診る。脈は結代している。脈拍は一分間に五十六。弦浮緊である。人迎気口も弦浮緊である。両寸が大きい。陰虚かも知れない。心臓が悪くないか尋ねると、不整脈で薬をもらっていると答えた。

寸大は陰虚である。肺心と腎の陰虚である。脈の結代は心虚である。脈の遅も緊も寒である。舌色の暗は気滞や?血の意味もあるが、これも陽虚とすれば心の陰陽両虚である。処方炙甘草湯エキス。

【処方】炙甘草湯エキス 3 g × 3 × 14

症状はすぐ取れた。脈の結代も消失した。その後、しばらく膀胱炎にならなかった。ところが、三ヶ月目、同方服用中だったにも拘わらず、再び膀胱炎を発症した。また脈が結代している。

舌色の暗は消失している。陽虚は無くなった。苔は無い。濃紅色である。血熱の疑いがある。舌面にハッキリと紫色の?斑が出ている。?斑は?血である。

脈は結代している上に緊がひどくなり、余裕がなくなっている。甚だしい緊は虚である。両寸大は消失。肝心腎の陰虚より心気の虚の方が目立ち始めて、寸大はなくなっらしい。脈拍は一分間に六十。遅い。遅も陽虚ではなく心気虚とする。

薬物を充てる。寸が縮小して肝心腎の陰虚が目立たなくなったから、地黄は必要ない。心気虚に炙甘草、黄耆、人参。脈結代に生脈散、即ち人参、麦門冬、五味子。血熱?血に丹参。脈の弦緊に赤芍。膀胱不快は腎気の虚として人参、黄耆、茯苓、車前子。処方は生脈散の加味方。

【処方】人参 5 g 麦門冬 8 g 五味子 2 g 炙甘草 4 g 黄耆 6 g 丹参 6 g 赤芍 6 g 茯苓 4 g 車前子 4 g

以上一日分、水煎服用。十日分。

服薬すると、脈の結代も下腹不快も消失した。数ヶ月で完治した。

心肺気虚、脈結代。

お隣さんにも、かまっていけないと、心臓だけじゃ治らない。

「やあ、お久しぶりですね。元気だった。」

「まさかねえ。私が元気なはずも無いけど。」

「相変わらず、あちこち痛む？」

「お陰様で、痛みの方は無いんです。」

「やっぱり、脈はメチャクチャで？」

「そうなの。ペースメーカー入れたけど全然だめだった。主治医もガッカリしてる。」

友永優子さん。五十八才。彼女には十五年ほど前、胸、脅、上腕、腰、脚などの痛みで、四年半ばかり投薬した。巧く行かなかった。通常の筋肉痛や神経痛の処方は、どれも効果がなかった。痛みは彼女の三十代から有り、理由もよく解らなかったが、四逆湯や真武湯の加減方が、やや有効だった。中でも参附湯が有効だった。即ち人参と附子二味の処方である。

しかし、効果は安定せず、次々と場所を変えて痛むので、処方も変更を余儀なくされ、最後には何が何やら解らなくなった。数年後、再び来局した時には、頻繁に脈が結代していた。参附湯に生脈散など加味して対応したが、十分な成果は上がらなかった。当時は脈拍が極端に少なく、一分間に四十しか拍たなかった。不整脈の原因も分からなかったが、結局、身体の痛みは心臓に関係するのではないかと、誰もが考えるようになり、掛かり付けの医師も、ペースメーカーを勧める様になった。

「今はね、気持ちが悪いのよ。なんか吐きそうで、冷や汗が出て。夜は寝汗も出るし。」

「熱いんですかね、身体が？」

「それが寒いよ。足なんか、すごく冷たい。寒いと直ぐ風邪を引いて熱が出るし、長びくし。」

「微熱が続くとか？」

「微熱も続くけど、身体がだるくて寝汗が出て、ご飯も食べられなくて、フーッと気分が悪くなって、冷や汗が出て、吐きそうで。たびたび下痢にもなるし。」

脈は頻繁に結代している。人迎気口は浮弦緩。右の寸は浮緩だが、心虚を意味するのか左の寸は脈が無い。脾虚を意味するのか右の関（脾）は細澁で、左の関（肝）は緩である。両尺は無力である。

舌を診る。舌が小さい。やや乾燥して黄苔がある。黄苔は極虚の中にも熱が存在すると解する。ペースメーカーは働いてないと言うが、以前より脈拍は多い。脈拍は一分間に六十。

吐き気、冷汗、フラフラなど、ショックで急に血圧が下がったりした時に似ている。心気虚である。心臓をしっかりとさせれば解決する可能性がある。牛黄を用いることにする。牛黄には強心作用がある。脈拍を増したり、血圧を上げたりしないで強心作用を発揮して、心臓の能率をアップする。微熱や盗汗にも速効が有る。

【処方】牛黄100mg×10 十日分。

友永さん来局。牛黄は良く効いた。微熱、盗汗、自汗、吐き気、フラフラなど全て消失。しばらく牛黄を続けた。脈の方は少しも改善しなかったが、五ヶ月の間、極端に体調不振に陥る事なく過ごせた。しかし、風邪を引いたのがきっかけで再び体調が悪化。

「先々週、風邪を引いてから、黄色い痰が出るようになって、サムケがして、身体がだるくて。」

「さむけがする位だから、汗は出ませんよね？」

「それが、身体は熱くないんだけど、気持ち悪くなって生汗が出るのよ。胃の所が気持ち悪くて、食欲が無いし、吐き気がして。それに下痢も。」

牛黄は効いてない。心臓をバックアップしても無駄である。症状はサムケ、下痢、喀痰、自汗、倦怠、心下不快、吐き気、食欲不振、脈の散乱である。喀痰は肺の症状である。黄色の喀痰であるから、呼吸器に若干の炎症がある。肺は肌表を主とするから、サムケや自汗も肺の症状である。心下不快、吐き気、食欲不振、下痢は脾胃の症状である。

病気は牛黄の強心の及ばぬ所、肺と脾胃の間に在る。張錫純先生の哀中參西録のまねをして、山薬で脾と肺を補う。

【処方】山薬六十グラム、以上一日分、水煎服用。十日分。

山薬でサムケが去り、汗が止まり、吐き気も消失。食欲も改善した。ただ脈はやはり結代している。

張錫純先生は山薬は脱症を治すと言う。珠のような汗が流れ、手足は厥冷し、口を開けて目を閉じ、手を開き尿を漏らし、脈は絶えんとする症である。

膵臓癌

虚と実と併び見われ、補いつつ攻める。

立花謙造さん。六十二才。一年近く調子が悪かったが、放置していた。三ヶ月前、急激に体重が減少。総合病院を受診して膵臓癌の末期と診断される。体重は七十キロ以上あったが、今は痩せて六十キロ。

「まあ、私自身は半ば諦めては、いるんですが。」

「病院では、治療出来ないんですか？」

「そうです。今の所、方法が無いようです。」

「今、どんな症状がありますか？」

「痛みはひどくないんです。」

胃が張って胸まで苦しい。胃がチクチクする。何とか食べてはいるが、量が減っている。背中の右の肩胛骨の辺りが痛い。

舌を診る。淡紫色で血の気がない。脱色したように透明で色が抜けている。ブヨブヨして締まりなく、クタクタになった舌である。気血ともに虚している。色が紫だから?血もある。体重が減少する時に舌も痩せたのだろうか、舌の形が異様に細長い。潤っている。苔は少ない。

脈を診る。脈拍は一分間に六十八。寸も関も細澁無力。これに対して両尺は弦大にして堅。寸関の弱く細い脈と、両尺の大きく堅い脈の差が際立つ。両尺は強く按じても消えない。硬いばかりで脈の潤いとか艶というものがない。人迎は浮虚。気口は浮虚大。気口が人迎より大きい内傷の形である。左関は弦になったり細になったり、大小が交代する。寸は表。尺は裏である。恐らく両尺の堅とは裏の実、つまり腫瘍であろう。

右は気。左は血である。尺以外は右も左も細弱である。つまり気も血も虚している。本当は左がやや小さいから血虚とも言えるが、大きい方の右脈も甚だ無力であるから、杓子定規は意味がない。

左関の大小交代は肝の気滞である。本来、肝脈は弦であるが、ときどき気の流れが阻まれ、弦と細とを行き来している。気が流れた時は弦。流れない時は細である。恐らく脾臓の腫瘍は肝気の異常が原因で発生したものである。舌の紫色と肝脈の交代を併せて考えると、気滞は?血に発展している。

気血ともに虚し、その上に気滞と?血が有る。甚だしい虚の中に実も存在する。

処方を組み立てる。虚は補い、実を攻める。虚には黄耆。脈細に人参。?血に丹参。肝の気滞に莪朮。

【処方】黄耆30 g 人参6 g 莪朮6 g 丹参6 g 以上一日分、水煎服用。二週間分。

服後、先ず背中の痛みが無くなった。食べる量が増え味も出てきた。胃は押さえると痛い、チクチクしなくなった。ただ畑で重い物を持ったり、身体が疲れた時は、胃と胸が張って首まで締め付ける。

舌の横幅が以前の二倍になった。体力回復である。舌色も改善してクタクタの舌ではなくなった。

肝脈の交代がなくなり弦緩で一定した。気滞が少なくなったと見る。人迎気口も左右差が解消した。気口の縮小は体力の回復である。両尺は堅さが取れ、弦緩になり余裕のある脈になった。

尺脈の堅とは腫瘍と気滞と虚の合成である。確かに堅の消失は改善ではある。ただ腫瘍本体に対して、薬がどこまで影響したかは分からない。秋まで同じ処方続ける。

「この頃、少し食べると、すぐに胃が張って、胸が苦しい。」

「身体は、疲れませんか？」

「背中が痛くないから良いが、畑に行った後は胸が苦しいから、十五分ほど家で寝ています。」

また食べられなくなっている。鶏内金と三?を加える。鶏内金は消化剤だが消?の働きもする。三?は行気止痛。三?の抗腫瘍効果は莪朮ほどはハッキリしない。

【処方】黄耆30 g 人参6 g 丹参6 g 莪朮9 g 三?5 g 鶏内金4 g 以上一日分。水煎服用。
二週間分。

立花さん来局。食べる量が増えている。同じ処方続けると、胃の張りも胸の苦しさも消えて、症状としては何も無くなった。脈は弦緩大である。

冬になった。ある日、脈を診ると左の肝の脈が甚だしく洪になっている。まだ症状には何の変化もない。しかし再び肝に?血が出来つつあると考えた。ただ処方の変更しなかった。

ところが、これが最後の来局になった。急変が有ったのかも知れない。何をすべきだったのか。攻めるのか守るのか。薬物は？

百合

右の脈を縮小して、右手の病を治す。

大木慎二君。三十歳。右の掌に沢山の水疱が出来て、手掌は真っ赤に発赤している。痒みはないが、水疱は壊れたのもあり、すっかりグチャグチャになっている。手掌に触ると燃えるように熱い。しかも汗で濡れてビショビショである。毎日、皮膚科の薬を塗っていれば良くなるが、急に手掌がカッカと燃える発作が起きて、皮膚はまた元の木阿弥に戻ってしまう。

「手の平がビショビショですね。いつも、こうなんですか？」

「濡れてますか？ 大体いつも、こんなものなんで、気にしてなかったんですがね。」
変わった人である。手掌の多汗に悩んで手術する人さえいるのに、指摘されるまで人と違っているとは思ってなかったらしい。口乾口渴がある。人から口臭があると指摘される。腹部にガスが溜まったような感じと痛みがあり、腹筋運動をすとかトイレでしばらくしゃがんで排便すると治る。健康そうである。白髪が多い。

舌は赤い。乾燥して白苔がある。赤い舌は熱である。乾燥も熱である。白苔は湿かも知れない。

脈は右ばかり大きい。右は寸と尺と気口の三カ所で左より大きい。右の寸尺は浮緩大である。気口は浮緩大で人迎に倍する。脈拍は一分間に六十八。

気口の脈大。古人は人迎或いは気口の脈状と同じ脈状が何処に現れるかに注目する。つまり気口の浮緩大と同じ脈状を六脈の中から探して、この内傷がどの臓に繋がりが有るかを知る。すると右寸の肺脈が浮緩大である。肺に異変があり、そのため内傷の脈を現していると判る。乾燥した赤い舌と考え合わせて、右寸の浮緩大は肺の熱とする。尺脈の右大左小は腎虚とする。

水疱は湿。発赤は熱。即ち病は湿熱である。そして熱の源は肺陰虚と腎陰虚の内熱とする。

右手の脈ばかり大きく、患部も右にある。右手の熱を冷まし、右手の脈を縮小出来れば、右手の病が治るのではないか。肺陰虚に効きそうな薬物を探す。百合はどうだろう。この人は礼儀正しく真面目そうな人だが、どこことなく腑に落ちない所がある。手掌は心に属している。手掌から多量の汗が出るのは、心即ち精神にも、何か普通と違った所があると言えないだろうか。百合は肺にも心にも効く。

処方を組み立てる。百合で肺心の陰を補う。肺の陰を補って内熱が冷めれば、右寸脈は縮小する。地黄で補腎すれば左尺が充実して両尺が揃う。滑石で湿熱を去る。防風を加え患部を乾かす。腹中の気滞には烏薬。処方では百合滑石湯と百合地黄湯の合方に烏薬と防風。

【処方】 百合 6 g 滑石 6 g 乾地黄 6 g 烏薬 3 g 防風 4 g 以上一日分、水煎服用。十日分。

一時、急速に改善した。腹満も消失した。ところが一週間目、突然就寝中に手掌がカッカと熱くなり、元に戻ってしまった。舌を診る。舌が赤い。しかも今回、新しく舌の表面に乳頭の剥げた所が出来ている。内熱があるのに、温性の防風で乾かしたのが乳頭の剥げる原因かも知れない。まだ清熱も補陰も不足である。防風を去り麦門冬を加える。百合と滑石は増量する。

【処方】 百合 15 g 滑石 9 g 乾地黄 6 g 麦門冬 6 g 烏薬 3 g 以上一日分、水煎服用。十日分。

再び発赤も水疱も急速に改善し、今度は手掌の煩熱発作も起きなかった。その内、手掌の汗も出なくなり、手掌は乾燥した。六ヶ月で完治した。

焦樹徳先生の用薬心得十講という本に、百合と烏薬二味の処方が載っている。二味で虚実併見、寒熱夾雑の胃痛を治すという。私の烏薬の加味は、これを参考に行っている。

〔文献摘録〕

【七情病弁治】 譚開清著（中国医薬科技出版）

○善怒証。寸脈の大を見て、百合剤を与え、怒り狂って止まぬ肝火上犯心肺証を治す。

三十歳の婦人。一ヶ月来、誰彼なく罵り、人に噛みつこうとしたり、暴れ回るので、やむなく鉄の鎖で繋いでいる。繋がれた彼女の怒りは収まらず「私は狂っていない！人を一ヶ月も鎖に繋いで、私は徹底的に彼女らと戦うぞ！」と叫んで怒り狂う。

諸医は皆狂癲として治療しようとしたが、一向に効果が無い。著者は「脈が弦数で、両寸が独り大であるから、怒が鬱して肝を傷り、肝火が上って心と肺を犯した者。」として治療に成功した。

【処方】 百合 60 g 烏薬 18 g 蓮蓬（蓮の花托） 6 枚。

（注）ただ腹が立ちやすくなっただけで、精神に異常を来していた訳ではなかったと

いう事である。

百合と烏薬は肝鬱を舒べて心肺を潤し、蓮の花托は寧心肅肺の効がある。

アトピー

半夏は氣逆を治す。

米田健太郎君。十五歳。小学生の頃からアトピーだった。肘や膝の関節の屈側、頸部、顔面にアトピーがある。暖まると痒みが増す。顔の発赤が強い。アトピーのない部分も、全身の皮膚が乾燥している。アトピーに特有の浅黒い皮膚である。小さい時はよく気管支炎になった。汗は多くない。

舌を診る。潤っている。色は正常。苔はない。舌は薄くて広い。薄いのは虚かも知れない。

脈を診る。脈拍は一分間に八十八。速い。軟大数にして短有力。寸は緩。関と尺は軟大。人迎も氣口も浮軟大である。

脈数は熱。発赤も熱。但し熱の由来が分からない。顔の赤いのは陰虚内熱の人に多い。取りあえず、軟数を虚として、肝腎の滋陰清熱路線を採用する。顔に効きそうな玄参に乾地黄、麦門冬、亀板、牡蠣、丹参、牡丹皮などを配して一ヶ月余り試みた。しかし効果がなかった。

再度、健太郎君に面会する。顔が真っ赤である。

「午前とか午後のかで、痒さに違いが有りますか？」

「なんて言うか、急にワーッと、凄い痒みがあるんです。」

「その時、どうするんですか？」

「冷蔵庫から冷やす物を取って来て、冷やします。」

舌尖が赤い。舌の両辺も赤い。以前には無かった事である。滋陰清熱して、かえって熱が増えている。

脈は軟大数。脈拍は一分間に九十二。前より速くなっている。両寸の脈も以前より大きい。

陰虚の寸大は滋陰すれば縮小する。ところが逆に寸脈は拡大した。肝腎の滋陰清熱は要らぬお節介という訳である。寸は身体の上部である。寸が拡大すれば、頸から上に供給される血量が増大して、顔が熱くなり顔面のアトピーは悪化する。

見方を変え、肝腎陰虚内熱としていたのを肺胃実熱とする。考えられる薬物は石膏、麦門冬、??根、枳実、黄?、甘草、柴胡、芍薬、大黄等である。脈が滑なら石膏。脈が?なら麦門冬。脈が緊なら枳実。脈が数なら黄?。脈が弦なら柴胡。脈が緩なら芍薬。脈が実なら大黄である。

健太郎君には弦、緊、実が無く、軟、大、数が有る。石膏はどうか。石膏の脈は滑である。しかし滑も邪気が弱まれば緩になり、虚が加われば軟になる。軟大にスピード（数）が加わると、いくらか滑に近く感じられる。健太郎君の脈の軟大数を石膏の脈とする。

健太郎君は突発的に顔が赤くなる。これを気逆と考え、気が逆上するのを降ろして、面熱を治す事が出来る。石膏、麦門冬、半夏は気逆を治すトリオである。

処方竹葉石膏湯から粳米と人参を去り、連翹、知母を加える。

【処方】石膏10 g 竹葉6 g 半夏6 g 麦門冬6 g 知母6 g 連翹6 g 甘草3 g
以上一日分、水煎服用。

初めの内、一日に何度か激しい痒み発作が起き、効果は明瞭でなかった。ただ脈拍が落ちてくるので続服した。三ヶ月目、やっと症状が安定。全身の乾燥した肌が潤って、急性の憎悪も稀になった。ある時、アトピーに半夏は必要ないだろうと、半夏を去って石膏を二十グラムに増量した。ところが三日目に母親が飛んできて、急に顔のアトピーが悪化し、以前にも増して顔が赤くなるという。あわてて半夏を戻して事なきを得た。古人の言う「半夏は気逆を治す。」という事を改めて認識する事になった。

半夏を戻して半年。発赤や丘疹は消失した。皮膚のガサガサもない。しかし顔が赤い。面熱を治す薬物を探す。小麦、百合、地骨皮、金銀花、黄連、烏梅、黄芩、菊花と順に加味したが、すべて無効であった。石膏を倍量にしても変わらなかった面熱である。闇雲に清熱しても効果がない。

健太郎君の面熱には、起こり醒めが有る。常にも赤い顔が、発作的に真っ赤になる。起こり醒めとは寒熱往来である。白芍を加えてみよう。芍薬は榮衛を和して寒熱往来を治す。表に余っている気と熱を内側へ引き戻す。

白芍を加えると、面熱は明瞭に減少した。まだ肘関節の屈側にアトピーが残る。屈側は陰である。陰虚が存在する。これに玄参を加えて滋陰清熱する。玄参も加えて、面熱は更に良くなった。

処方竹葉石膏湯から粳米と人参を去って、白芍、玄参、連翹、知母を加えた形である。

【処方】石膏10 g 麦冬6 g 半夏6 g 知母6 g 竹葉6 g 玄参6 g 白芍6 g 連翹6 g 生甘草2 g
以上一日分。

皮膚は随分良くなった。脈は数が取れ緩になった。顔は赤くない。発作的に赤くなる事もない。しかし、少々痒い。時々引っ掻きキズが出来る。両寸の脈が大きい。まだ上の方に火が残っている。完治には日数が必要だ。

気虚血？

沙耶ちゃんのお母さん、若いのに神経痛？

沙耶ちゃんのお母さん。四十才。痩せている。百六十センチ。四十二キロ。食べても肥れない。

痩せてるのは、ともかく足腰がダメになった。腰から下が痺れて痛い。

「痺れてるのは、両方？」

「右の方が、ひどい気がしますけど、両方です。」

「歩けますか？」

「平地はね。だけど、階段が降りらんないです。脚が吊っちゃってて。」

「痛みは？」

「階段、降りようとしたら痛いですよ。それと夜中ですね。」

「痛くて目が覚める？」

「そう、だから座薬入れて寝る。入れてないと痛みでウトウトして、寝にくい。」

夜間、痛みが増劇するのは寒か?血である。痺れは浮腫のある人に多いからと、脚を押さえてみたが、浮腫はなかった。

舌を診る。やや暗色だが正常に近い。大きさも形も普通である。乾燥した白苔がある。

脈を診る。脈が弱い。わずかに弦を帯びるが、寸から尺まで細澁無力である。人迎気口も左右とも浮いて細澁無力。人迎気口俱に小は虚である。脈拍は一分間に八十八。数である。しかし一息は五動。古人の言う数脈には当たらない。熱ではない。

細澁無力の脈は気血虚である。澁は血少、血枯、?血、湿邪、気虚である。数を熱とせず燥とする。数澁は血枯?血とする。

気血が枯れ果て、燥を生じ数脈になった。乾燥した白苔も燥である。燥は血を乾かし血燥になって?血を生じている。気血両虚から始まった?血である。

「冷えますか？」

「元は、冷え性じゃなかったんだけど、子供生むたびに冷え性になって。」

「月経痛は？」

「無いですね。」

「経血の色が、黒っぽいとか？」

「それも無いです。」

「汗は多いですか？」

「かなり多いですね。ちょっと動くと全身ビッショリで。」

「肩は凝りますか？」

「脚が痺れるようになってから、肩も凝るようになった気がするんです。」

多汗は気虚である。外の気が不足して筋肉は硬くなり、血流も悪いから肩が凝る。若い頃は冷えなかったのに、出産の度に冷え性になったのは、出産毎に?血が形成されたからである。男性でも中年以降になって、手足が冷たくなったと言う人は?血である。夜間に痛みが増劇するのは、寝ている間は血流が緩慢になり、?血を増すからである。気を補い血を増し、?血を逐う処方が必要である。

処方は補陽還五湯に牛膝と鶏血藤を加える。鶏血藤は補虚止痛。血虚の痛みに効く。牛膝は筋骨を壮健にする。大量の黄耆は気を補う。当帰と川?は補血行血する。桃、紅、地竜、赤芍は燥と?血治す。

【処方】黄耆20 g 当帰5 g 赤芍5 g 川?3 g 桃仁3 g 紅花3 g 地竜3 g 牛膝3 g 鷄血藤5 g

以上一日分、水煎服用。七日分。

七日間で相当な効果が有り、座薬は必要なくなった。一ヶ月で完治した。

張錫純先生治喘一方

言われたら言い返す短気者、夜は喘息に苦しむ。

Tさん。スーパー経営。自ら「職業は青果業。」と言う。几帳面な性格。キリッとした目鼻立ち。軽い身のこなし。重い野菜の籠をヒョイと持ち上げる頼もしさ。ただ気が短い。店先でも客とけんかになる。言われたら言い返す。トコトンやっつける。ところが、毎晩喘息発作に悩まされている。

「発作の時、息を吸うのと吐くのと、どちらが難しいですか？」

「吸う方だろうな。」

「医者には掛かってますか？」

「去年は掛かってたが、点滴したり薬飲んだりしても、全然、効き目が無かったから止めた。」

「発作が始まったら、どうしてますか？」

「寝ては居られないから、座ったり歩き回ったりだな。」

息が吸えない。ヒーヒーという音に混じってコンコンと咳が出る。痰が絡むと言うが、痰量は多くない。発作は毎晩。始まると四時間ばかり続く。何故か缶コーヒーを一日五六本も飲む。その為か小便の回数が多い。一日十回以上。大便も一日三回ある。夜間の排尿はない。汗は少ない。発作中も汗は出ない。足は冷たくない。肩こりがひどい。

舌は潤って小さめ。苔はなく色が薄い。舌の両辺に二本の紫条がある。?血だろうか。淡色で潤った舌は熱証や陰虚ではない。無苔であるから、外感の湿邪や風邪とも考えにくい。

脈は弦緊にして長。寸微尺弦の形で、寸から尺まで弓の弦の様に張っている。但し強く按じると弱くなるから実脈ではない。人迎気口も浮弦緊で左右差はない。一分間の脈拍は八十。一息六動である。

弦緊にして長の脈から鎮肝熄風湯を連想した。しかし、これは喘息の処方ではない。そこで哀中参西録から参赭鎮気湯という処方を探し出した。代赭石が入っている。方中の?実は在庫してないので省く。

【処方】代赭石末6 g 人參3 g 山藥5 g 山茱萸5 g 竜骨6 g 牡蛎6 g 白芍5 g 紫蘇子3 g

以上一日分、水煎服用。一週間分。

?実は早速手当する。次の来局までに哀中参西録を見て、他に喘息の処方がないか探す。ひとつしか処方を知らないでは、次の手が打てない。張錫純先生は肝腎に係わる喘息を三つのタイプに分けて論じていて、代赭石の入った処方が四つ見つかった。

Tさん来局。毎日だった発作が三日に一度になった。有効である。更に一週間後。今度は奥さんが来局。発作は三日に一度。肩が全然凝らなくなった。缶コーヒーも飲まない。しかし、発作はTさんの几帳面な性格そのままに、キッチリ三日おきである。張先生の3タイプと四処方を検討して「暴怒が肝気を動じ云々」という処方を参考に?実、人参、山薬、山茱萸、竜骨、牡蛎を除いて、川楝子、厚朴、半夏を加える。

【処方】代赭石 6 g 白芍 6 g 半夏 6 g 厚朴 4 g 川楝子 3 g 紫蘇子 3 g 甘草 3 g
以上一日分、水煎服用。二週間分。

奥さん来局。Tさんは「同じ調合で良い。」と言ってるらしいが、発作はやはり三日毎。しかも口渇が復活して、缶コーヒーを何本も飲んでいいる。肩凝りもひどい。おまけに夜間に三回もトイレに起きている。腎虚である。もとは夜間尿はなかったのだから、虚実を誤ったに違いない。

口乾多飲は肺の陰虚かも知れない。それなら山薬を戻す必要がある。山薬は脾肺の陰を補う。補薬の必要な人は虚証である。それなら山茱萸も必要である。山茱萸は肝気を収斂して補腎補肝する。竜骨と牡蛎は必要だろうか。張先生は発作時に汗の多い者に竜牡を加える。しかしTさんの汗は多くない。竜牡二味は柴胡に代わって平肝解鬱するとも聞くが、解鬱は必要ない。嫌な事を言われて言い返せないのが肝鬱で、トコトン言い返すTさんは肝鬱ではない。川楝子も肝鬱の薬だから必要ない。確かに肝気に問題があるが、Tさんは肝気旺盛ではなく肝気虚である。言い返しすぎて肝気は既に消耗している。言わずに我慢するという力がなくなっている。山茱萸が肝を補う。

小便が一日十回、大便も一日三回。甘草瀉心湯の頻尿多汗下痢に似る。甘草は補心して気が外脱するのを止めるが、ここでは山茱萸が元気外脱を収斂し補心する。参赭鎮気湯から竜骨牡蛎を去った処方にする。?実も間に合った。?実は山薬に似るが、?実は脾腎に入り肺に及ばず、山薬は脾肺に入り腎に及ばずと言う。?実は補腎して吸うのが苦しい喘息に効く。

【処方】代赭石 6 g 白芍 6 g 山茱萸 6 g 山薬 6 g ?実 6 g 紫蘇子 3 g 人参 3 g
以上一日分、水煎服用。二週間分。

数ヶ月後、Tさん夫婦が中学生の男の子を連れて来た。孫が鼻づまりだから、薬を作ってくれと言う。喘息は?と尋ねると「治った。うん、完治じゃな。」と言った。もう何ヶ月も発作は経験してない。

夏枯草

耗陰耗気、目を損じて、なお肝火は消えず。

三上伸子さん。六十五歳。緑内障。来週までに眼圧を下げて欲しいと言う。

「去年、夜中に急に顔が痛み出して、この頬の所ですが、その痛みがまたひどいのです。それで入院して、暮れに眼圧の下がる手術をしました。欠かさず通院はしておったのですが、先生が言われますには、また眼圧が上がっているから、来週また検査して下がってない時は入院して頂きますというのです。」

「目は元々弱いのです。去年十月には右目の白内障の手術。左目は網膜剥離で字も見えませず、これも手術しました。近視もひどいのです。」

「ほかに悪いところは、ありませんか？」

「十五年ほど前、急に頭痛がして、吐いて吐いて止まりませんでした。診て貰いましたら、血圧が二百もありまして。血圧も、なかなか合う薬に出合いません、数年苦勞して、やっと見つけて頂きました。そのお薬は、今も欠かさず飲んでおります。」

「大変でしたね。御苦勞が多かった様ですね。」

「えーえ、苦勞は、しほうだいしました。戦争中は、お百姓なんかしたことのない者が、朝早くから、一日野良で働いて、あれで身体が弱りました。戦後も食べて行くのに、朝は朝星、夜は夜星、お星さん頭に戴いて働き通しました。もう身体も限界で、買い物に行ってもレジで立って待つ間が辛いです。」

三上さん。痩せている。日に焼けたのか、黒いと言うより顔も手もガサガサである。工場に勤めているというが、仕事場は戸外ではないだろうか。すっかり体が枯れて魚の干物みたいになっている。よほど苦勞した人に見える。

小さく痩せた身体と黒く艶の無いガサガサした皮膚を見ると、火の存在を感じる。火が皮膚を灼いて燥かしている。

舌を診る。痩せて幅の狭い舌である。後の半分に白苔がある。乾燥している。舌色は濃い紫色。痩せた舌は舌の栄養不良である。腎の精というものが枯れると、無苔で暗紫色の舌になると聞く。しかし白苔がある。陰虚が甚だしくても、白苔があつては、滋陰ばかりするわけには行かない。

脈を診る。細く甚だしく無力な脈である。軽く触れれば弦だが、やや重くすれば消失する。細の中に緩が無く、ただ細微弦である。浮沈が交代して現れ、強くなったり弱くなったり、脈が一定しない。脈拍は一分間に六十。遅い。

寸は左右では左の心の脈が大きい。腎虚かも知れない。関は左が小さい。肝虚である。両尺に左右差はない。人迎気口では気口が浮いて大きい。内傷である。左関の肝脈も小だから肝血虚である。脈の微弦とは甚だしい虚の中で、なお肝が独り働いていると取れる。崩れてしまいそうなのを、時々肝が気合を入れ直して、やっと持たせている。しかし精神力も肝気も、今や尽きようとしている。

働けば筋を勞す。筋は肝である。休息もままならず、限界も超えて働けば、肝が疲弊する。肝血が消耗すれば肝の陰が不足し、相対的に肝の陽は盛んになり、ついには火を発生する。火は血と陰とを消費して大きくなり、更には気さえ食べてしまう。

十数年前、限界から、なお休まず働き、肝血肝陰を損じ、陰虚から肝の陽亢になり、嘔吐、頭痛、血圧上昇の発作になった。何とか症状だけは収めたが、陰と血の消耗は止まず、近年は次々と目の障害が発生している。目は肝である。補肝と瀉火を同時に進める必要がある。

交代する脈は気滞である。三上さんは恐らく肝鬱気滞である。しかし今は極虚であり、柴胡剤などは論外である。わずかでも元気を奪ったりしないよう、ひたすら補って火を瀉す方針でなければならない。

方輿?に夏枯草湯という処方がある。夏枯草と甘草の二味の処方で「目のかすむもの、目の見えのうすいと言う者に用いて効あり。」という。地黄の行くような所へ夏枯草が効くとも書いてある。地黄が行く所とは、目が炎症したり痛んだり爛れたりする眼病ではなく、肝腎の虚の目の病気という事だろう。

処方を組み立てる。夏枯草で平肝解鬱し肝火を瀉す。枸杞子で肝を補う。菊花を配し瀉火を助け、天麻を配し補肝を助ける。目に菊花と枸杞子。頭痛と高血圧に天麻と夏枯草。

【処方】夏枯草15 g 枸杞子9 g 杭菊花5 g 天麻3 g 以上一日分、水煎服用。七日分。

一週間後。びっくりしたような顔で「お医者さんに眼圧が、14 に下がっているから、入院せんでもよろしい、と言われました。」と言う。私もほっとした。脈は太さを増し、大小交代がなくなり、弦がとれて浮緩になっている。左尺の無力が目立つ。腎虚である。しかし補腎を急いではならない。まだ肝火がある。舌の白苔は清熱して消えた。しかし舌色が暗い。当帰、川?、白芍を加え補肝行血する。

【処方】夏枯草15 g 枸杞子9 g 菊花5 g 天麻3 g 当帰5 g 白芍5 g 川?5 g
以上一日分、水煎服用。二週間分。

二週間後。医者が「眼圧が9になりましたから、今日から眼圧を下げる薬は止めます。」と言った。数ヶ月服用して完治した。眼科医が視力まで改善するとは思わなかったと言った。

血風瘡

搔破するも、滲水は多からず、返って出血。

大川喜代美さん。四十七歳。手にも脚にも、大きな暗紫色の丘疹がたくさんある。初めは小さいが、その頃が最も痒く、掻いている内に大きな丘疹になる。手の甲と顔以外なら何処にでも出来る。丘疹の頭はすべて搔き破られて、火山の噴火口のように、どれも大きく赤い口を開けている。滲出液も出て来て固まったはずだが、常に掻いて手が当たるので、ほとんど残っていない。脚だけで二十個ほどあるが、散在して互いに融合しない。手足では外側に集中している。

「夕方から夜にかけて、痒みがひどくなります。そんなに掻き壊してバイ菌でも入ったらどうするのって言われますけど、どうしても掻いてしまっ。」

「お風呂は、どうですか？」

「お風呂は、痒くなります。」

「お風呂に入っている時、既に痒いですか？それとも、出た後で痒くなりますか？」

「お湯に浸かっていると、たまらなく痒いですね。」

入浴中から痒くなるのは湿邪である。アトピーなどは入浴後に痒くなる。丘疹性の湿疹である。丘疹を作るのは風である。だから外に偏って分布する。丘疹が大きいのは熱盛である。丘疹が暗紫色なのは血である。夜間に痒みが増すのは血熱である。熱が主で湿は従とする。

脈は寸微尺大。全体にやや沈んで有力である。寸微であるから陰虚ではない。脈の浮沈は人迎氣口を診て決めるが、この人の人迎脈は浮位でも沈位でも脈が強く、浮沈いずれとも決め難い。即ち人迎は浮べて弦堅、沈めて洪有力である。人迎氣口に左右差はない。氣口は浮弦である。

この人迎の弦堅洪は表面だけ堅い外堅内柔の脈である。人迎は外であるから、人迎の堅とは外が堅い、即ち皮膚が堅いと言う意味である。人迎の洪は湿である。湿邪が表にあると皮膚は堅くなる。

舌は色が薄く蜜柑色。血虚である。潤って苔は少なく正常に近い。ほとんど邪氣の影響は見られない。

湿疹のうちで、丘疹の目立つタイプを血風瘡というらしい。血風瘡の諸方の中から朱仁康先生の皮癬湯加減を選ぶ。この処方は血熱が主で湿が少ない状況に適している。地黄、牡丹皮、赤芍で血熱をさます。苦参、白鮮皮、地膚子、黄耆で湿熱を去る。丹参、牡丹皮、赤芍で暗紫色の丘疹の血を逐う。

【処方】 乾地黄 6 g 牡丹皮 4 g 赤芍 5 g 苦参 3 g 地膚子 6 g 白鮮皮 6 g 丹参 6 g 黄耆 4 g 生甘草 3 g

以上一日分、水煎服用。二週間分。

新しく出るのが少なくなり、既に在るものも高さが低くなった。手で触ったりしなければ、たまらなく痒くなる事もない。数ヶ月で完治した。

朱仁康先生は湿疹を特定の場所に出るものと全身的なものに分ける。更に、全身に出るタイプを浸淫瘡と血風瘡に分ける。その内の血風蒼が丘疹性湿疹に相当する。熱が主で湿が従である。

湿疹は心火が血熱を生み、血熱と脾湿が結合して出来る。熱は風を生じる。風は丘疹を作る。丘疹性湿疹は、湿と熱に風邪も加わって成立する。治法は涼血消風を主に、兼ねて除湿清熱を行う。

正気天香湯

気のせいだから、あわてず騒がず、医者へも行かず。

「胸が痛むんです。グーッと、こう押しつけられた感じで。」

「心電図なんか、取って見ました？」

「いや、私は医者が苦手です。まあ行ってみても、恐らく大した事は無いと思います。」

「そうなんですか？」

「ええ、神経的な事だと思うんで。実は会社のね、上の方の人が廻って来ると、胸へ来るんで、それ以外の時の時は、立ってられない程じゃあないですから。」

「ひどいときは、立ってられなくなるんですか？」

「ええ、そうです。」

「しゃがみ込んでしまうとか？」

「いや、ホントには坐りません。そうなりそうと言うぐらいで。」

斉藤洋介さん。工場の現場責任者。夜勤の疲労か顔色は薄黒く艶がない。胸の真ん中が詰まった感じで痛む。軽いものも含めて週に一二度。時間は十秒から数分。一度だけ長く続いた時に吐き気がした。

舌を診る。舌は暗色で白苔が少し有る。潤っている。

脈を診る。脈拍は一分間に六十。遅い。寸は微。関と尺は弦大。人迎気口は沈大。左右に差がなくて、外感内傷いずれとも判らないが、人迎の沈大は裏寒、気口の沈大は実である。そこで気口の沈大を気の実、気滞とする。即ち人迎気口沈大は裏寒気滞である。潤った暗色の舌も裏寒気滞とすれば矛盾しない。

不安感がない。だからノイローゼではない。不安でないから医者にも行かないし、憂鬱な雰囲気もない。正気天香湯はどうだろう。古人が「諸の気によって痛を作す者」を治すと言っている。なかでも心痛に多く用いている。

正気天香湯は内容が香蘇散に近い。香蘇散は気分の憂鬱な人に用いる。しかし正気天香湯は鬱も不安も焦燥も目標にしない。むしろ身体症状を訴える者に用いる。正気天香湯の気滞が患者の性格に反映する時、思考と感情に一定の枠をはめた「とても常識的な人」になる。正気天香湯を作る。

【処方】 香附子 9 g 烏薬 3 g 陳皮 3 g 紫蘇葉 3 g 乾姜 2 g 炙甘草 2 g 以上一日分、水煎服用。二週間分。

発作の回数は変わらなかった。しかし本人が「いや、大分、楽なんですよ。」というので、同じ処方続けると、胸の痛みは起きなくなった。後はエライさんの訪問を待つばかりである。気にして、来局のたびに確かめたが、なかなか機会が来なかった。しかし、ある日それは突然にやって来て、そして何事もなく済んでしまった。

数年後、大阪へ転勤。仕事の内容も変った。しばらく服用してなかったが、用心して薬も持っていった。ある日、電話があった。

「どうもまた、胸の痛いのが出ましてね。あの煎じ薬、送って頂けませんか。」

「今度は飲んでるのに、治らないという事ですか？」

「ええ、でもいいです。もう少し飲んでみますから。送って下さい。」

「いや、手は色々有ります。調合の割合を変えるとか、薬を追加するとかね。」

浅井貞庵の方彙口訣には「心痛には延胡策を加えて、正天五味と称す。」とある。延胡策を加えて止痛作用を増強する事は当然考えられる。しかし斉藤さん程度の症状でも、昔の人は心痛と言ったかどうか。それに以前から気になっている事がある。実は正気天香湯には甘草の有るのと無いのがあって、当然、甘草の有る方が香蘇散に近く、乾姜と烏薬を去って生姜を加えれば香蘇散になる。

何故、甘草の無い正気天香湯が有るのか。香蘇散も気滞の処方である。しかし香蘇散は感冒にも使われる。その時は香蘇散も桂枝湯と同じく表で働く。それなら気滞に使う時も香蘇散は表の近くで働くに違いない。正気天香湯の気滞は、もう少し深いところに在る。乾姜は気ばかりでなく、血にも作用する。甘草は桂枝湯の中の甘草と同じく、気を外方向へ張りだす役割である。正気天香湯から甘草を去ると、処方の働く方向は、更に内向きになる。即ち、もっと深いところから気を動かす。また甘草の補気は気滞には不利な面もある。

悪い癖である。そう思うと、それを試したくなって、遂に甘草の無い正気天香湯を大阪へ送った。

【処方】 香附子 9 g 烏薬 3 g 陳皮 3 g 紫蘇葉 3 g 乾姜 2 g 以上一日分。水煎服用。
二週間分。

「すみません。また、煎じ薬を送って下さい。」

「斉藤さん。今度のと以前のと、どちらが良いですか？ あまり変わりませんか？」

「新しく作って頂いた方をお願いします。今度のは効き目がシャープです。前のは治つてるとは言いましたが、何となく、おかしい気がしないでも無かったんです。」

宮仕え

もう良い。疲れた。どうでも良い。みんな面倒だ。

昔、私の家は女子校の寮に取り巻かれた恰好で建っていた。そんなわけで、私はたくさんの綺麗なお姉さん達に囲まれて育った。某日、昔のお姉さんの一人から電話。

「あのね、私じゃなくて、私の甥なのよ。」

「うん。」

「公務員でね、それが仕事が大変で、ちょっと変なのよ。」

「ふーん。」

「一度そちらに行ってもらいますから、話、聞いてやって下さる？」

「うん。いいよ。何歳？」

「私？」

「違うよ。その甥。」

「あなたと同じ年。」

私と同じ年で、公務員の甥っ子来局。

「鬱じゃないかと、思うんです。」

「そうですか。いつ頃から、調子悪いですか？」

「二ヶ月くらい前から、ですかねえ。」

「だるいんですか？」

「と言うより、何も考えられないんです。」

彼の訴える症状。面白くない。落ち込む。自分が悪いと思う。何も考えられない。根気がない。意欲が湧かない。感情の起伏が無くなった。腹も立たない。考えが頭に入っていない。

これだけ鬱の症状が綺麗に揃って出れば、鬱は間違いない。本人だって知っている。しかし、ただ何となくだが、よく見る躁鬱病の鬱とか、ヒステリーやノイローゼの鬱、更年期の鬱と何処か感じが違う。

「鬱の原因は大抵は、過労ですけど。お仕事が大変なんですか？」

「実は、上役と合わなくて。」

「性格が？」

「そう。何せ細かいんです。絶対これで良いとは言わないんです。細かく細かく見て、ケチを付ける所を探して、ケチを付けてやり直させるんです。」

「大変ですね。」

「うちの課で仕事してるのは、私ともう一人位なんです。それで仕事するとケチが付いて、仕事が増えるんですが、やらない人は、何にも言われないんですよ。もう良いって感じだね。疲れて。」

上役。細かい上に肯定的な評価には無縁。部下の努力も工夫も認めない。実は、小さな事にケチを付け、プラン全体への判断を避けている節がある。大筋での論争を避け、小さな部分にケチを付けることで、仕事をした気になっている。お陰で仕上がった仕事はすっかり「お役所仕事」に成り果てる。

舌を診る。狭い形の薄い舌である。狭い形の舌は、堅く締まって充実したものが多いが、この人のは違う。充実していない。虚の舌である。痩せて薄く小さくなっている。消耗である。

脈を診る。人迎氣口が俱に沈濡。寸は浮緩。関と尺は弦虚洪。脈拍は一分間に七十六。人迎氣口の沈濡。氣口の浮は虚とするから、氣口の沈は氣の実、即ち氣滯とする。人迎の沈は寒邪か湿邪である。ここは沈濡であるから湿邪とする。濡は湿である。氣滯が長引き、皮膚表面の氣の流れが悪く、外に湿が滞留した。

体調は悪くない。肩凝りも頭痛も冷えもなく、睡眠大小便にも異常がなく、食欲もあり、風邪も引かない。彼の体質や個性には問題がない。

病はまだ外にある。香蘇散で一気に気滞を払えば、外の湿も一緒に吹き飛ばしてしまうだろう。

【処方】香附子 8 g 紫蘇葉 4 g 陳皮 4 g 炙甘草 g 生姜 1 g 以上一日分。水煎服用。七分。

一ヶ月後。「あの煎じ薬で、すっかり治ってたんです。でも、またこの頃。」香蘇散では、環境までは変えられない。

癩症眼

正面より周りが見え過ぎて。

唐崎史子さん。五十一才。三十年来、眼の症状に悩んでいる。

「眼が疲れて、いけないんです。」

「見えにくいですか？」

「いいえ。眼は良く見えるっていうか、見え過ぎて。」

「見え過ぎ？ 眼科で診てもらいましたか？」

「はい。何処の眼科でも、眼は悪くないとおっしゃって、最後に訪ねた先生には、うちは目が見えない人が来る所で、見え過ぎるんなら上等だ！ って、叱られて。」

「なるほど。」

「真っ直ぐよりも周囲の方が良く見えて、疲れるんです。」

眼の病気ではなさそうだ。前方の物を見るのは問題ない。左右とか上下が見え過ぎて疲れる。症状は三十年ずっと緩急なく続いていて、季節や時間、体調、心理的变化があっても左右されない。

不合理である。しかし、それは言わない方が良いと思った。下手に追求すると、それは症状の実在を否定することになる。有るものは有るのだ。大切なのは彼女がそれを訴えている事である。

色々尋ねるが、彼女の受け答えは普通である。家庭でも良い母、良い妻であるに違いない。眼さえ治れば良いのだ。不安を取り除いてほしい等とは、少しも思っていない。

変と言えば、彼女が目の症状を心理的な物だとは考えていない事である。ひょっとすると、彼女は自身の心の眼にマスキングを掛けて、真実に気づかないようにしているのかも知れない。

舌を診る。舌は淡紅色。やや狭い形。白苔が少しある。熱はない。虚とも見えない。

脈は特徴がある。人迎氣口が俱に沈大。脈拍は一分間に六十四。遅い。両寸は浮緩。関尺は弦大有力。

脈の遅も人迎の沈も寒である。氣口の沈大は氣滯である。

正氣天香湯は使えないだろうか。正氣天香湯は裏寒氣滯の心痛を主治する処方である。

「心臓が悪いんじゃないかって、思ったことは有りませんか？ 胸が痛いとか。」

「あります。年に三回か四回、胸に刺し込みます。病院では心配ないと言われますけど、本当に狭心症かと思いますよね。」

「痛みは、胸の真ん中ですか？」

「はい。」

「痛んでる時間は？」

「三分間くらいです。苦しくて、うずくまってしまいます。」

他にも正氣天香湯らしい所がある。彼女は妊娠中の全期間、ずっと口の中に唾液がたくさん出て止まらなかった。胃寒の溜飲症かも知れない。正氣天香湯には乾姜がある。乾姜は胃中を暖め溜飲を去る。

耳鳴りが有る。古人は正氣天香湯証には、耳鳴りやメマイや頭痛を伴っていることが多いと言う。三十年、症状を気にしながら、焦らず減入らず、不安も覚えず、緩急なく症状を保ち続ける。これも氣滯のなせる技に違いない。先ずは正氣天香湯。

【処方】 香附子 9 g 烏薬 3 g 陳皮 3 g 紫蘇葉 3 g 乾姜 2 g 炙甘草 2 g 以上一日分、水煎服用。十日分。

十日後。唐崎さん来局。

「如何ですか？ 眼の様子は？」

「眼は、良くなりました。」

「眼の前方向と、周囲の見え方に差がありますか？」

「いいえ。治りました。」

三十年続いたと言うのに、わずか十日の服薬で消失した。しばらくすると、狭心症も起きなくなった。しかし、彼女の性格や体質がすっかり変わった訳ではない。今も正氣天香湯加減を使っている。二陳湯を合方した古人の言う正天二陳や更に平胃散も合わせた天二平などである。

江戸時代の名医、北尾春甫が心虚痰鬱と名付ける一類の病がある。癩症の未だ癩を発していないもので、後には本当に癩を発し、意識を失うようになるという。治法は癩症の治法でよいとする。

正氣天香湯も心虚痰鬱症の処方のひとつである。心虚とは恐らく癩症（神経症）であり、痰鬱とは心下に溜飲のある事である。その神経症の原因が心下の溜飲による所から、心虚痰鬱と名付けたものと思われる。正氣天香湯の乾姜は溜飲を去る為の配合である。溜飲の為に更に二陳湯等を合わせる事もある

婦人臀痛

痛いのは腰じゃない。お尻。

K女。六十八才。顔色良く、がっしりした体格。元気そう。勝手に着席。

「何か、お尻に付けるものは、無いかなあ。」

「痔ですか？」

「いや、ここが痛い。お医者様は坐骨神経痛というけど、痛いのは腰じゃない。お尻。」

「そうですか。何か薬が有るでしょう。」

「それって飲む薬？ いやあ飲むのはねえ。付けるので無い？」

「付けた位じゃ無理だろね。漢方薬は飲まないと。」

「漢方！ 漢方は効かんじゃろ。漢方薬はダメじゃ。漢方じゃないので、何か効くの無いかなあ。」

漢方しか無い漢方薬局で、漢方はダメじゃもないものである。しかし、腹を立ててはいけない。こういう人が面白い。K女は初めから、私の店を目指して来ている。ゆっくりお相手つかまつる。

「脚は、痛くないんですか？」

「痛くはないけど、夜中に脚がピーンと突っ張って、寝返りが打てない。」

「お尻は、夜中も痛みますか？」

「痛い。尻全体が痛い。」

「今の時間は、痛くない？」

「そう。朝の十時半が過ぎたら、収まる。」

腰とはウエストの事。それより下は尻という。もともと不眠症気味なのに、尻の痛みでたびたび目が覚める。医者で軽い睡眠剤をもらったが、一錠飲んだら目がさえて眠れず、翌日は目が回った。

冷える。夏でも足が冷たい。水をよく飲む。冬でも冷たい水を飲む。

「この頃、何食べても美味しくない。前にたくさん食べ過ぎたのかも知れん。」

「便秘しますか？」

「便秘の反対。去年は毎日下痢だった。」

「今も下痢？」

「下痢じゃないが、食後食後に行って少しずつ出る。旦那がメジロみたいなヤツじゃ言う。」

「メジロ？ 鳥の？」

「うん。エサ食べる端からフンするから。」

舌を診る。舌は潤っている。淡紅色。舌苔はない。全体に浅くひびが入っている。血虚

だろうか。

脈を診る。両寸は微。関と尺は洪大。脈拍は一分間に八十八。脈が速い。洪は?血である。脈大は体力があるとする。脈数は心煩とする。人迎氣口は俱に沈洪有力。沈は氣滯。有力洪は?血である。

恐怖が存在する。おびえて身体が縮こまれば脈も縮こまって沈む。恐怖から下痢になる。気が伸び伸びしないと、脈氣は滯って氣血が流行せず、脈は洪って?血になる。夏に足が冷え、冬に冷たい水を飲むのも?血である。

「要するに、血の巡りが悪いんだね。」

「そう? それで頭が悪いんだろか?」

「いや、血の流れが悪いから痛むんだよ。寝てる間はジッとしてるから、心臓も静かになって血の流れが少ないでしょ。だから夜中と朝は痛いんです。それが起きて動き始めると、足腰にも血が流れて、十時半には痛みも収まるという理屈だね。」

「そんな話、聞いた事ないが、そうかもしれん。」

「これだけ元気で体力もある人が、夏でも足が冷えるって、おかしいでしょ。痩せて貧血で低血圧で、なんて人じゃないんだから。」

症状だけなら疎経活血湯である。しかし、?血と氣滯にヒステリーが加わる。ヒステリーには?帰調血飲が良い。?帰調血飲とその加減方の脈は人迎氣口沈洪大である。

【処方】当帰 2 g 川? 2 g 白朮 2 g 茯苓 2 g 陳皮 2 g 烏薬 2 g 香附子 2 g 牡丹皮 2 g 益母草 2 g 赤芍 2 g 乾地黄 2 g 桃仁 2 g 紅花 2 g 桂皮 2 g 牛膝 2 g 枳実 2 g 木香 2 g 延胡索 2 g 大棗 2 g 乾姜 1.5 g 甘草 1 g 以上一日分、水煎服用。七分。

腰痛は一ヶ月で治った。続けて服用すると足も温まり、よく眠れるようになり、下痢もしなくなった。

?血泄瀉

脈は沈洪有力。下痢止まず。

藤村尚子さん。五十歳。肉付きがよく元気そうに見える。やや肥胖。色白。

「この一ヶ月ほど、下痢が止まらなくて、何も食べられないんです。」

「食べると、良くない?」

「ええ、食べたいんですけど、食べるとすぐお腹が痛くなって、下痢します。三度食べれば、三度下痢です。お茶呑んでも下るんです。食べさえしなければ下痢はしないんです。」

「原因として、何か思い当たる事がありますか?」

「今度のは柿を食べてからですけど、もともと下痢しやすく、中学の頃から乳製品とかラーメンで下痢、外食しても下痢、出かけようとすると下痢。だから神経性だって主人

に言われるんですけどね。」

色白肥胖は痰である。痰の人は妙に潔癖だったり小心で、それがストレスになって奇妙な病気を生み出す。胃中の留飲の動揺で失神したりもする。この人も鏡で自分の眼の中の出血を見て失神したことがあるという。

舌を診る。痰の舌ではない。血の気のない淡紫色の舌である。?血が有る。舌は締まりなくブヨブヨしてクタクタになっている。?血が血の流れを阻害して舌を栄養不良にしている。薄い膩白苔がある。

脈を診る。寸脈以外は関も尺も沈洪有力。人迎も気口も沈洪有力。洪有力は?血である。関の左右は等しいが、寸は右が左より大きいから、恐らく血虚もある。

体質は痰だが下痢は?血に由来する。?土澄先生の臨証用薬経験という本に脾臓に?血が形成されると慢性の下痢になるとある。処方は膈下逐?湯である。処方中の五霊脂は下痢を止める働きもする。

【処方】五霊脂4g 川?4g 赤芍4g 烏薬4g 木香3g 当帰3g 桃仁3g 甘草2g 枳殻2g 香附子3g 延胡索2g (原方から牡丹皮を除き木香を加えている。) 以上一日分。水煎服用。十日分。

すっかり良くなって何でも食べていると電話があった。古人は気口の沈を「血が腹臓に凝る。」とする。また朱丹溪は左関の肝脈の沈を「肋下に血癖あり。」とする。此の辺りが症例の沈脈に関係する。臓にそれも肋下の臓に?血がある。つまり膈下逐?湯証である。

?血嘔吐

脈洪有力。薬を吐し食を吐し、常に嘔気して止まず。

田中さんの息子。三十八歳。高校生の頃から「朝が起きられない。」「吐き気がする。」「眠れない。」などと言っては登校拒否、入社拒否を繰り返している。会社も長続きせず、あちこちと随分変わった。以前から、お母さんに相談を受けてはいた。しかし、恐らく御本人が現れることはあるまいと思っていた。

ところが、予想に反しご本人が来局。椅子を勧めて坐ってもらおう。しかし、よほど具合が悪そうだ。

「吐きそうなんですか？」

「ええ。」

「いつも？」

「いえ、特に車の運転をしたりすると、悪いですね。」

車を運転して来たばかりで、吐き気が強いらしい。しばらく収まるのを待って、問診を始める。

「やはり胃の辺りが、気持ち悪いですか？」

「いいえ、胃は何んともないですね。」

「じゃあ、どの辺りが気持ち悪いですか？ 胸とか？」

「うーん、ちょっと難しいですね。」

「どんな事が、吐く原因になりますか？」

「事というより、要は僕の体調しだいで、車も平気な時もあるんです。一日の間でも、来るときは吐きそうでも、帰りは平気とか。」

「吐き気がすると、食べられないんでしょ？」

「いや、それが、食べるんです。お腹は空くので。」

「吐き気を感じつつ、食べてる？」

「まあ、そうなんです。母は、それがおかしいって言うんですけど。」

妙な吐き気だが、ムカムカしている様子は本物である。もっともお母さんによれば、会社を休んでいるくせに「ちょっと、良くなった。」と言って、遊びに出かけたりもすると言う。

彼は高校生の頃から、片時も安定剤が手離せない。何かしようとするときまず安定剤を服用する。あんなに安定剤ばかり飲んでいて、朝起きて仕事に行けるはずがないと言われる。

しかし服用すれば、体調は一時改善する。身長は百七十五センチ。既に中年肥りか体重は八十キロ。色白。

舌を診る。舌は暗紫色。潤って苔はない。?血の疑い濃厚である。

脈を診る。脈拍は一分間に九十六。速い。脈状は数渋有力。人迎も気口も浮渋有力。洪は?血である。洪は左関で最も著しい。肝に?血がある。寸は微である。

しばらく診ていると、脈状が変化する。短い間に弦から滑に、更に細に或いは大にと次々変わる。吐き気も一定の強さで来るわけではないだろう。強く或いは弱く、寄せる波の如くである。吐きそうなのを我慢して、両手を揃えて出している彼の顔色も、赤くなったりさめたりする。これは気持ちの動揺ではない。肉体が動揺している。

脈の変化は気滞である。?血に気滞を兼ねている。膈下逐?湯はどうか。?血の処方だが、気滞に効く香附子や烏薬が入っている。吐き気と膈下という部位は関係が深い。

【処方】 桃仁 4 g 香附子 4 g 紅花 4 g 赤芍 3 g 川? 3 g 当帰 3 g 五霊脂 3 g 烏薬 3 g 牡丹皮 g 延胡索 3 g 枳実 2 g 甘草 1 g 以上水煎服用。七日分。

田中氏来局。少し良い。ムカムカは頻繁だが吐いたのは二度だけ。それも煎じ薬を飲んだ途端に吐いた。脈は弦渋短。脈の変化がなくなり、気滞は解消したと見えるが、弦渋短の短が気になる。脈が短になるのは薬に攻撃されて、やや虚に転じた可能性である。しかし、そのまま続服してもらおう。

しばらくすると吐き気はなくなった。脈は洪も短も消失。舌も紫色が減少。?血が取れつつある。

「実は、胃が悪い訳ではないんですが、口の中にドボッと胃液が出て来るんです。」

「それ、いつから？」

「大した事じゃないから、言わなかったんですが、ずっと以前からです。」

「胃液は、たくさんですか？」

「ええ、けっこう量が多くて、車の中なんかだと始末に困るんです。それと、歯が痛くて。」

「歯？いつ頃から？」

「多分、漢方薬を飲み始めてからだと思います。食べ始めると痛むんです。」

奇妙な症状が二つ。胸焼けや心下の不快はないが、急にドボッと胃液が口の中に出てくる。吐酸である。それに食べ始めると痛む歯。虫歯ではなく、歯茎の腫れなどもない。こちらは漢方が原因らしいから、責任重大である。歯は腎に属するというから、薬が強すぎて腎虚になるのかも知れない。

脈は一分間に六十。前は数脈だったのに遅くなっている。冷えを疑う。舌は暗色。えび茶色で潤っている。?血と冷えである。

隔下逐?湯から寒性の枳実と牡丹皮を去る。確かに歯痛は軽減。ところが、たちまち脈拍が百を越え、更には吐き気まで現れる。数脈は熱である。寒にも熱にも対処する必要がある。

隔下逐?湯にこだわる必要はない。?血の処方は沢山ある。失笑散を湯剤にする。産後の悪露に使う処方だが、これで妊婦の歯痛を治した経験がある。五霊脂は温。蒲黄は平。

【処方】五霊脂10 g 蒲黄10 g 以上一日分、水煎服用。七日分。

歯痛は消失。吐酸も軽減。吐き気もない。脈は遅でも数でもない。

しかし、舌は暗色のままである。?血薬では改善しない。気をめぐらせて、舌の色が良くなる事もある。以前には脈が盛んに交代していたのだから、当然、気滞もある。時々彼は口を閉じて、心下に溜めた息を鼻から短くクッと出す。問診中にも無意識にそれを繰り返している。既に吐き気はないはずだが、心下が塞ると吐き気を誘うので、鼻から息を出し、心下をくつろげ様としている。心下がつまっているのかも知れない。肝気の鬱があるようだ。

川楝子を加え平肝解鬱する。川楝子は柴胡のように胸脇心下を開く。川楝子の性は寒である。寒熱のバランスを取るのに青皮を加える。青皮の性は温である。

【処方】蒲黄9 g 五霊脂9 g 青皮6 g 川楝子3 g 以上一日分、水煎服用。

症状は何もなくなった。舌色も改善。トランキライザーは就寝前に呑むだけになった。

「寝る前なんか、安定剤は要らないんじゃない？」

「そうですね。止めようと思えば、止められるとは、思うんですけど。」

「まあ、体調を見計らって、止めるの、挑戦してみてよ。」

花癲

わたし、A君と結婚したんだ。もうすぐ、赤ちゃんも産まれるよ。

アッチちゃんとは言うが、もう大学生である。ちょっと幼い感じだが、とても素直で可愛いので、お姉ちゃんより育てやすいと思われていた。電話で変な事を言ってると思うこともあったが、お母さんはあまり気にしていなかった。しかし、人気ロック・グループのメンバーで、歌手のA君と結婚しているとか、もうすぐ子供が産まれると言うに至っては、放っては置けなくなり、お母さんは急遽、彼女のマンションに駆けつけた。

マンションに来て見ると、アッチちゃんの妄想の中では、既に大好きなA君との間に、可愛い赤ちゃんが誕生しており、その為に彼女は大声を張り上げ、毎日大忙しである。直ちに精神科を受診。発病時期は正確には分からない。しかし学校へはかなり前から行ってなかった。

「お医者では今年の初めから、ずっとルーランって言うのを頂いてます。」

「症状は幾らか良いですか？」

「いえ、何にも変わらなくて、お薬も変えて頂けないんで。」

アッチちゃんは私達の会話を聞いている。興奮しているのか顔が赤い。彼女にも尋ねてみる。

「あのね、色んな人の声が聞こえるんでしょ。それは、あなたが知ってる人？」

「うん。」

「例えば誰？」

「お母さんとか、お姉ちゃん。」

「その時、お姉ちゃんは、そこに居ないでしょ。聞こえてるのは、本当じゃないって分かる？」

「うん。」

「区別が付くの？」

「うん。」

「お母さん。現実と区別が付くって言ってる位だから、軽い方じゃないかと思うんだけど。」

「だから、お薬も、あれだけしか頂けないんですかね。一日たった一錠ですから。」

殺されるとか、監視されてるとか、妄想して怯える人もあるが、彼女の妄想は楽しいらしい。中国で花癲と言うのが有るが、それに類するかも知れない。夜間の排尿が三回である。腎虚かも知れない。

「そうなんです。実は小学四年まで、オネショしてたんです。」

「そうですか。」

「体力は有りそうですか？」

「さあ、いつも疲れたとか、だるいとかばかり言う子で。十二時間も寝てたりするんです。」

「病気は？」

「中耳炎くらいですかね。耳がジクジクして。今でも、小さい穴が鼓膜に開いてるらしいです。」

「恐がりですか？」

「ええ、お化けが怖くて、お姉ちゃんに馬鹿にされるんです。」

舌は赤い。奥に白苔がある。潤っている。あまり変わった所もない舌である。

脈が速い。緩数。脈拍は一分間に百を越えている。人迎気口も浮緩数である。

恐がりには腎虚である。オネショも鼓膜に開いた穴も腎虚かも知れない。脈数は熱である。手掌が汗で濡れている。腎虚で内熱の人も手掌が濡れる。腎陰虚内熱とする。処方では知柏腎気丸。

【処方】 乾地黄 6 g 茯苓 6 g 沢瀉 6 g 山薬 6 g 山茱 6 g 牡丹皮 5 g 地母 5 g 黄檗 5 g
以上一日分、水煎服用。二週間分。

服用の初めは、だるいとか疲れたとか言わなくなって、調子が良さそうに見えた。ところが一週間目、駅で倒れてしまった。眩暈に使う事もある六味丸を飲んでいるのに昏倒するとは、一体どうしたのか。補虚のつもりが逆に攻めてしまったのか。

舌の色が薄くなった。血虚になったに違いない。脈は速いまま。知母も黄柏も役に立っていない。

「小さい時、元気でした？」

「病気は無かったんですけど、二歳まで歩けませんでしたし、頸が坐るのも遅かったです。」

「運動は得意ですか？」

「全然ダメです。」

立つのが遅い。歩くのが遅い。髪が生えるのが遅い。歯が生えるのが遅い。しゃべるのが遅い。これを五遅という。アッチちゃんもそれに類する。ひどく運動が苦手というのも、その類かも知れない。腎虚には違いない。しかし「補」ばかりではいけない。脈が速く顔も赤いから、必ず「攻」を兼ねる必要がある。上手に攻めなければならない。

景岳全書に二陰煎という処方が有る。心腎二臓を補う処方である。方中に黄連や玄参があって、心腎の虚火を治す。数脈には清熱が必要である。

【処方】 乾地黄 5 g 麦門冬 5 g 玄参 5 g 酸棗仁 5 g 茯苓 5 g 木通 5 g 黄連 3 g 竹葉 3 g 炙甘草 3 g

以上一日分、水煎服用。二週間分。

元気になった。夜間尿も消失。倒れたりもしない。ただ幻聴がある。朝は特に騒々しく大声で騒ぐ。お母さんが注意すると、空想と現実との区別は出来ていると言うが、それを止めるのは難しいらしい。

アッチャんに尋ねる。話は通じる。しかし目をまん丸にして不安と緊張の入り混じった顔で、返事とはびっきり短く「いいえ!」「べつに!」「ありません!」「はい!」「ちがいます!」と早口で、口をとんがらかして答える。事実を突き付けられ、妄想だと言われ、得体の知れない不安と緊張の中でアッチャンは立ちすくんでいる。恐がりなのにお化けに会ってしまったのだ。

舌と脈を診る。舌の色が薄かったが赤い舌に戻った。苔は消失。脈拍は一分間に百以上。数脈である。黄連でも脈が減らない。脈は緩洪と弦長とが交代して現れ、やや滑も混じる。妄想が止められない。方法を二つ考えた。ひとつは甘麦大棗湯の合方。もうひとつは天南星の加味。甘麦大棗湯は「補」である。アッチャんの幼い感じが、甘麦大棗湯を連想させる。脈の交代は肝気の異常である。甘麦大棗湯は肝気を調節する。

天南星は「攻」である。去痰する。実はアッチャンには痰の徴候は何もない。舌の白苔は消え、滑脈もあまりハッキリしたものではない。脈が速く拍つので緩が滑にみえるだけである。ただルーランによる副作用か、体重が十五キロも増えている。肥って痰が出来たかも知れない。先ず攻める方からやってみたい。攻められそうな時は攻めてみないと勝機は掴めない。天南星を加える。

【処方】 乾地黄 5 g 麦門冬 5 g 玄参 5 g 酸棗仁 5 g 茯神 5 g 木通 5 g 天南星 5 g
黄連 3 g 竹葉 3 g 炙甘草 3 g 以上一日分、水煎服用。二週間分。

独り言が小声になった。学校にいる間は幻聴は聞こえない。マンションでも幻聴がハッキリ人の声に聞こえる時とザワザワした風の音に聞こえる時がある。また聞こえても返事を返さなくなった。

天南星で攻めたら血虚になって、昏倒しないかと恐れたが、その気遣いはなかった。緊張した返事の仕方でなくなったが、冷静になって自分の状況が分かるようになったか、ちょっと悲しそうな顔でいる。脈を診る。脈はまだ速い。診脈中、アッチャンは独りニヤニヤしている。いつもは何も言わないのだが、今日は何が可笑しいのか尋ねてみた。すると急にアッチャンが怯えた顔になった。いつもお母さんに「ニヤニヤしないで!止めなさい!」と言われていたらしい。

私はニヤッと笑い掛け、小さい子をからかう様な調子で「笑っても良いんだよ。知らなかった?」と言ってみた。途端にアッチャンの顔から笑みがこぼれ、その一瞬は自信さえ取り戻して、大学生のお姉さんらしい顔になった。二陰煎加天南星を続ける。

「あの、この子、この頃よく、ひっくり返るんです。」

「メマイですか?」

「さあ、分からないんですが、以前にも病院で検査したんですけど、脳の病気ではないって言われて、治ってたんですけどね。また二ヶ月くらい前から、度々そうなるんです。」

突然昏倒する。バタンと倒れてしまう。先日も椅子に座っていて、後ろ向きに昏倒した。情動の変化ではなく、力仕事をした後などに昏倒する。甘麦大棗湯を加える。

【処方】 乾地黄 5 g 麦門冬 5 g 玄参 5 g 酸棗仁 5 g 茯神 5 g 木通 5 g 天南星 5 g 黄連 3 g 竹葉 3 g 炙甘草 5 g 大棗 5 g 小麦 20 g 以上一日分、水煎服用。二週間分。

倒れなくなった。独り言もない。しばらくすると幻聴も消えた。私と普通に話が出る。脈はまだ時々速い。黄連を一日 5 g にする。

もう卒業である。大抵の子は退学してしまうが、お母さんが家を放り出してマンションで一緒に生活して、お陰で無事に卒業できた。

面熱

面熱眩暈、自汗足冷、人迎浮大は陽明の風熱。

ミサホさん。七十二歳。県南の方言。語尾に「なし」が着く。

「顔が、火照って火照って、いけんのじゃがなし。」

「今も少し、赤いですね。」

「ええ、これがなし、お日いさんに当たったら、も一つと赤うなってなし。フーラフラしてなし。」

「メマイですか？」

「目は回わんのですがなし、身体が揺れて、フーラフラしていけんのじゃがなし。」起床時は眉間から鼻にかけて赤い。そのうち顔全体に真っ赤に腫れ上がる。下手に日光にでも当たると、二三日も腫れが引かない。痒みや痛みはない。顔が赤くなると足が冷くなる。

顔が赤くなるとフラフラも始まる。倒れるかと思う事もある。フラフラは午前中がひどい。まれに天井がグルグル回る眩暈も有る。吐き気はない。

多汗症である。ちょっと動くと汗が出る。盗汗はない。水分は多く摂る。他に「歳ですけんなし。」とあきらめているが、坐骨神経痛、耳鳴り、便秘、不眠症等がある。不眠のために安定剤を常用しているが神経質ではない。おおらかな印象の婦人である。

舌を診る。白苔がある。舌色は紫色。潤ってフニャフニャした力のない舌である。虚証なのだろうか。

脈を診る。脈は弦大緩。人迎が気口より大きい。人迎は浮弦大。人迎の脈大は外感である。肝の内風というものもあるが、ほとんどは外に風寒が客す。脈拍は一分間に七十六。よく分からなかったので面熱を「のぼせ」として女神散を選ぶ。脈は無視した。

【処方】 当黄 3 g 川? 3 g 白朮 3 g 香附子 3 g 桂枝 3 g 黄? 3 g 枳榔 2 g 黄連 1. 5 g 甘草 1 g 丁字 1 g 大黄 1 g 以上一日分、水煎服用。二週間分。

「煎じ薬を飲むようになって、よう寝られるようになってなし。」と電話をもらう。早合点してはいけない。案の定、少しも良くなっていない。県南の人は我慢強いのだ。何とか治るよう研究してみますと言うと「はい。ジューククリ治してやんなせえ。」とってくれる。

人迎は浮弦大。気口より人迎が大きい。病は内になく外にある。しかし何経にどんな邪気が客しているのか。弦の脈は少陽と言うが、柴胡の証には見えない。

面熱足冷、眩暈耳鳴、多汗と多飲。顔面は胃である。胃は陽明である。陽明病は自汗である。面熱を陽明胃経の風とする。汗出の陽明経病なら処方は升麻葛根湯である。多飲は葛根が治す。頸が凝るとメマイするのだから、葛根で頸の凝りを治せば、フラフラも治る。古今方彙の面病門に、陽明経の風熱を治す衛生寶鑑の升麻黄連湯という面熱の処方がある。外を解して陽明の風と熱が去れば、足が暖まり面熱が去る。足冷は裏寒や血寒や?血ではない。外風である。

【処方】葛根 8 g 升麻 4 g 白芍 4 g 黄? 4 g 蒼朮 4 g 川? 3 g 白? 3 g 薄荷 3 g 荊芥 3 g 甘草 3 g 黄連 2 g (犀角は省略) 以上一日分、水煎服用。二週間分。

面熱はかなり軽減。服薬中に日光に当たる機会もあったが、顔は腫れなかった。フラフラしない。睡眠は更に改善された。続服二ヶ月。面熱は完治した。

〔文献摘録〕

【衛生寶鑑】卷九・諸風・升麻湯辨。

陽明の本は実。標は熱である。陽明経に邪気を受けると、脈が尺寸俱に長になる。本実の脈は沈実。標熱の脈は浮長である。陽明の標熱の治には発汗を禁じる。そこで宋の銭乙は陽明の風熱の処方、升麻葛根湯を作ったのである。

私（羅天益）が揚夫人を診た時、夫人は頭がフラフラするほど面熱がひどく、脈は洪大有力で、清熱薬は効果がなかった。そこで、私は調胃承気湯に黄連と犀角を加えたもので下して本の実を去り、次いで升麻葛根湯に黄連を加えて、経絡中の標熱を治した。升麻葛根湯に黄連を加えて面熱を治し、附子を加えて面寒を治すというのは、実は傷寒論の葛根湯に依っている。麻黄湯は発汗、桂枝湯は止汗と言うが、葛根一味でも止汗する。桂枝は衛に行き、麻黄は営に行き、葛根は営衛の下の筋肉に行く。（元・羅天益）

蕁麻疹

風は左寸に表れ、なぜか人迎に表れず。

「バアアッて、手とか足とかに、痒いのが出るんです。」

「蕁麻疹? 蚊に喰われた時みたいな点々? それとも、もっと地図みたいに広がってる?」

「地図の方だと思う。次の日には、もう消えてるけど。」

「爪立ててガリガリってやったら、ミミズ腫れになる？」

「うん。なる。なる。それから、お台所で水使っても出る。」

小林聡美さん。三十二才。蕁麻疹。色はピンクで地図状。斑疹はさほど盛り上がらない。胸腹には少なく手足と顔面、背中に多い。手足は伸側に多く屈側に少ない。季節は秋冬に多く夏は稀。

そもそも出たり消えたりするのは風である。風邪の疹は外に出る。手足と頭面は外。対する胸腹は内。背は外。腹は内。手足の伸側は外。屈側は内である。この人の蕁麻疹は外に多いから風である。春夏にすくなく秋冬に多いと言うから、風熱ではなく風寒である。

しかし丘疹にならず斑疹になる所が風邪らしくない。恐らく虚か水滯があって斑疹になるのだろう。ただ、あまり膨隆しないから水滯は多くない。

舌は潤って苔はなく色が暗い。暗色の舌は陽虚とする。しっかりして厚みもあり、乳頭もハッキリしているから虚ではない。病はまだ外である。

脈は浮緩数。脈拍は一分間に八十四。左寸が目立つ。浮大である。左寸は外である。人迎と気口は左右差がない。つまり風は左寸に入って人迎には入らなかった。実は、左寸を人迎に宛てる流派もある。

桂枝加黄耆湯はどうか。黄耆は気を補い肌表の水を去る。

桂枝加黄耆湯の証は自汗である。彼女に汗が多いかどうか尋ねる。すると「いえ、寒がりなので。」と言うので防風も加え発表を強める。処方桂枝加黄耆防風湯。

【処方】桂皮 4 g 白芍 4 g 大棗 3 g 炙甘草 2 g 生姜 1 g 防風 4 g 黄耆 6 g
以上一日分、水煎服用。七日分。

蕁麻疹は出なくなった。風が人迎に入らず左寸に入る例は珍しくない。

沢蘭

さすが本物。肝鬱にもちゃんと効く。

以前の沢蘭は菊科の蘭草（フジバカマの類）だった。今は紫蘇科の沢蘭を使っている。本物になって、平肝解鬱の効果は確実になった。

U氏。四十六才。半年前から蕁麻疹に悩んでいる。赤い地図状の蕁麻疹が手足、腹、背、唇に出る。胸には出ない。痒みが強い。手足ではやや内側が多い。大きさは五百円硬貨ほど。午後の三時頃までは出なくて、夕食から後に出て、二時間か三時間で消える。大きく盛り上がっている時は赤く、平坦になるとやや色が淡くなる。

体格が良くガッシリしている。但、陽気な人ではない。なんとなく陰鬱な印象である。皮膚は浅黒い。大便は三日に一度。但し出る時は下痢。足は冷えない。肩は凝らない。

「ビールとか飲んだら、ひどくなりますか？」

「ビールは、ちょっと分かりませんが、日本酒を飲むと蕁麻疹が消えます。」

「消えるんですか？ 珍しいですね。大抵ひどくなるんですが。お風呂はどうですか？」

「風呂もサウナも関係ないんですが、水風呂は、入ったら出ましたね。」

「冷やすといけないんですかね。冷房は？」

「いや、夏は蒸し暑い方がよく出ました。」

寒熱は決めがたい。腹背に出るから内外も決まらない。飲酒で蕁麻疹が消えるというのは初めて聞く。飲酒で血行が良くなって消えるとすれば、寒証である。体温が上昇する午後になって出るとすれば熱証である。しかし、水風呂で発症するなら寒証である。

舌を診る。大きさは普通だが分厚い。丈夫な人のようだ。粘った多量の白苔がベッタリ付いている。白苔は柴胡だろうか。舌の色は紫色である。?血を疑う。

当初、脈は大きな身体に似合わず細弱。訝しく思いつつ診脈を続けると、脈は次第に大きく有力になり、弦緩になった。同様に人迎気口も浮小から浮弦大に変わり、最終的には人迎が気口より大きい外感の形になった。寸は左が右より大きい。脈拍は一分間に八十四。速い。

尺寸では寸は外である。左右では左手が外である。人迎気口では左の人迎が外。人迎と左寸が大きい。即ち病が外に在るという意味である。しかし、そもそも蕁麻疹とは風の病である。風の病に外感の脈が表れても、病の所在が体表面であるという程の意味しか無いのではないかと気がついた。脈状が変化するのは気滞である。肝鬱気滞かも知れない。

そんなことを考えながら脈を診ていると、あまり長く脈を診過ぎ、彼に何かおかしいかと尋ねられた。それで「蕁麻疹の原因は、ストレスじゃないですかね。」と言った。すると、彼はニタリとほくそ笑むような表情になり「色々ありましたからね、つい二ヶ月ほど前まで、会社の人間関係、最悪でしたから。」と言う。ストレスだと言われて嬉しそうな顔をする人は珍しい。

肝鬱気滞とする。舌の紫とも併せて考えると、肝鬱気滞血?である。体温が高くなる午後から発症するのは柴胡。舌の多量の白苔も柴胡。飲酒して血液の循環が良くなって消失するのなら、行血が必要である。四逆散で肝鬱を治し、?血薬で行血する。更に荊芥と防風で直接に皮膚に働きかけ、去風止痒する。

処方血府逐?湯加荊芥防風。

【処方】 桃仁 4 g 紅花 3 g 当帰 3 g 川? 3 g 赤芍 3 g 柴胡 3 g 枳実 2 g 甘草 1 g
牛膝 3 g 桔梗 2 g 荊芥 3 g 防風 3 g 以上一日分、水煎服用。二週間分。

無効だった。十分に辻褄が合っていたはずだったが、目論見は外れた。寧ろ服薬によって矛盾が大きくなったか、大きかった寸が更に大きくなっている。風は寸に表れる。

処方を変更する必要がある。ところが、なかなか彼が同意しない。あれほど自信ありげだった癖に、もう方針変更か、という事かも知れない。ちょっと気難しい所のある人らしい。

何しろ一度失敗している。やむなく説得は諦め、雑談を始めた。ところが雑談中、ふと私が「やっぱりストレスが一番の原因でしょうね。」と口にした途端、彼がウンウンとうなずく様子をして、あっさり納得してくれた。ストレスという言葉、余程、聞いたかつ

たようだ。

処方 は 沢蘭 と 益母草。平肝解鬱には 沢蘭。沢蘭には 駆血 の作用もある。去風止痒に 益母草。益母草も 活血する。沢蘭にも 益母草にも 行水 の効がある。ベタベタした 白苔 は 湿 である。大きな 斑状 の 皮疹 は 大きな 水疱 とも言える。去湿すれば 盛り上がった 疹 も 縮小する。

【処方】 沢蘭 10 g 益母草 10 g 以上一日分。水煎服用。二週間分。

効果があった。毎日出ていたのに出ない日がある。しかも 斑疹 の 径 が 縮小して、ビー玉 くらいの 大きさ になった。出る 数 も 減った。更に一ヶ月、同じ 処方 を 続けて 完治した。

山茱萸（1）

頭に 発疹、小豆の如く。なぜか 頭 は 凸凹。

佐川久太郎翁。背筋がピンと伸びている。赤いネクタイがしゃれている。九十才には 見えない。

ちょっと 頭 を 触って みて くれ と 言う。なぜと 頭 に 何カ所か 地腫れ した 所 が あり、頭 は 凸凹 である。凸部の 長径 は 五センチ ばかり。高さは 数ミリ。他に 短く 苳った 白髪 の 中に、小豆粒大の 暗赤色 の 発疹 が 二十個 ほど 見える。地腫れ した 所 に 発疹 が ある 訳 で は ない から 両者 は 直接 には 関係 が ない。

頭の 凸凹 は 何の 事 や ら 分 からない。まずは 発疹 から 手掛ける。発疹 には 痒み が ない。痒み の ない 発疹 は 難物 である。痒み が なくて 色 も 暗い から、実熱 では あり ない。

高齢 である。虚火 なら 地黄 や 玄参 で 滋陰 清熱 するが、そんな 方法 が 通用 する か どう か 分 からない。気の上衝 として 取り扱う の が 良い か も 知れ ない。しかし、それは 肝腎 を 補う だけで 皮膚病 を 治す 事 だけ から、なかなか 難事 である。

舌は 乾燥 している。全体に 薄い 白苔 が ある。色は 濃紅色。

脈は 弦緩。寸は 微。尺は 弦大 有力。脈拍 は 一分間 に 七十二。一息 三動。息が 荒い。診脈 中にも 一息 毎に ウーンウーン と 小さく 声 が 漏れる。九十才 である。

舌の 濃紅色 は 内熱 か？ 血 だろう が、寸脈 は 微 である。陰虚 内熱 なら 寸 は 大きく なる。濃紅色 の 舌 と は 矛盾 するが、寸微 は 気虚 か も 知れ ない。さて、よく 分 からない。寸微 は 無視 して、まずは 陰虚 内熱 として 景岳 全書 の 一陰煎 を 作る。肝腎 虚火 の 処方 である。

【処方】 乾地黄 5 g 白芍 5 g 麦門冬 5 g 牛膝 5 g 丹参 5 g 甘草 2 g 以上一日分、水煎服用。十日分。

当初、頭の 凸凹 も 発疹 も 急速 に 改善 した。しかし 続けると、すべて 元 に 戻って しまった。巧い か ない の も 道理。寸微 だけ から 陰虚 ではない と 言いながら、肝腎 陰虚 の ための 処方 を 使っている。そもそも 頭の 凸凹 と は 何か。浮腫 だろうか。夜は 二時間 おきに 排尿 する。いづれ に せよ 補虚 しかない。

舌を 診る。乾燥 している。熱が 冷めた か 舌色 が 薄く なる。丹参 の 行血 が 効いた の か？

そうだとすれば、?血が存在している事になる。

脈を診る。脈は弦硬である。緩が消えて硬になった。しかも左の寸脈が見あたらない。寸が無くなったのは、少なかった陽気が更に減少した証拠である。脈が硬くなるのも陽気の不足である。脈が硬くなるのはよろしくない。特に老人では大問題である。補陰して悪ければ補気しかない。甘草で補気する。

処方三甲復脈湯加減に丹参を加える。

【処方】甘草4g 乾地黄4g 白芍4g 麦門冬4g 牡蛎4g 鼈甲4g 亀板4g 丹参4g
以上一日分、水煎服用。十日分。（阿膠・麻子仁は去った。）

無効だった。但し甘草の補気補津は成功らしい。舌の乾燥がなくなった。舌色は更に良くなり淡紅色。脈は硬が去り緩が戻った。両寸は微。左寸も回復している。しかし左尺の腎の脈は虚である。地黄で補腎出来ない腎虚とは何んだらうか。

診ているうちに脈が変化する。初めは細。後は弦大緩。肝気に異常がある。三甲復脈湯は炙甘草湯の変方で、成功しなかったが牡蛎、鼈甲、亀板で平肝して、頭へ上っている肝気を収め、炙甘草で心気を補う手はずであった。

肝腎の陰は補わず、心気と腎気を補って、頭へ上がる肝気を収斂する方法はないだろうか。すると、翁が去年はずっと動悸があり、今は脳が鳴るという話をする。脳鳴というものがある。耳鳴りではない。脳鳴は髓海の不足が原因で、その脈は尺虚であると聞く。脳鳴は気の上衝である。

山茱萸はどうか。九十も越えてカクシャクとしていけば肝気を消耗する。山茱萸は補肝する。張錫純によれば、山茱萸は疎泄大過で真気の脱越せんとするものを収斂するという。

真気を収斂すれば、補心する事になり、補腎も出来る。山茱萸で頭に上がる気を収斂すれば、発疹が治る。上がっている気が下れば、水が降りて頭の凸凹も治る。山茱萸を主薬に竜骨、牡蛎、牛膝、丹参を配合する。丹参は行血去?。竜牡は補腎平肝斂気。牛膝は腎を補って上の気を下へ降ろす。

【処方】山茱萸10g 竜骨10g 牡蛎10g 牛膝10g 丹参10g 以上一日分。水煎服用。
十日分。

「やれやれ、今度こそ良くなりましたぞ。」

「ああ、ほんとに。治った痕が茶色くなって残ってますね。」

「腫れも、引いとりましたよ。」

「ああ、そうですね。触っても凸凹がありませんね。」

数ヶ月で完治した。昔、恩師に聞いた所によると、国訳本草綱目頭注にある通り、古来使われてきた山茱萸の原植物は不明で、現在市場に流通する山茱萸は偽物であるという。従って本草書の山茱萸の記載は臨床の参考にはならない。張錫純は親試実験によって偽物の用法に習熟した。

山茱萸（2）

証を弁じ治を論じ、勘定は合っても、銭は足らず。

森さん。六十才。糖尿病。血糖は空腹時で百六十。体格は丁度良い位。色が黒い。ゆっくりとした話し方。控えめな性格の様である。

舌を診る。大きくて幅が広い。潤っている。色が淡く暗色である。?血かも知れない。舌の中央に縦に一本、亀裂が入っている。亀裂に沿って白苔がある。

脈を診る。脈拍は一分間に六十。遅い。関は左が小さい。肝虚である。寸は細。寸は右が大きい。右寸大と左関小で肝血虚とする。尺も左が小さい。腎虚である。関と尺に弦と緩が交代で現れる。脈弦は肝である。脈の交代は気滞である。従って肝鬱気滞とする。実は舌の縦の亀裂も肝鬱を意味する。人迎より気口が大である。気口浮大は内傷である。やはり血虚とする。

血虚に四物湯。肝鬱に四逆散。?血に桃仁紅花。左尺小に地黄。処方血府逐?湯。そもそも糖尿病は脾臓の?血である。更に丹参を加え駆?血の作用を強化する。丹参は単独でも血糖降下の作用がある。

【処方】 桃仁 4 g 紅花 3 g 当帰 3 g 川? 3 g 赤芍 3 g 牛膝 3 g 柴胡 3 g 乾地黄 3 g 枳実 2 g 桔梗 2 g 甘草 1 g 丹参 4 g 以上一日分、水煎服用。十五日分。

一ヶ月で血糖は百二十まで下がった。尿糖は（+）。もともと薬の効果ばかりとは言えない。彼女が食事を減らしている。体重も減った。しかし舌色が暗紅から淡になった。血虚か気虚になったに違いない。あわてて人参を 4 g 加える。人参を加えて舌色は回復。しかし尿糖が消えない。試みに人参を去って丹参を 8 g に倍増する。血糖は百十五。但し尿糖は（+）のまま。再度丹参を増して 12 g。血糖は百〇四。やはり尿糖は（+）。しかも舌がまた淡になってきた。処方が強すぎて虚が現れるのかと、思い切って四逆散を去る。

処方桃紅四物湯加丹参。

血糖は九十六。尿糖は（+）。四逆散は血糖低下に少しも寄与していなかった。舌は淡色のまま。この頃は彼女もあまり食事を減らしていない。体重も戻っている。血糖の低下は、ほとんど丹参の効果に見える。そこで桃紅四物湯も去って、丹参一味を残し、舌淡には鶏血藤を加える。

【処方】 丹参 15 g 鶏血藤 15 g 以上一日分、水煎服用。三十日分。

この処方は良かった。尿糖の出る機会が少ない。血糖は九十二。結局、最初の弁証論治は全くの辻褃合わせに過ぎず、血府逐?湯は血糖にも尿糖にも関係していなかったと分かる。舌色も改善した。鶏血藤には補虚と行血の作用がある。

この頃A1Cは5.5である。この処方を二ヶ月継続した。尿糖もほぼ消失した。

ところが、その後は蕁麻疹が出るとか、風邪から蓄膿症になって食べ物の臭いが分からなくなる等、不調が続き、また尿糖の出る機会が増えて来た。そこで鶏血藤を去って代わ

りの薬物を探す。

まずは丹参に葛根15 gを配合。鼻と蕁麻疹と尿糖を目標にする。葛根は行血薬でもある。しかし逆に尿糖の出る機会が増える。次いで丹参に白僵蚕15 gを配合。蕁麻疹と尿糖に効くはずだったが、無効。そして丹参に川?15 gを配合。良効だった。尿糖が減少して、蕁麻疹や鼻の問題も解決した。川?は行血する。肝鬱にも効く。四逆散に川?を加えた肝鬱の処方が沢山ある。しかし同じ処方続けると、また尿糖が問題になり始める。遂には月の半分も尿糖を検出する。おまけに彼女の脚に浮腫を発見して、押さえると凹んでなかなか戻らない。

ふと、山茱萸を使おうと考えた。舌の淡は虚である。何処かに虚がある。四物湯は無意味だったから、血虚ではない。四逆散で肝気を調節しようとして虚実を誤ったが、四逆散の証と見えた肝気の異常に山茱萸が効くかも知れない。山茱萸には補心の効果がある。この人は常に脈が遅い。心気虚かも知れない。山茱萸で心気を補えば、血気が流行して、尿糖や脚の浮腫が治る。

【処方】丹参15 g川?15 g山茱萸15 g 以上一日分、水煎服用。三十日分。

尿糖はたまに出るだけになった。舌色も良くなった。浮腫も減少。血糖は百十五。しかし舌に白苔が増えている。舌の白苔は脾虚である。更に山薬を15 g加える。尿糖は検出しなくなった。浮腫も消失。脈拍は一分間に七十二。

一味芍薬湯

桂枝湯から桂枝、甘草、生姜、大棗を去って芍薬を残す。

娘。妊娠五ヶ月に至り、なお悪阻激しく、食臭を憎み吐食止まず、食終わって即ち吐し、また朝に食して暮れに吐し、吐すに食を選ばずという状態。連日すさまじく嘔吐するので、遂には娘の旦那にも悪阻が移り、自分まで気持ちが悪くなって、これ以上は面倒が見られないから、実家に帰れという事になった。里帰りした娘。素より体は虚弱で懐胎の前には虚冷甚だしく、処方真武、理中、当帰補血湯などが適合したが、不思議なことに懐胎の後には常に身熱があるようで、毎日熱い熱いと訴え、自汗口乾口渴があり、また顔や脚には浮腫があった。

脈は大きくて速い。緩大無力にして数。熱である。人迎は浮大。気口は浮小。舌には白苔があり、やや乾燥して赤い。人迎大、気口小は外感中風の脈である。桂枝湯の脈である。

身熱があつて脈が早く、舌は乾いて赤いので清熱したいが、素より虚弱な上に数ヶ月も禄に食べていないから方法が難しい。やむなく桂枝湯、銭氏白朮散、八解散、黄土などをを用いるが効果がない。第一わずかな臭いにも嘔吐するので煎じ薬は服薬さえ難しい。

そこで丸薬ならばと六味丸を用いた。六味丸は外感中風の脈とは全く合わなかったが、激しい嘔吐を治めるには、どうしても何らかの清熱が必要と考えた。

六味丸はやや有効と思われた。嘔吐の回数は半減し、始終吐き気を催しているという状況ではなくなった。それでも嘔吐のすさまじさは可成りのものである。

芍薬に思い至る。葛根湯から桂枝、麻黄などを去って升麻葛根湯が作られた事をヒントに、桂枝湯から桂枝、甘草、生姜、大棗を去って芍薬を残す。芍薬一味と雖も桂枝湯の処方であるから、人迎は浮大でよく、桂枝湯で発表を忌むほどの虚証だから、人迎浮大は人迎浮虚大となるはずと推量した。

芍薬は脈を収縮する薬物である。しかし脈は非常に大きいから問題はない。先ず試みに白芍の粉末3グラムを一日に数回、服用させた。著効があった。すぐに湯剤に改める。

【処方】白芍40 g 以上一日分、水煎服用。七日分。

服用すると、悪阻も身熱自汗浮腫も早々に解消し、すっかり元気になって嫁ぎ先へ帰っていった。

お産は初産にも関わらず至って軽く、二時間ばかりで産れて母子共に壮健であった。ところが出産の翌朝、私が見舞うと、娘は元気に迎えてはくれたが、顔も脚も一気にむくんで脚は象のようになり、指で押すと大きく窪んで戻らない。出産による脱肛もひどい。脈は浮数で人迎は浮虚で甚だ大きく、気口は浮小。脈は悪阻の頃と同じである。そこで白芍一味を煎じて服用させた。

【方】白芍40 g 以上一日分、水煎服用。十四日分。

一服すると肛は一気に収まり、浮腫も全く去った。二週間ばかり継続。産後に白芍を忌むという説があるが、時と場合によるらしい。

後に娘には人迎浮虚大を目標に、しばしば白芍一味を用いた。例えば甚だしい歯痛で神経痛のように痛みが走るのに白芍四十グラムを煎じ服して即治した。また感冒の後に急性の蓄膿症になり、鼻から黄色の鼻汁出て悪臭が有る時にも用いた。

さて、一味芍薬湯の証とは何か。その目標である人迎脈の浮虚大は外感を意味している。

病は外にある。即ち白芍一味は桂枝湯、桂枝去桂加白朮茯苓湯などの外感処方の芍薬一味を残したもので、その証は外感に属する。特に桂枝湯の中から桂枝、甘草、大棗、生姜の四味を去るとは、衛気（外方向）に働く薬味を全て除き、内方向を守る芍薬一味だけを残したものである。即ち桂枝湯証をやや内に移した虚証、或いは桂枝去桂加白朮茯苓湯証の裏飲なきものが、その証である。いずれ虚により病を外に形作るもので、芍薬一味で営を補い外の病を解する。

清代の?配本草という本の附録に奇経薬考という所がある。経絡の事はよく知らないのだが、それによると芍薬は陽維という経の寒熱を主どるらしい。

あまり信用なされない方が良いと思うが、以下のような文を作った。余興である。

○ 陽維の中風。寒熱自汗盗汗身腫、人迎の脈浮大の者、芍薬一味湯之を主どる。婦人の産後にも宜しく之を服すべし。

処方・薬物索引

[あ]

安中散(71)

[い]

一陰煎(156)

一貫煎(54)

一味芍薬湯(160)

[う]

温経湯(96)

温清飲(62)

[お]

黄?桂枝五物湯(82)

黄土湯(34)

黄?(122)

[か]

膈下逐?湯(143)(145)

夏枯草湯(132)

葛根湯(152)

葛根(152)

莢朮(121)

加味帰脾湯(87)

??根湯(102)(104)

甘草乾姜湯(10)(11)

甘草附子湯(42)

甘草瀉心湯(61)(63)

甘麦大棗湯(62)(149)(150)

[き]

帰?建中湯(22)

枳実薤白桂枝湯(114)

帰脾湯(85)(89)

帰脾湯合生脈散(109)

?帰調血飲(142)

[け]

桂枝加朮附湯(42)

桂枝加黄?湯(82)(153)

桂枝去桂加白朮茯苓湯(19)

桂枝茯苓丸(32)(96)

血府逐?湯(58)(155)(158)

建?湯(107)

[こ]

牛黄(120)

合歡皮(85)
香砂平胃散(26)
香蘇散(135)(136)(138)
吳茱萸湯(10)(12)
厚朴七物湯(28)

[さ]

柴胡桂枝乾姜湯(102)(109)
柴胡桂枝湯(72)
三甲復脈湯(157)
山茱? (157)(158)(159)
山藥(120)

[し]

四逆湯(9)
四君子湯(79)
滋血潤腸湯(116)
失笑散(146)
炙甘草湯(117)
芍藥(126)
四物湯加減(23)
十味敗毒湯(21)
十六味流氣飲(68)
小陷胸湯(38)
正氣天香湯(135)(136)(140)
小柴胡湯(67)(70)(71)(94)
勝勢飲(102)
消風散(93)
升麻黃連湯(152)
逍遙散(76)(111)
芍藥(160)
生脈散(52)(118)
參赭鎮氣湯(129)
舒經湯(100)
真武湯(10)(39)(41)(43)
參苓白朮散(81)

[せ]

清心温胆湯(106)
川?(159)
川?茶調散(91)
千金内托散(66)
錢氏白朮散(1)(160)

川楝子(146)

[そ]

疎経活血湯(142)

[た]

大柴胡湯(56)

大建中湯(17)

沢蘭(154)(155)

丹参(156)(157)(158)

[ち]

知柏腎気丸(148)

猪苓湯(4)

鎮肝熄風湯(107)(108)(129)

[て]

田三七(77)(149)

天南星(149)

[と]

桃核承気丸(30)

桃核承気湯(32)

当帰四逆呉茱?生姜湯(102)

当帰飲子(99)

当帰補血湯(14)

当帰建中湯(22)(102)

当帰芍薬散(40)

桃紅四物湯(158)

導滯通幽湯(24)

[に]

二陰煎(149)

二陳湯(49)

女神散(151)

[は]

白芍(160)

半夏(125)

半夏白朮天麻湯(90)

[ひ]

百合(123)

百合滑石湯(124)

百合地黄湯(124)

白朮附子湯(44)

白?升麻湯(97)

皮癬湯加減(133)

[ふ]

- 不換金正気散(60)
- 茯苓飲(110)
- 茯苓杏仁甘草湯(112)
- 茯苓桂枝甘草大棗湯(36)
- 附子粳米湯(18)
- 附子湯(95)

[ほ]

- 防己黄黄湯(46)
- 保元湯(83)
- 補腎湯(15)
- 補中益气湯(14)
- 補中益气湯合生脈散(109)
- 補陽還五湯(128)

[ま]

- 麻子仁丸(74)
- 味麦益气湯(109)
- 味麦帰脾湯(109)

[や]

- 益母草(155)

[れ]

- 苓桂甘棗湯(36)

[ろ]

- 六味回陽飲(48)